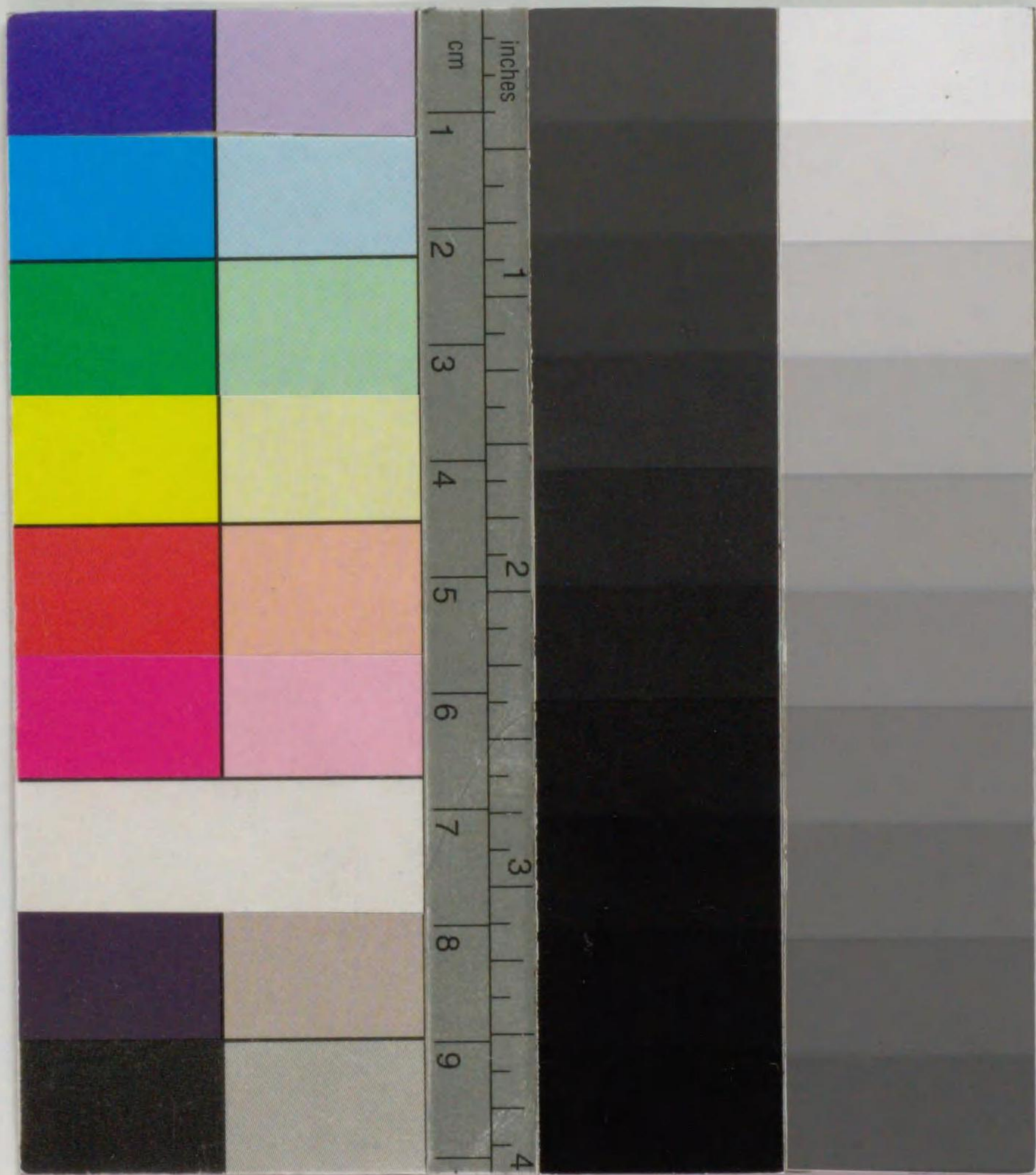


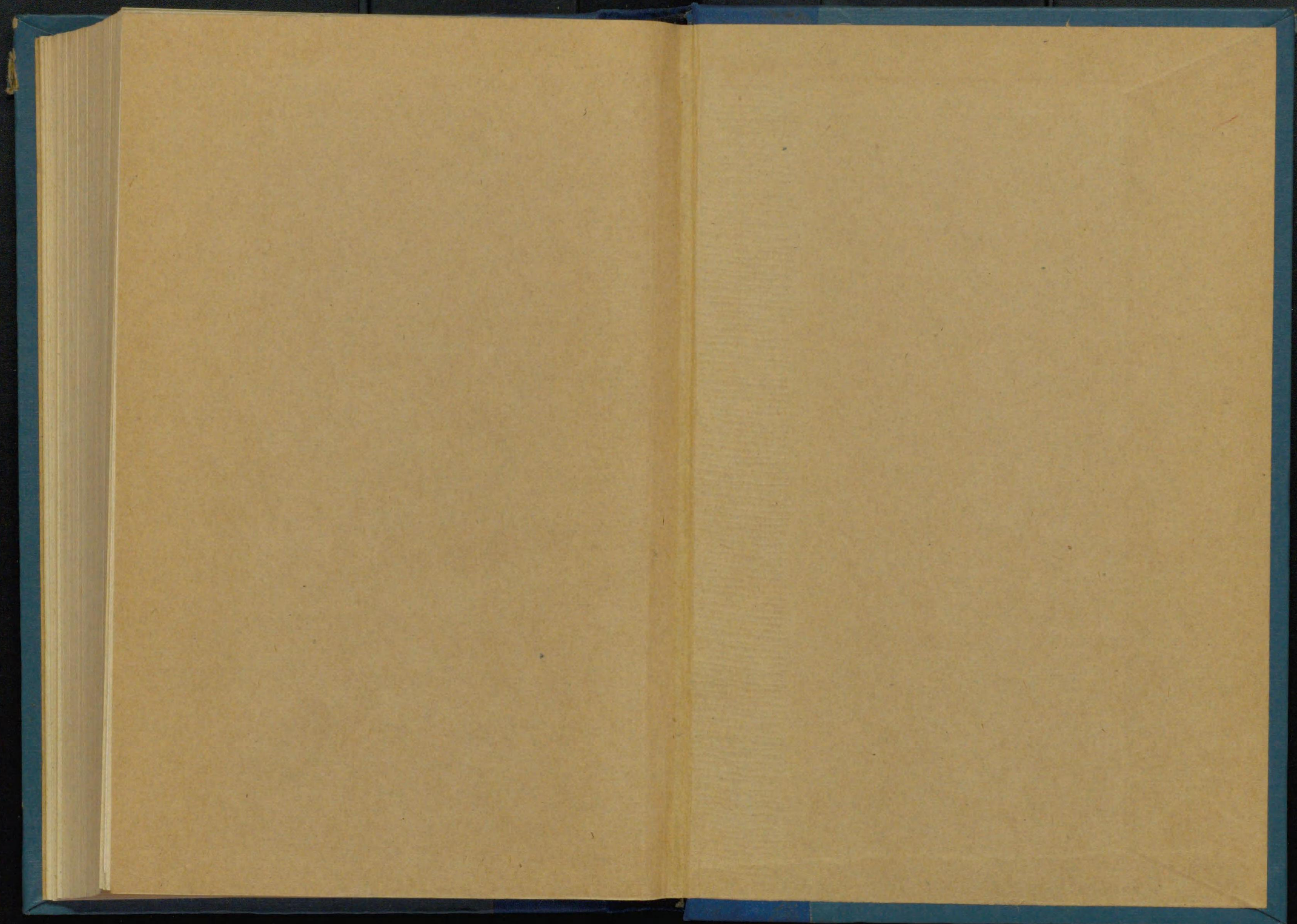
569-61



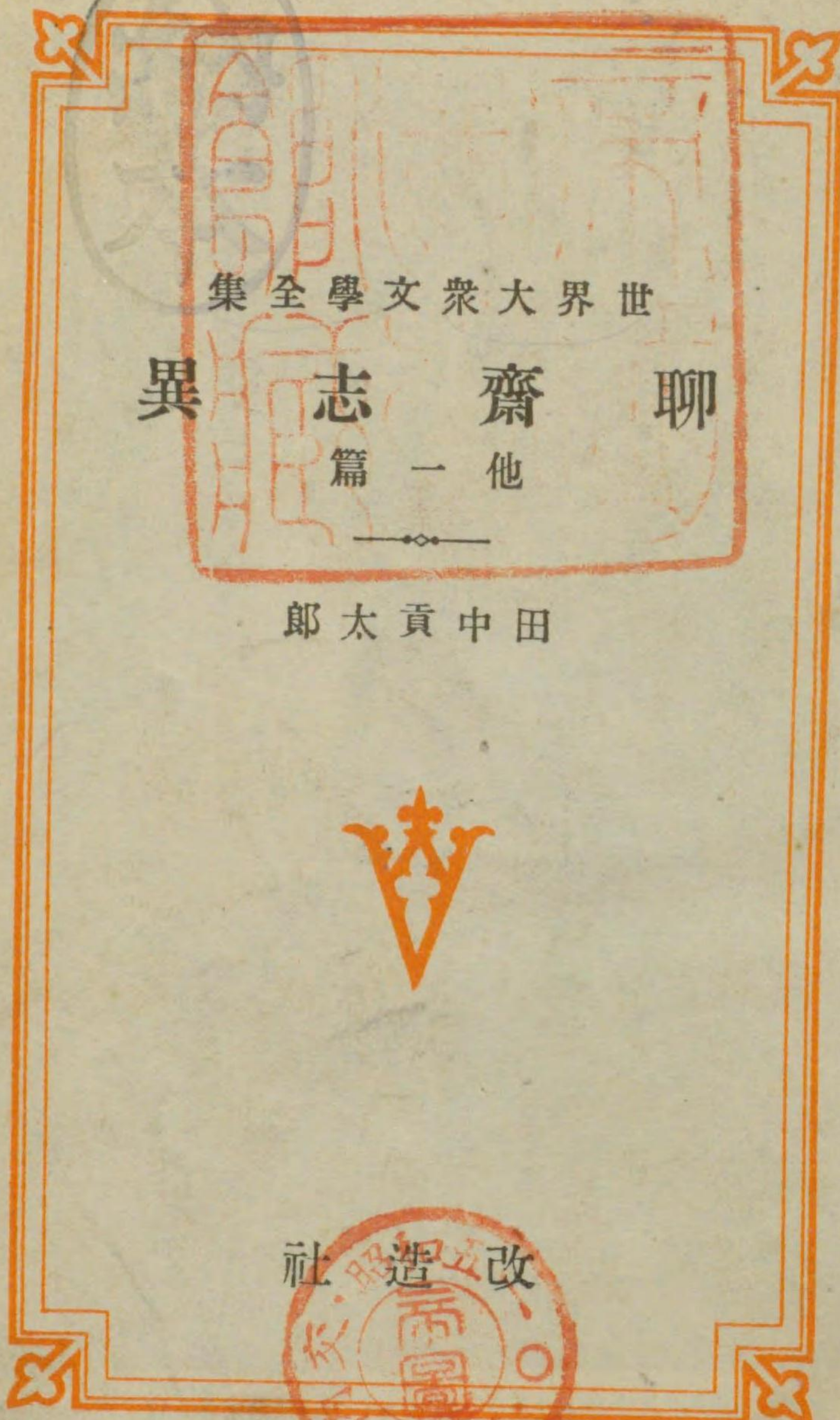
1200501517094

569  
61





252



世界大衆文學全集

聊齋志異

他一篇

田中貢太郎





阿織  
 故利親老思不禁  
 童来方為感良深  
 分層不惜分金葉  
 猶採區々羞羞心

は山。たつだ娘るあの嬌愛で麗寺、七六「は歳とる見しすで織阿の家かれこ」  
 (照卷百二七一)。たつ思といしほに嫁の弟非是

569-61

涼亭

—序に代へて—

蒲留仙 五十前後の瘦せてむさくるしい容をしてゐる詩人、胡麻鹽の長いまげらな鬚を  
生やしてゐる。

李希梅 留仙の門下、二十五六の貴公子然たる讀書生。

葉生 浮浪人、二十六七の春のひよる長い髪の赤茶けた碧い眼の青年。

旅人 甲、乙。

山東省淄川の某山村の街路に在る涼亭。それは街路の真中に屋根をこしらへ、左右に柱に添へて石臺を置いて腰掛けとしたもので、その中を抜けて往來する者が勝手に休んで往けるやうになつてゐる。その涼亭の一方は山田で、稲や黍を作り、一方は人家になつて十間ばかりの泥土の家が並んでゐて、前には谷川の水が流れてゐる小溝が在り、後には屋根越しに緑葉の間から所どころ石の現はれてゐる丘が見えてゐる。それは康熙年間の某夏の午後のことである。涼亭



者 譯

には蒲留仙が腰かけて、長い煙管をくはへながらうつとりして何か考へてゐる。その蒲留仙の右側の石臺の上には、壺のやうな器に小摺杓を添へて、その下に二つ三つの碗を置き、それと並べて古い皮の袋と煙管を置いてあるが、その壺には茶が入れてあり、皮袋には淡巴菰を詰めてある。そして左側には硯に筆を添へ、それと並べて反古のやうな紙の巻いたのを置いてある。また足許には焼火したらしい枯枝の燃えさしがあつて、絲のやうな煙が立つてゐる。蒲留仙はかうして旅人を待つてゐて、茶を勧め、淡巴菰を喫まして、牛鬼蛇神の珍らしい話をさせ、それを「聊齋志異」の材料にしてゐるところである。

そこへ村の男が一人、上手から来て涼亭の中へ入つて来る。竹で編んだ笠を着て、手の付いた箆に瓜のやうな物を入れ、それを左の脇にかけてゐるが、蒲留仙を見つけると、皮肉な眼付をする。

村の男 先生と張公の媽媽ぢや、辛抱がええわえ、今年でもう六年ぢや、毎日毎日、あの坂の上で、張公の歸りを待つてゐるが、なんぼ待つたところで、水に濡れて死んだ者が戻るもんか、氣違ひぢやからしかたがないが、考へてみれや、可哀さうなもんぢや、……時に先生、近頃は面白い話が聞けますか。

蒲留仙はやつと眼を開けたが、村の男の顔は見ずめんどくささうに云ふ。

蒲留仙 ……うむ、……うむ、話もね……。

そして淡巴菰の火が消えてゐるのに氣が注いたやうにして、足もとの燃えさしに吸ひつけて喫む。村の男はそのさまをじろじろと見る。

村の男 ほんとに學者と云ふ者は、辛抱がええな、あの赤い星が、雷のやうな音をして東へ飛んだ年にも、此所をつたと云ふぢやありませんか、蝗が雲のやうにこの村へやつて來た時にも、先生は此所にをりましたな、久しいもんぢや、辛抱がええ、張公の媽媽の氣違ひも、先生の足もとにや寄れないぞ。

蒲留仙 うむ……、うむ……、張公の媽媽か。

蒲留仙は雁首の大きな煙管に淡巴菰を詰めかへながら、相手にならないので、村の男は歩きだした。

村の男 やれ、やれ、御苦勞なことぢや、茶と淡巴菰の接待をして、蛇の色女に嘗められるやうな話を聞かうと云ふのぢや。

二人の旅人が下手から來て、涼亭の口で村の男と擦れ違つて入つて來る。その一人の甲は、菰で包んだ量ばつた四角な包を肩に乗せ、乙は小さな竹籠を右の手に持つてゐる。蒲留仙の眼はその旅人へと往く。

蒲留仙 ああ、旅の方だね、暑かつたらうね、休んでいつたらいいだらう。茶も淡巴菰もあるから、

あげるよ。

旅人甲は、蒲留仙の方を見てから會釋をする。

旅人甲 ありがたうございます。(それから乙の顔を見る) 休ましてもらはうぢやないか。

旅人乙 よからう、一ぶくさしてもらほう。

旅人の二人は蒲留仙の向ひへ往つて、荷物を置き、笠を除つて腰をかける。蒲留仙は煙管を置いて拵杓を持ち、壺の中の茶を二つの碗に入れる。

蒲留仙 茶をおあがり、淡巴菰もあるから、喫みたい方は、勝手におあがり。

旅人甲 それではお茶をいただきます。

旅人乙 私もお茶を先づいただきました、後で淡巴菰を一ぶくいただきます。

旅人甲から先に起つて蒲留仙の前へ往き、蒲留仙の汲んだ茶を取つて飲む。

蒲留仙 遠慮なしにおあがり、もつと入れてあげよう。

蒲留仙は拵杓を持つたままである。旅人甲は二はい目の碗をだす。

旅人甲 それではすみませんが、もう一ぱいどうか。

蒲留仙 いいともたくさんおあがり。

蒲留仙は旅人甲の碗を取つてそれに茶を汲んでやる。旅人乙は碗を置く。

旅人乙 私は淡巴菰を一ぶくいただきます。

蒲留仙 さあおあがり、淡巴菰はその袋の中に入つてゐる。

旅人乙 ありがたうございます。それではいただきます。

旅人甲は二はい目の碗をもらつて、それを持つてはじめの所へ行つて腰かける。旅人乙は皮袋に手をやつて口を開け、中から淡巴菰を撮みだして煙管に詰め、足もとの燃えさしの火でつけて、一すひして煙をだした後に、これもはじめの所へ往つて腰をかける。蒲留仙ももう煙管を持つて旅人の方を見てゐる。

蒲留仙 お前さん方は、何所から來なすつた。

旅人甲 勞山から來りました。

蒲留仙 ほう、勞山から來なすつたか、それはくたびれたらう、それにこの二三日は暑いから……。

旅人甲 しかし、山の中はたいへんに涼しいでございますね、路路いい水はありますし。

蒲留仙 水はいいよ、水のいいのは、山の中にある者の一徳だ、この茶は、あの谷から湧く水だよ。

蒲留仙は振りかへつて後の人家の屋根越しに見える丘に煙管をさす。

旅人甲 さうでございますか。

旅人乙 だからお茶でも味がちがひます。

旅人甲は碗を持つたなりに、旅人乙は煙管を口から離して、ちよつと體を前屈みにし、涼亭の軒越しに眼をやる。

旅人乙 なるほど、石があつて、木があつて、仙人のあるやうな山でございませぬ。

旅人甲 なるほどさうぢや。

蒲留仙は體の位置をなほして、旅人乙の顔を見る。

蒲留仙 仙人と云へば、お前さん方は、珍らしい話を聞いてやしないかね、何か面白さうな話があるなら聞かしてもらひたいが。

旅人乙 面白いはなし、さうでございませぬ。

蒲留仙 どんな話でもいいよ、狐の話でも、蛇の話でも、狼が女になつて人間と夫婦になつたと云ふやうな話でも、悪人の話でも、鬼に逢つた話でも、なんでもいいよ、わしは毎日、此所にかうしてゐて、旅の方に、いろいろの話をしてもらつてゐるよ。

旅人甲 それは面白い趣向でございませぬ、べつにこれと云ふ面白い話もございませぬが……、さうですな、私が家を出るすこし前に、こんな話を聞きました、唐と云ひまして、人の嚙では、匪徒の仲間入りをしてゐると云ふ男ですが、その男が二更の比に、酒に酔うて歩いてをりますと、その晩は月があつて、紅い著物を著た女が路のはたに蹲んでをるから、からかつてみるつもりになつたのでせうね、そつと背後から行つて、くすぐると、女が顔を此方に向けたが、どうでせう、その顔は、目も鼻も無い、つるりつとした白い肉のかたまりぢやありませんか。さすがの男も、きやつと云つたきりで、そのまま其所へ氣絶してしまつたのを、ちやうど仲間の者が通りかかつて、家へ昇

いで来て、介抱しましたから、やつと正氣になりました。目も、鼻も、口も、何も無くてつるりとしてゐたと云ひますからね、(と、旅人乙の方を、向いて)お前さんがこの間話した、小供を斬つた傷の話も面白いぢやないか。

旅人乙 さうぢや、その話をしよう。それは昔何人かに聞いた話だが(と、煙管の吸殻を吹いて煙管を側へ置きながら蒲留仙の顔を見て)宋城の南店に宿をとつてをつた男が、夜、月の晩に歩いてをりますと、前を老人が歩いて、月の光で手にしてゐる帳簿のやうな物を讀んでをりますから、お爺さん、何を讀んでをりますかと聞くと、これは婚牘ぢや、お前さん達が婚禮のことを書いてあると云ふさうです。そして、米市に行つたところで、向うの方からめつかちの姫さんが、三つ位の女の兒を抱いて來ましたが、老人はそれを見ると、あの女の兒は君の妻ぢやと言ひますから、その男はひどく怒つて、めつかちの件れてゐる小供を妻にしてたまるもんか、けしからんことだと云つて件れてゐる從者に云ひつけて、その女の兒を殺しに往かしました。從者は云ひつけ通り、後からそれを付けて往つて、人中で女の兒の顔を切つてから逃げましたが、後十四年たつてその男が高官にのぼつたので、刺史をしてゐた人が娘をくれましたが、その女は綺麗でしたが、平生も眉間へ鈿をさげてゐるので、氣をつけてみると眉間に傷痕があります。聞きますと、三つの歳に乳母に抱かれて市中を歩いてゐて、狂賊に刺されたと云ひますから、乳母の容貌を聞きますと、めつかちであつたと云うたさうですよ。



その時何時の間に来たのか葉生が来て、下手の入口を入つた所に立つてゐたが、いたづらさうな碧眼をぐるぐるやると共に口を出した。

葉生 それや京兆眉嫵よ、(葉生は得意さうにして、蒲留仙の前へ来て) 先生、今日は、他に何かいい話がありましたか。

蒲留仙は葉生の胸の方から見あげて、ちらとその顔を見る。

蒲留仙 ああ、君か。

葉生 先生お暑いちやありませんか、(と、茶の方に眼をやつて) 早速ですが、お茶を一ついただきますよ。

蒲留仙 いいともおあがり。

旅人二人は話の腰を折られて不快な顔をして見せたが、それと共に遠い行手を思ひ出したかのやうに、

旅人甲 それぢやもう出かけようか。

旅人乙 さうぢや、出かけよう。

そこで旅人甲は空になつた碗を持ち、旅人乙は煙管を持つて起つて、蒲留仙の前へ行つて、それぞれもとの所へ置いた。葉生はもう自分で茶を入れて起つたなり飲んでゐる。

旅人甲 どうもありがとうございました。

旅人乙 どうも御馳走になりました。

蒲留仙 どうもありがとうございました、いい話を聞いた、ではお大事に。

旅人は會釋してから荷物にものの所へ行き、笠かさを著、荷物にものをはじめのやうにして出て行く。

葉生 先生、今の話は、京兆眉嫵の話でせう、女の兒こを刺した話は。

蒲留仙 さうだね、似た話だね。

葉生 あれですよ、(二はい目の茶を入れながら) あの話が彼方此方に傳つてゐるまに、あんなになつたのですよ。

蒲留仙 しかし、それでもいいよ、人の頭を彼方此方と潜つてゐると、違つた味のある話になることがあるからね、君は、また何か面白い話を聞いて来てはゐないかね。

葉生 一つ面白い話がありますよ、それを話して来たのです。

蒲留仙 さうかね、それはありがたい。

蒲留仙は思ひだしたやうに煙管の雁首がんくびの方を膝の上に持つて来て、新らしく淡巴菰たはこを詰める。私も淡巴菰をいただきますよ、(急いで茶を飲んでしまつて、旅人の持つてゐた煙管を取つて淡巴菰を詰め、それに火をつけて、壺の隣へ行つて腰をかけ) 先生、昨夜聞いた話ですがね。

蒲留仙 さうかね。

葉生 萊州から来た秀才の話ですから、つまらない旅人の話とは違ひますがね。

蒲留仙 それやさうだらう。

葉生は淡巴菰を旨さうにすばすば喫んで、ちよつと話にかからない。蒲留仙はゆつくりと淡巴菰の煙を吹かす。

葉生 その話はね、先生、周立五と云ふ男の話ですがね、その男は、顴骨がひつこんで、顴がつこけ、口髭も生えないで、甚だ風采のあがらないうへに、三十二になつても、童子の試にとほらないと云ふ困り者でしたが、お父さんに隨いて荆南へ行つて、南城の外倉橋の側に宿をとつてあると、夢に雉冠絳衣の人が来て、その人は右の手に刀を持ち、左の手に鬚のある首を持つてゐるので、その人が周の榻の前へ来るなり、いきなり周の首を斬つて、手に持つてゐた首と易へて行つたので、周はびつくりしてお父さんの足にだきつき、大聲をあげたから眼が覺めたのです。眼を覺して、首を撫でてみますと、べつに異状もないので安心したのです、(話し話し吸殻を吹いて、二ふく目の淡巴菰を詰め、それに火をつけて旨さうに吸ひ)と云つたので、その周ですが、それから數日すると、顴骨が高くなり、頤の骨が張つて、そのうへ口髭が生えてりつばな顔になりましたが、それから又一年半ばかりすると、又夢に鬚の白い、黒い冠を著けた老人が、長い尾塵を持つて、金甲神を伴つて来て、お前の腹を易へてやらう、と云つたかと思ふと、伴つてゐる金甲神が、もう刀を抽いて、周の腹を裂いて、その臟腑をだして滌つて、もとの通りに收め、その上に四角な竹の笠を伏せ、釘をその四隅に打つたが、その椎の音が周の耳に響くがすこしも痛くはなかつたさうです

よ、(二ぶく目の淡巴菰を詰めて、又それに火をつけて吸ひだす)そこで釘が終ると、老人は尾塵を揮つて、清虚鏡に似たり、元本塵無し、と云つたのですが、周の夢はそれと一緒に醒めたのですが、それから周の文學が急に進んで、終に侍講學士になつたと云ふのです、これは秀才の云つたことですから、無學の旅人などの云つた話と違ひますよ。

蒲留仙 うむ、さうだらう、面白い話だ、いい話だ。

葉生 さつきの話とは違ひますよ。

蒲留仙 違ふ、いい話だ、では忘れないうちに書いて置かうかね。

蒲留仙は煙管を置いて左側を向き、靜に筆を執つて墨を含まし、一方の手に紙を持つて、何かそろそろと書き始める。葉生はそれをじろじろ見ながら又新しく淡巴菰を詰めて喫みだす。

蒲留仙 面白い話だ。

葉生 その話はちよつと面白いでせう。

蒲留仙 面白い、面白い、あれも、これも面白い。

蒲留仙は頻りにうなづきながら筆を動かしてゐる。葉生は黙つて淡巴菰を喫みながらそれを見

蒲留仙 面白い、面白い。

葉生は吸殻を吹きだして、かちりと音をさして煙管を置く。

葉生 先生、今日はこれで失禮します、すこし急ぎますから、(と、起ちあがつて、その時顔をあげた蒲留仙にちよつと會釋してから、はじめに來た方へ歩きながら) 又、明日でもいい話を持つて來ます。

蒲留仙 ああ、又頼むよ。

蒲留仙はそのまま又俯向いて筆を動かしてゐる。

李希梅がそこへ靜に入つて來る。

李希梅 先生。

蒲留仙はうつとりした眼をあげる。李希梅はそれに向つてうやうやしく禮をする。

蒲留仙 李君か、よく來た、まア掛けたまへ。

李希梅 はい。

蒲留仙 茶はどうだね、あげようかね。

李希梅 あとでいただきます、ほしくはありませんから。

蒲留仙 では淡巴菰は。

李希梅 は、今は、何もほしくありませんから、あとで又。

蒲留仙 では、まア掛けたまへ。

李希梅 はい、(蒲留仙の左側へ往つて腰を掛けながら) 先生、今、葉生が來てゐたのでせう。

蒲留仙 來てゐたよ、(と、筆を置き、紙を巻いてそれも硯の側に置いて) 逢つたかね。

李希梅 逢ひました、今日は、あの男、どんな話をして往つたのです。

蒲留仙 いや面白い話をして往つたよ。

李希梅 今世説にある話をしやしなかつたのですか。

蒲留仙 どうして、君は、それを知つてるかね、(笑ひ顔をして) 聞いたかね。

李希梅 これが、(と、袖に手を入れて古い汚い書籍をだして) これが其所に落ちてゐたのですよ、

屹とあの男が淡巴菰を喫む材料に持つて來たものですよ、(と、嘲けるやうに笑つて) どの話をしたのです。

蒲留仙 周立五が夢に首を易へられ、腹を洗はれる話だよ。

李希梅 先生は御存じになつて、黙つて聞いていらしたのでですか。

蒲留仙 知つてたが、人の頭をとほすと、又面白い味のできるものだからね。

李希梅 でも淡巴菰を喫みに來るために、持つて來るいいかげんな話ぢやありませんか、あの男はしかたのない奴ですよ、それにあれや、中國の者ぢやありませんよ、あの髪から眼から云つても。

蒲留仙 さうかも判らない。女眞あたりの者かも判らないね。

李希梅 さうですよ、どこの者かも判らない浮浪人ですよ、もう、これからあんな者を側へ寄せつけないがいいですよ、ばかばかしいぢやありませんか。と、(手にしてゐた書籍を投げるやうに側へ

置いて、重々しい顔をして、かう申しぢやなんですが、先生あなたのやうな學問と文章をお持ちになら、りながら、こんなことをなされて一生を終られるのは惜しいではありませんか、都の方では、今天下の學者を集めてゐる時ぢやありませんか、都の方へお上りになれば、先生を用ひるところは、いくらでもあるぢやありませんか。

蒲留仙 いや、君の云つてくれる意味は、よく判つてるし、非常にありがたいが、わしはどうも性に合はない、わしも若い時は、儒學によつて身を立てようと思つたことがあるが、考へてみれば、大官となり大儒となつて、一世に名をあげたところで、ほんたうに心から楽しいか楽しくないか判らない、君達は、わしがかうして牛鬼蛇神の話を集めてゐるのを見ると、魔道にでも陥つたやうに思ふだらうが、學者なんて云ふ者は、たとへてみれば、夜と晝とのある世の中に、晝だけの單調な世界に一生あくせくとしてゐて、淑奇恍惚の夜の世界を知らないやうな者だよ。

李希梅 はい。

蒲留仙 わしは平生も、狐妻を獲て、鬼とほんたうの友達になつたら、どんなに世の中が深くなるだらうと思ふよ。

李希梅 は。

蒲留希 文學としても、わしは、意味があるやうに思ふが、しかし、これはわし一家の意見だから、決して人に強ひるものぢやない、(と、云つて氣が注いたやうに) 今日(けふ)はもう歸らう、わしの家へ

行かうぢやないか、この前に葉生の話した搜神記の瓜を乞うた術者の話から、種梨と云ふ面白い話をこしらへてあるから、見せるよ。

李希梅 はい。

蒲留仙が起ちあがつて硯の始末をはじめだす。李希梅は時時やつて慣れてゐるやうに、壺をしまつてそれを左の胸に抱へ、右の手に二本の煙管と皮袋などを持つて起つ。蒲留仙は硯を右の手に持ち、左の手に紙と筆とを持つてやつとこさと腰をあげる。

蒲留仙 さあ歸らうかね、(と云つて李希梅の拾つて來た書籍に氣が注いて紙と筆とを持つた手に取り) 明日にでも返してやらうぢやないか。

李希梅 は。

聊齋志異

目次

嬰	陸	王	成	嬌	種	瞳	考
						人	城
審	判	成	仙	娜	梨	語	隍
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
八	七	六	四	三	三	二	三

小	蓮	西	封	阿	促	翩	田	阿	庚	汪	連
	花	湖	三				七			士	
翠	公	主	娘	英	織	翩	郎	霞	娘	秀	城
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三五	三四六	三三一	三二七	三〇四	二九六	二八八	二七七	二六九	二五九	二五四	二四三

續	青	黃	五	珊	阿	竹	織	胡	阿	蓮	酒
	蛙										
梁	神	英	通	瑚	織	青	成	氏	寶	香	友
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一三二	一三三	一一一	一九六	一八二	一七一	一六三	一五四	一四八	一三八	一五	一一

聊齋志異

西湖佳話

雷峯塔物語

某乙及附錄

醫術及附錄

鴉頭

水莽草

晉陽巷說

劉海石

倫桃

.....

四四三

.....

四三四

.....

四三七

.....

四二一

.....

四〇三

.....

三七九

.....

三七四

.....

三六九

# 考城隍

予（聊齋志異の著者、蒲松齡）の姉の夫の祖父に宋公、諱を燾と云つたものがあつた。それは村の給費生であつたが、ある日病氣で寝てゐると、役人が牒を持ち、額に白毛のある馬を牽いて来て、

「どうか試験に往つてくださるやうに、」

と云つた。宋公は、

「まだ試験の時期ぢやない、何の試験をするのだ、」

と云つて承知しなかつた。役人はそれには返事をせず、ただどうか往つてくれと云ふので、しかたなしに病をおして馬に乗つて従いて往つた。

その路は未だ一度も通つたことのない路であつた。そして、ある城郭へ往つたが、そこは帝王のゐる都のやうであつた。

しばらくして宋公は唯ある役所へ往つた。そこは壯麗な宮殿で、上に十人あまりの役人があつたが、何人と云ふことは解らなかつた。ただその中の關帝と關羽だけは知ることができた。

簷の下に二組の几と腰掛を設けて、その一方の几には、一人の秀才が腰をかけてゐた。そこで宋公も、その一方の几に往つて、秀才と肩を並べて腰をかけた。几の上にはそれぞれ筆と紙とが置いてあつた。

と、俄に試験の題を書いた紙がひらひらと飛んで來た。見ると「一人二人、有心無心」と云ふ八字が書いてあつた。そこで二人はそれぞれ、その題によつて文章を作つて殿上へさしだした。宋公の書いた文章の中には「心有りて善を爲す、善と雖も賞せず、心無くして惡を爲す、惡と雖も罰せず」と云ふ句があつた。殿上にゐた諸神はそれを見て褒めあつた。

そこで宋公は殿上に呼ばれて、

「河南の方に城の隍の神が缺けてゐる、その方がこの職に適任であるから、赴任するがいい、」

と云ふ上諭があつた。宋公はそこで自分は冥官に呼ばれてゐると云ふことを悟つた。で、頭を地にすりつけて泣きながら云つた。

「寵命を辱ふしたからには、どうして辭退いたしませう、ただ私には七十になる老母があつて、他に養ふ人ありません、どうか老母が天年を終るまで、お許しを願ひます、」

上の方にゐた帝王の像をした者が云つた。

「それでは老母の壽籍を調べてみよ、」

そこで髯の長い役人が帳簿を持つて來て紙をめくつて、

「人間世界の壽命がまた九年あります、」



と云つた。そして、ちよつと言葉のきれた時、關帝が云つた。

「それでは張生を代理にしておいて、九年の後に更代さすがよからう、」  
そこで宋公に云つた。

「すぐ赴任さすことになつてをるが、仁孝の心にめんじて、九年の時間をかさう、そのかはり、時間  
が来たなら、復た召すから、さう心得よ、」

關帝は秀才を召して二三勉勵の言葉を用ひた。終つて宋公と秀才は下におりたが、秀才は宋公の手  
を握りながら、郊外まで送つて来た。秀才は自分で長山の張と云ふ者であると云つた。秀才はその時  
詩を作つて贈別してくれた。その詩の中に、「花有り酒有り春常在り、月無し燈無し夜自ら明」の  
句が有つた。

宋公はすぐ馬に乗つて、秀才と別れて歸つて来た。そして自分の村に歸つたかと思ふと、豁然とし  
て夢が寤めたやうになつた。その時宋公は死んでから三日になつてゐた。母は棺の中の宋公の呻き聲  
を聞いて扶け出したが、半日してからやつと口が利けるやうになつた。長山で聞いてみると張生と云  
ふ者があつて彼の日に死んでゐた。

後九年して母が果して歿なつた。宋公は母の葬式をすまして體を洗つて室へ入つたが、そのまま  
死んでしまつた。宋公の妻の父の家が城内の西門の内にあつたが、ある日宋公が國王の乗るやうな輿  
に乗り、たくさんの供を伴れて入つて來て拜をして往つてしまつた。家の者は驚き疑うて、もう宋公  
が神になつてゐるのを知らないから、走つて往つて郷の者に訊いて呼びもどさうとしたが、もう影も  
形もなかつた。宋公には自分で書いた小傳が有つたが、借いことには騒亂のために無くなつた。この  
話はその大すぢである。

# 瞳人語

長安に、方棟と云ふ男があつた。非常な才子だと云はれてゐたが、かるはずみで禮儀などは念頭に  
おかなかつた。路で歩いてゐる女でも見かけると、きつと輕薄にその後をつけて往くのであつた。  
清明の節の前一日のことであつた。たまたま郊外を歩いてゐると、一つの小さな車が來た。それは  
朱の色の戸に繡のある母衣をかけたもので、數人の侍女がおとなしい馬に乗つて蹤いてゐた。その侍  
女のなかに小さな馬に乗つた客色のすぐれた女があつたので、方棟は近くへ寄つて往つて覗いた。  
見ると車の戸張が開いてゐて、内に十六七の女郎が坐つてゐたが、紅く化粧をした顔の麗しいこと  
は、今まで見たことのない美しさであつたから、方棟はふらふらとなつて我を忘れ、後になり先にな  
りして従いて往つた。そしてすこし往つたところで、女郎は侍女を車の側近く呼んで云つた。  
「わたしに戸をおろしてくださいよ、何處かの狂人でしよ、さつきから窺いてるのよ、」  
そこで侍女は簾をおろして、怒つた顔で方棟の方をふりかへつて云つた。  
「これは、芙蓉城の七郎さまの奥様が、お里がへりをなさるところでございますよ、田舎娘を若衆が  
のぞくやうなことをせられては困ります、」  
侍女はさう云ふかと思ふと轍の土を擲うてふりかけた。土は方棟の目に入つて開けようとしても開

かなかつた。それをやつとの思ひで拭ひおとして、車はと見たがもう影も形も無くなつてゐた。方棟  
は不思議な車もあつたものだと思ひながら家へ返つて來たが、どうも目のぐあひが悪いので、人に驗  
をあけて見てもらふと、睛の上に小さな翳が出來てゐた。そして、翌朝になつてから痛みがますます  
劇しくなつて、涙がほろほろと出て止まらなかつた。それと共に翳もしいに大きくなつて、數日の  
後には厚くなつて錢のやうになり、右の睛には螺の殻のやうな渦まきが出來てゐた。そこで方棟はあ  
らゆる藥を用ひて癒さうとしたが效がないので、惱み悶えた後にひどく自分の行を後悔するやう  
になつた。光明經を誦むと厄をはらふことができることと云ふことを聞いたので、それを求めて人に教へ  
てもらつて誦んだ。初めのうちは心がいらいらしておちつかなかつたが、しだいにおちついて來て安  
らかになり、朝晩ほかのことは思はずに珠數を捻つてゐられるやうになつた。  
この状態を一年ばかり續けてゐるうちに身心俱に靜になつた。と、ある日、右の目の中で蠅の羽音  
のやうな小さな聲で話をする聲がした。  
「眞暗だ、どうすると云ふのだらう、たまらないや、」  
左の目からそれに應じて云つた。  
「一緒に出て遊ばうぢやないか、氣ばらしに、」  
すると兩方の鼻の孔の中がむづむづ瘡くなつて、物があて出て往くやうであつたが、しばらくして  
歸つて來て、復た鼻の孔から眶の中へ入つて話しだした。

「しばらく園を見なかつたが、珍珠蘭が枯れてるぢやないか、」  
方棟は蘭が好きで、園へいろいろの蘭を植ゑて日常水を漑けてゐたが、目が見えなくなつてからはそのままにしてあつたので、その言葉を聞くと遽て、細君に云つた。

「蘭をなぜ枯らしたのだ、」  
細君は不思議に思つて、

「どうしてそれを知つてるの、」

と云つた。方棟はその故を話した。細君は園へ出て驗べた。果して蘭は枯れてゐた。細君はますます不思議に思つて、そつと室の中に匿れてゐると、方棟の鼻の内から小さな人が二人出て來たが、その大きさは豆ほどもなかつた。それがちよろちよろと門の方へ出て往つて見えなくなつてゐたが、急に竝んで歸つて來て、顔へ飛びあがり蜂が穴へ入つて往くやうに鼻の孔へ入つて往つた。

そんなふうで二三日したところで、又左の目の中で聲がした。

「隧道はまはりどほくて、往來が不便だ、自分で門を啓けるがいいぢやないか、」

右の目の中からそれに答へた。

「俺の方は壁が厚くて、むづかしいや、」

すると左の方が云つた。

「ぢや、俺の方で試に開けてみよう、お互に一緒にゐられるやうにな、」

そのうちに左の眶の内に掻き裂くやうな痛みを覺えた。そして、しばらくして目を開けて見ると几の上の物がはつきり見えた。方棟は喜んで細君に話した。細君がよくよく見ると膜に小さな穴が開いて、黒い睛がきらきらと光つてゐたが、その穴は僅に椒の實ぐらゐであつた。翌日になると障がすつかり消えてしまつて瞳が二つになつてゐたが、ただ右の目の螺の殻のやうな翳はそのままであつた。そこで雙方の瞳の人が一方の眶の中に一緒にゐるやうになつたことがわかつた。方棟は片方の目が眇になつたけれども、兩眼の人に較べてより以上に物が見えるやうになつた。方棟はそれがためになります自分で行に注意したので、郷中の人からほめられるやうになつた。

## 種 梨

村に一人の男が有つて梨を市に賣りに往つたが、頗る甘いうへに芳もいので貴い値で賣れた。破れた頭巾をかむり、破れた綿入をきた一人の道士が有つて、その梨を積んである車の前へ来て、

「一つおくれ、」

と云つた。村の男は、

「だめだよ、」

と云つて叱つたが道士は動かなくつた。村の男は怒つて、

「この乞食坊主、とつとと往かないとひどい目に逢はずぞ、」

と云つて罵つた。すると道士は云つた。

「この車には何百も積んであるぢやないか、わしがくれと云ふのは、ただその中の一つだよ、一つ位くれたところで、あんたにさうたいした損はないぢやないか、なぜそんなに怒りなされる、」

側に立つて見てゐた人たちも道士に同情して、村の男に、

「一つわるいのをあげたらどうだ、」

と云つたが、村の男は頑として肯かなかつた。肆の中にある奉公人がやかましくてたまらないので、たうとう錢を出して一つだけ買つて道士にあたへた。道士はそれをいただいた後に側の人たちに

向つて云つた。

「出家は、ものをしみをする人の心がどうしても解りません、わしに佳い梨が有る、それを出して、皆さんに御馳走をしよう、」

すると一人が云つた。

「持つてるなら、それを食べばいいぢやないか、」

そこで道士が云つた。

「わしが食はないのは、佳い梨だから、この核をとつて種にしたいと思つてたからだよ、」

道士はそこで一つの梨をとつて啗つてしまつて、その核を手で把り、肩にかけてゐた鋤をおろして、地べたを二三寸の深さに掘り、それを蒔いて土をきせ、市の人たちに向つて、

「これに灌げる湯がほしい、」

と云つた。好事者が路ばたの店へ往つて、沸きたつた湯をもらつて来て與へた。道士はそれを受けとつて種を蒔いた所にかけた。皆がふしぎに思つて見つめてゐると、そこから曲つた芽が出て来て、しだいに大きくなり、やがて樹になり、枝葉が茂り、みるみる花が咲き、實になつたが、その實は大きく芳がよく、それが壘壘として枝もたわわになつたのであつた。

道士はそこでその梨を摘みとりながら、側に觀てゐる人たちに與へたので、實はみるみる無くなつ

てしまつた。すると道士は鋤を以て樹を伐りはじめ、しばらく丁丁とやつてゐたが、やがて斷られたので葉のついたままの樹を肩にしてしづかに往つてしまつた。

初め道士があやしい法術をおこなひかけた時、村の男も皆の中に交つて領をながくして見てゐたので、あきなひに往くことも忘れてゐた。そして、道士が往つてしまつたので、氣がついてこれからあきなひに往かうと思つて、始めて梨を積んであつた車をふりかへつた。車の中の梨は空になつてゐた。そこで村の男は道士が皆にわけてやつたのは皆己の物であつたといふことを知つた。又仔細に見ると車の手綱が一つ亡くなつてゐた。それは新に斷りつたものであつた。村の男は大に恨み憤つて急に道士の跡を追つて往かうとした。牆の隅をまがる時、斷りとられた手綱が垣の下に棄ててあつた。村の男は始めて道士の伐り倒した梨の木が、即ちその手綱であつたといふことを知つた。そして道士の所在を尋ねたがわからなかつた。そこで市の人たちは白い齒をだして笑ひあつた。

## 嬌 娜

孔雪笠は、孔子の子孫であつた。人となり風流で詩がうまかつた。同じ先生に就いて學んでゐた氣のあつた友達があつて天臺縣の令となつてゐたが、それが手紙をよこして、來いと云つてきたので、はるばる往つたところで、をりもをりその友達の縣令が亡くなつた。孔生は旅費がないので歸ることでもできず、普陀寺と云ふ寺へ往つて、その僧に傭はれて書き物をした。

その寺の西の方百餘歩の所に單先生と云ふ人の邸宅があつた。單先生はもと身分のある人の子であつたが、大きな訴訟をやつて家がさびれ、家族も寡いところから故郷の方へ移つたので、その邸宅は空屋となつてゐた。

ある日、大雪が降つて人どほりの絶えてゐる時、孔生がその家の前を通つてゐると、一人の少年が出て來たが、その風采がいかにあかぬけがしてゐた。少年は孔生を見ると趨つて來てお辭儀をした。孔生もお辭儀をして、

「ひどく降るぢやありませんか、」  
と云ふと、少年は、

「どうかすこしお入りください、」

と云つた。孔生は少年の態度が氣にいつたので自分から進んで従いて入つた。

家はそれほど廣くはなかつたが、室と云ふ室にはそれぞれ錦の幕を懸けて、壁の上には古人の書畫を多く掲げてあつた。案の上に一冊の書物があつて標題を瑯環瑣記としてあつた。開けて讀んでみると今まで見た事のないものであつた。孔生はその時少年の身分のことを考へて、單の邸宅に居るからその主人であらうと思つたが、それがどうした閱歷の者であるかと云ふことは解らなかつた。と、その時少年が、

「あなたは、どうした方です、」

と云つて孔生の來歴を訊いた。孔生がその事情を話すと少年は氣の毒がつて、

「では、塾を開いて生徒に教へたらどうです、」

と云つた。孔生はため息をして云つた。

「旅鳥ですから、誰も力になつてくれる者がありません、曹邸が季布をたすけたやうに、」

すると少年が云つた。

「私のやうな馬鹿者でもおすてにならなければ、あなたのお弟子になりませう、」

孔生はひどく喜んで、

「いや、私は人の師になるほどの者ぢやないのです、友達になりませう、」

と云つて、それからあらためて訊いた。

「あなたの家は、久しいこと門を閉めてあるやうですが、どうしたわけです、」

すると少年が答へた。

「此所は單公子の家ですが、公子が故郷の方へ移つたものですから、久しい間空屋となつてゐたのです、僕は阜甫姓の者で、先祖から陝にゐたのですが、今度家が野火に焼けたものですから、ちよつとの間此所を借りて住んでゐるのです、」

孔生はそこで始めて少年が單の家の者でないことを知つた。

日が暮れても二人の話はつきなかつた。そこで孔生は泊ることにして少年と寢臺を共にして寢たが、朝になつて未だうす暗いうちに童子が來て炭火を室の中で熾きだしたので、少年は先へ起きて内寢へ入つたが、孔生は未だ夜著にくるまつて寢てゐた。そこへ童子が入つて來て云つた。

「旦那様がお見えになりました、」

孔生は驚いて起きた。そこへ一人の老人が入つて來た。これは頭髮の眞白な男であつた。老人は孔生に向つて、

「これは先生、悴が御厄介になることになりました、ありがとうございます、あの子は字も下手で何も知りません、どうか友達の小供と思はずに、親類の小供のやうにして、きびしくしこんでやつてください、」

と、ひどく禮を云つた後で、きれいな著物一襲に貂の帽と履物を添へてくれ、孔生が手足を洗ひ髪

に櫛を入れて著更へをするのを待つて、酒を出して饌を薦めた。その腰掛や戸張などは何と云ふ名の物であるか解らないが、綺麗にきらきらと光つて見えるものであつた。

酒が數回めぐつてから老人はあいさつをして、杖を持つて出て往つた。そして朝飯がすむと孔生は少年の皇甫公子に書物を教へたが、教科書として出して來た物はいが古い詩文で、文官試験の参考になるやうな當時の用にたつ學藝のものはなかつた。孔生はふしぎに思つて訊いた。

「試験の参考になるやうな物はないのですね。」  
公子は笑つて云つた。

「私は世に出る考がないのですから、」

日が暮れてからまた酒になつた。公子は孔生のあひてをしながら云つた。

「今晚じうぶん權を盡しませう、明日はまたどんなさしきはりが起らないともかぎりませんからね、」  
そこで童子を呼んで云つた。

「お父さんが寢てゐるかゝないかを見て、寢てゐるなら、そつと香奴を喚んで來い。」

童子は出て往つたが、やがて繡のある囊に入れた琵琶を持つて來た。しばらくして一人の侍女が入つて來たが、紅く化粧をした綺麗な女であつた。公子はその女に、

「湘妃を弾け、」

と云ひつけた。女は象牙の撥を絲の上にはしらした。その撥が激しく調子が揚つて往くと悲壯な美しさが感じられた。その節まはしは孔生がこれまで聞いたことのないものであつた。公子は又女に云ひつけて大きな觴に酒をつがした。

夜が更けてから始めて罷めた。そして、次の日は早く起きて共に讀書したが、公子ははなはだ物わかりがよくて、一目見て語記することができた。二三箇月の後に文章を作らしてみると、構想が奇警で他人の眞似のできないものがあつた。二人は約束して五日目五日目に酒を飲むことにしたが、その時には必ず香奴を招いた。

ある夜酒がはずんで氣が熱した時、孔生は目を香奴につけた。公子はもうその意味をさつして云つた。

「この女は、父が世話をしてゐる女です、あなたは旅にゐて奥さんがないから、私はあなたに代つてそれを考へてゐるのです、きつと佳い奥さんをお世話いたします、」

孔生はそこで云つた。

「もし、ほんたうに世話をしてくれるなら、香奴のやうな女を頼みます、」  
すると公子が笑つて云つた。

「あなたは諺にいふ、見る所すくなくして怪しむ所多き者ですね、それを佳い女と云ふなら、あなたの願ひはたやすいことですよ。」

何時の間にか半年すぎた。ある日孔生は、公子を伴れて郊外へ散歩に往かうと思つて、門口まで往

つたところが、門の扉にかんぬきがさして、閉めてあつた。孔生は不審に思つて、「なぜかうしておくのです、」

と問ふと、公子が答へた。

「父が、友達が來ると、私の心がおちつかなくなるから、それで人の來ないやうに、かうしてあるのです、」

孔生の不審はそれではれた。その時は夏のさかりでむしあつかつた。孔生は齋園の亭に移つた。その時孔生の胸に桃のやうな腫物ができて、それが一ばんのうちに盆のやうになり、痛みがはげしいので呻き苦しんだ。公子は朝も晩も看病に來た。孔生は苦痛のために眠ることもできなければ食事をすることもできなかつた。

二三日して孔生の腫物の痛みは一層劇しくなつた。従つて食物もますます食べられないやうになつた。そこへ公子の父も來たが、どうにもしやうがないので公子と顔を見合はして吐息するばかりであつた。その時公子が云つた。

「私はゆふべ、先生の病氣は、嬌娜がなほすだらうと思つて、おばあさんの所へ使をやつて呼びに往かしたのですが、どうも遅いのですよ、」

そこへ僮子が入つて來て云つた。

「お嬢さんがお見えになりました、」

公子の妹の嬌娜と嬢の松姑が伴れだつて來た。親子は急いで内寢へ入つた。しばらくして公子は嬌娜を伴れて來て孔生を見せた。嬌娜の年は十三四で、はにかんである顔の利巧さうな、體のほつきりした綺麗な少女であつた。孔生は女の顔を見て苦しみを忘れ、氣もちもそれがためにさつぱりとした。その時公子はそこで云つた。

「この方は、私の大事の方だ、ただの友達ぢやない、どうかよくなほしてあげてくれ、」

女ははにかみをやめて、長い袖をまくり、孔生の寢臺に寄つて往つて診察した。そして、診察する女の手が孔生の手に觸れた時ほんのりと佳い匂がしたが、それは蘭の匂にもまさるやうに思はれた。女は笑つて云つた。

「いい、心脈が動いてゐます、危険ですがなほります。ただ腫物がはりきつてゐますから、皮を切つて肉を削らなくちやいけません、」

そこで臂にはめてゐた金釧をぬいて腫物の上に置き、そろそろと押しつけるやうに揉んでゐると、腫物は高く一寸ばかりも金釧の中へもりあがつて來た。そして根際になつたところも盡く内へ入つて、前の盆のやうに潤かつた腫物とは思はれなかつた。そこで羅の小帯から佩刀をぬいた。その刀は紙よりも薄かつた。そして、一方の手に金釧を持ち一方の手で刀を握つて、かるがると根のつけもとから切つた。紫色の血が溢れ出て寢臺の上も腰掛もよごしてしまつた。孔生は女の美しい姿が自分にとびつたりと寄りそつてゐるのがうれしくて、治療の痛みも覺えないばかりでなくその治療が速



に峻つて少女が傍にゐなくなるのを恐れてゐた。間もなく女は腐つた肉を切りとつたが、その形は圓くて樹の瘤のやうであつた。又水を持つて來さして傷口を洗つて、口から紅い丸のはじき彈大の物を吐いてその上におき、そろそろと撫でまはさした。そして、僅に一撫ですると火のやうにほてつてゐた傷のほてりが湯氣のたちのぼつて消えるやうになつてしまつた。再び撫でまはすと好いやうな好い氣持ちになつた。三たび撫でまはすと全身がすつきりして來て、その心地よさが骨髓に沁みるやうであつた。すると女はその丸を取つて咽に入れて云つた。

「これで癒りました。」

そして女は走るやうに出て往つた。孔生はとび起きて走つて行き、女の後から、

「有難うございました。」

と禮を云つた。そして、もう癒らないと思つてゐた病氣は癒つたが、思ひが女に往つてゐるので苦しくてたまらなかつた。孔生はそれから讀書することをやめて馬鹿のやうに坐り、すがつて生きて往く物のないやうなさまであつた。

公子はもうこのさまを窺うて知つてゐた。そして言つた。

「私はあなたのために探して、佳い奥さんを見つけましたよ。」

すると孔生が問うた。

「何人ですか。」

公子が云つた。

「私の親戚です。」

孔生はちつと考へ込んでゐたが、やがて、

「そいつは、おいてもらひたいな。」

と獨りごとのやうに言つてから、壁の方を向いて詩句を吟じた。

「曾て滄海を経て水たりがたく、巫山を除却して是れ雲ならず。」

公子は孔生の心のある所を了解して云つた。

「父はあなたの大きな才能を崇拜して、いつでも婿にしようとしてゐるのですが、ただ妹の嬌娜は、どうも齒が若すぎるのです。姨の女の阿松は年が十七で、そんなに悪い女ぢやないのです。もし信にできないなら、阿松が毎日園亭に來るのです、その前に待つて御覽になつたらどうです。」

孔生は公子に教へられたとほり園亭の前へ往つて待つてゐた。果して嬌娜と一人の麗人とが伴つたつて來た。それは黛で畫いた眉の細長く曲つてゐて美しい、そして小さな足に鳳凰頭の靴を穿いてゐたが、その美しいことは嬌娜に劣らなかつた。孔生は大に悦んで公子に媒約をしてくれと頼んだ。

翌日になつて公子は内寢から出て來て孔生に、

「お目出たう、ととのひましたよ。」

と云つた。そこで別院の掃除をして、孔生の婚禮の式をあげた。その夜は鼓を打ち笛を吹いて音樂

を奏したが、その音楽の響きは梁の塵を落して四邊にただよった。それはちやうど仙人のあるところを望むやうであつた。そこで夫婦は衾幄を同じうすることになつたが、それは月の世界が必らずしも空に在るときめられないやうに思はれるものがあつた。そして合巹の後には、ひどく心の満足をおぼえた。

ある夜のことであつた。公子は孔生に話をして、

「これまで學問をばげんでくだされた御恩は決して忘れませんが、ただ近ごろ、單公子が訴訟が落著して歸つたので、家を返してくれとひどく催促するものですから、もうこの地を引きあげて西に往かうと思ふのです。それでも今のやうに一緒にゐていただくこともできないと思ふのです。」

と云つた。離別を悲しむの情が二人の胸の中にまっはりついて、どうすることもできなかつた。孔生は、

「では、私も一緒に西に往きませう、」

と云つた。公子は、

「お國へ歸つたらどうです、」

と云つた。故郷に歸つて往くにはかなり旅費がかかるので孔生の力には及ばなかつた。孔生は困つた。すると公子が云つた。

「御心配なさることはありません、すぐあなたを送つてあげますから、」

間もなく父親は松娘を伴れて来て、黄金百兩を以て孔生に贈つた。そこで公子は左右の手で孔生夫婦を抱くやうにして、

「ちよつとの間、眼をつむつていらつしやい、送つてあげますから、」

と云つた。二人が眼を閉ぢるとその體は飄然と空にあがつて、たゞ耳際に風の音のするのを覺えるばかりであつたが、しばらくして公子の、

「もう來たのですよ、」

と云ふ聲を聞いて目を啓けた。果して孔生の故郷の村であつた。孔生は始めて公子が人でないと云ふことを知つた。孔生は喜んで自分の家の門を叩いた。母はひどく悦んで出て來た。母は又悴の伴れてある美しい女を見て悦んで慰めた。孔生は公子を内へ入れようと思つて振りかへつたが、もう公子の姿はなかつた。

松娘は姑に事へて孝行であつた。そのうへ美しくてかしこいと云ふことは遠近に傳へられた。その後孔生は進士に擧げられて、延安府の刑獄をつかさどる司理の官になつたので、一家をあげて任地に往くことになつたが、母は道が遠いので往かなかつた。

松娘は任地で一人の男の子を生んだので、小宦と名をつけた。孔生は朝廷から差遣せられて地方を巡察する直指に忤うたがために官を罷められたが、いろいろのことに妨げられて歸ることができなかつた。ある日郊外へ出て獵をしてゐると、黒馬に乗つた一人の美しい少年に行き逢つたが、少年は類

りに此方を振りかへるのであつた。氣をつけて見るとそれは皇甫公子であつた。そこで轡を攪つて馬を停め、悲喜こもごも至ると云ふありさまであつた。

公子はやがて孔生を邀へて一つの村へ往つた。そこは樹木がまつくらに生えて陽の光が射さない所であつた。その家へ入つてみると金色の鷗の形をした浮き鉦を打つたりつばな舊家であつた。

「妹さんはどうしたのです、」

と孔生が問うた。

「あれはお嫁に往つたのです。しかし、もうあれ達の母はないのですよ、」

と公子が答へた。孔生は岳母の死を悼み、又嬌娜の結婚を悦んだ。

孔生は一晚泊つて返り、再び妻子を伴れて往つた。そこへ嬌娜がまた來たが、嬌娜は松娘の手から子供を取つてあやしなから云つた。

「私のお姉さんはね、私達の種をみだしたのよ、」

孔生はそこで腫物を癒してもらつた禮を云つた。すると嬌娜は笑つて云つた。

「お兄さんは豪い方ですわ、創口がもう癒つてるに、まだ痛みをお忘れになりませんの、」

嬌娜の夫の吳郎が來てあいさつをした。吳郎は二晩泊つてから歸つて往つた。

ある日、公子は心配さうな顔をしてゐたが、孔生に云つた。

「天が私達に殃を降さうとしてゐるのです、救うていたゞけませうか、」

孔生はその意味がわからなかつたが、

「どんなことですか、私にはわからないが、私にできることならなんでもやりませう、」

と云つてきつとなつた。公子は急いで出て往つたが、すぐ一家の人人を呼んで來て、皆で孔生を拜んだ。孔生は大に駭いて口ばやに問うた。

「どうしたのです、どうしたのです、」

すると公子が云つた。

「私は人間ぢやないので、狐です。今、雷の劫があります、あなたは死を覺悟でそれに當つてください。さうしてくださるなら、その殃をのがれることができます。もしさうしていただくと

孔生は義に勇む男であつた。孔生は、

「死ぬるなら皆で一緒に死にませう、」

と云つて公子と生死をちかつた。そこで公子は孔生に劍を伏つて門に立つてゐてくれるやうにと頼み、なほ注意して、

「雷がどんなにはげしくつても、けつして動いてはいけませんよ、」

と云つた。孔生は公子の云ふとほり劍を抜いて門の所へ往つて立つてゐた。果して黒い雲が空を覆うて暗くなつた。振りかへつて家の方を見るとそこにあつた門もなく、たゞ高い塚と大きな底の知れ

ないやうな穴があるばかりであつた。孔生はびつくりした。と、恐しい雷の音がしてそれが山雷を揺り動かした。つづいて荒い風が吹き雨が横さまに降つて来た。それがために老樹も倒れた。孔生は目先がくらみ耳がづぶれるやうに思ったが、屹然と立つてすこしも動かなかつた。と、見ると、黒い絮のやうな煙の中に怪物の姿があつて、それが尖がつた牙のやうな喙と長い爪を見せて、穴から一人の者を攫つて煙に乗つて空にのぼらうとした。その著物と獰物に注意すると、どうも嬌娜に似てゐるので、孔生は躍りあがつて斬りつけた。怪物の掴んでゐた者は下に落ちた。それと同時に山の崩れるやうな雷の音がして、孔生は仆れてたうとう死んでしまつた。

間もなく空が齊れた。嬌娜はしぜん生きかへつたが、孔生が傍に死んでゐるのを見て大聲をあげて泣いた。

「お兄さんは私のために死んぢやつた、私は生きてはゐられない、」  
そこへ松娘が出て来て、二人で孔生の死骸を昇いで歸つた。そして嬌娜は松娘に孔生の首を持ちあげさし、公子には簪で齒の間を開けさして、自分では頤を撮んで、舌で彼の紅い丸を移し、又その口に口をやつて息を吹きかけた。それがために紅い丸は氣に隨うて喉に入り、かくかくと云ふ響をさした。そして暫くすると孔生は生きかへつたが、一族の者が前に集つてゐるのを見て夢の寤めたやうな氣になつた。

そこで一門が一室に集まつて喜んだ。孔生は皆を塚穴の中に久しくゐさしてはいけなと思つたので、皆で自分の故郷へ往かうと云つた。皆がそれに賛同したが、ただ嬌娜のみは沈んでゐた。孔生はその意味がわかつたので、吳郎と一緒に往つてくれと云つた。その他にも爺さんと媪さんが小さな子供を手離すのを承知しないかも知れないと云ふやうなことを云ふ者もあつて、終日その相談がまともになかつた。

と、みると吳の家の小さな奴が汗を流し息を切らして走つて来た。皆が驚いてその故を聞いた。それは吳郎の家も亦同じ日に劫に遇つて、一門の者が俱に斃れたと云ふ知らせであつた。嬌娜は足ずりして悲しんでとめどもなしに涙を流した。皆嬌娜に同情して嬌娜を慰めた。それと共に同歸の計も定まつた。孔生は城内へ往つて二三日後を始末をして、それから急いで旅装を調べて出發した。

そして家に歸りつくと孔生は閑靜な庭園に公子兄妹を置いて何時も訪問した。公子は孔生や松娘などが往くと始めて局を開けた。孔生は公子兄妹と酒を酌み棋をたたかして一家の人のやうにして楽しんでゐた。

小宦は大きくなると容貌に品があつて美しかつた。その小宦は狐のやうな心を持つてゐて遠く出て都市に遊んだ。人人は皆それが狐の兒であると思ふことを知つてゐた。

# 成仙

文登の周生は成生と小さい時から學問をともにしたので、ちやうど後漢の公沙穆と吳祐とが米を搗く所で知己になつて、後世から杵臼の交と云はれたやうな親しい仲であつたが、成は貧乏であつたら、しよつちゆう周のせはになつてゐた。そのうへ齒も周がうへであつたから、成は周の細君を嫂さんと呼んで尊敬し、季節々々にはかならず來て一家の人のやうにしてゐた。さうしてゐるうちに周の細君がお産をした後で暴に死んでしまつたので、周はその繼へ王姓の女を聘つた。成はすこしさしさはりがあつて來なかつたので、王氏にはまだ逢つてゐなかつた。

ある日王氏の弟が姉をみまひに來たので、周は居間で酒盛をしてゐた。そこへ成が遊びに來たので家の者がとりついだ。周は喜んで迎へようとしたが、禮儀の正しい成は居間へ通るのは失禮にあたるからと云つて入らずに歸つて往つた。周は席を奥座敷へ移して、成を追つかけて往つて伴れ還り、やがて席についたところで、人が來て、

「今、別莊の下男が村役人につかまつて、ひどく打たれてをります、」

と云つた。それは黄といふ吏部の官にある者の牛飼が、牛を曳いて周の家の田の中を通つたのがもとで、周の家の下男と言ひあらそひになり、それを走つて往つて主人に告げたので、主人の黄吏部は

周の家の下男を捉へて村役人に送つた。それがために周の家の下男が打たれて責められることになつたのであつた。周はその故を聞いて大に怒つた。

「黄の牧猪奴、よくもそんなことをしやがつた。おやぢは俺のお祖父さんにつかへてゐたくせに、すこしよくなつたと思つて、人をばかにしやがる、」

周は忿がむらむらとこみあげて來て、どうしても押へることができないので、黄吏部の家へ往かうとした。成はこれをおしとめて言つた。

「強いものがちの世の中に、黒も白もないぢやないか、それにさ、今日の官吏は、たいがい強盜で、槍や弓をひねくりまはさない者はないぢやないか、あひてにならないがいいよ、」

周はそれでも聽かずに往かうとした。成はかたく諫めてはは涙さへ見せたので、周もよすことはよしたが怒りはどうしても釋けなかつた。それがためにその夜は睡らずに寝がへりばかりして朝になつた。そこで周は家の者を呼んで云つた。

「黄は、俺をばかにしたから仇だが、それは姑く置いて、村役人は朝廷の官吏で、權勢家の官吏ぢやない。もし争ふ者があるなら雙方を調べるべきだ。それを喉けられた狗のやうに、一方ばかり責めるとは何事だ、俺は牛飼を訴へて、村役人がどういふふうに分分するかを見てやるのだ、」

家の者も主人のいふことが道になつてゐるので、止めないばかりか是非往くがよからうと云つてすすめた。そこで周の考へはきまつた。周は訴狀を持つて村役人の所へ往つた。村役人は訴狀をひき

裂いて投げつけた。周はますます怒つて村役人を罵倒した。村役人は慚ぢると共に悲つて周を捕縛して監獄へ繋いだ。

周が家を出てから暫くして成は周の家へ往つた。成はそこで周が訴状を持つて城内へ往つたことを知つたので、驚いて止めようと思つて城内へかけつけたが、往つてみると周はもう已に獄裏の人となつてゐた。成は足ずりして悔んだがどうすることもできなかつた。

その時に三人の海賊がつかまつてゐた。村役人はそれに金をやつて周の仲間であるところづくりごとをいはせ、その申立てを盾にして周の著物をはぎとつて慘酷に拷問した。成はその時面會に來た。二人は顔を見あはして悲しみ歎いた。二人はそこで相談したが周の無實の罪を明にするには天子に直訴するより他に道がなかつた。周は云つた。

「僕は重い罪をきせられて、こんな監獄に繋がれ、ちやうど鳥が籠に入れられたやうだし、弟はあつても年が若くて、ただ差入れをする位のことだけしかできないし、」  
成はそれを聞くときつとなつて云つた。

「それは僕の責任だ、僕がやる。むづかしい事件で、それで急を要しない事件なら、友人の必要はない。」

そこで成は都に向つて出發した。周の弟が餞別しようと思つて往つてみると、成はもう出發してかなり時間が経つてゐた。

やがて成は都に着いたが控をする手がかりがない。どうしたならいいだらうかと思つてゐると、天子が御獵に往かれるといふ噂が傳はつて來た。成は木市の材木の中に隠れてゐて、天子の車駕の通り過ぎるのを待ちうけ直訴した。

成の直訴はおとりあげになつて、車駕を犯した成自身の身もそれぞれの手續の後にさげられ、上奏を経て周の罪を再審することになつたが、その間が十ヶ月あまりもかかつたので、周は已に無實の罪に服して辟につけられることになつてゐた。ところで天子の御批がくだつたので、法院ではひどく駭いて、ふたたび罪をしらべなほすことになつた。黄吏部もそれには駭いて周を殺さうとした。黄吏部は典獄に賄賂をおくつて周を飲食させないやうにした。そこで典獄は周の弟が食物を持つて來ても入れることを許さなかつた。それがために成が法院へ往つて周の無實の罪であることを言つて、再審を始めてもらつたときには、周は飢餓のために起つことができないやうになつてゐた。法院の長官は怒つて典獄を打ち殺させようとした。黄吏部は怖れて村役人に數千金をおくつたので、それでいいかげんなことになり、村役人は法を枉げた典獄ばかりを流刑にした。そして周は放たれて歸つて來たが、それからますます成と肝膽を照らした。

成は周の裁判がすんでから、世の中に對して持つてゐた望みが灰のやうにこなこなになつたので、周を伴れて隱遁しようと思つて、ある日、それを周にすゝめた。周は若い後妻の愛に溺れて、成のいふことを人情に迂いつまらないことだと云つて一笑に付した。成はそれ以上何も云はなかつたが、そ

の意はきちんときまつてゐた。

成はそれから歸つて往つたが數日経つても姿を見せなかつた。周は使を成のへ家やつた。成の家に成はあらずに家の者は周の所にあることとばかり思つてゐたと云つた。そこで始めて皆が疑ひだしたが、周は成の心の異つてゐたことを知つてゐるので、人をやつて成のゐさうな寺や山を偏く物色さすと共に、時どき金や帛をその子に郵んでやつた。

八九年してから成が忽然として周の所へ來た。それは黄な巾を冠り鶴の羽で織つた敵毛を著た、巖壁の聳えたつたやうな道士姿であつた。周は大いに喜んで臂を把つて云つた。

「君は何處へ往つてた、僕はどんなに探したかわからないよ、」  
成は笑つて云つた。

「僕は孤雲野鶴だ、何處ときまつた所はないが、君と別れた後も幸に頑健だよ、」

周は酒を出して二人で飲みながら別れた後のできごとなどを話し、成に道士の服装を易へさせようとしたが、成は笑ふだけでこたへなかつた。周はそこで云つた。

「馬鹿だなあ、君はなぜ細君や子供を敵れ履のやうに棄てたのだ、」  
成は笑つて云つた。

「さうぢやないよ、向うから人を棄てようとしてゐるのだ。こつちから人を棄てやしないよ、」  
周は問うた。

「では何處に棲んでる、」  
成は答へた。

「勞山の上清宮だよ、」

そのうちに夜になつたので二人は寢臺を並べて寢たが、夢に周は成が裸になつて自分の胸の上に乗つたので息がでないやうになつた。周はふしぎに思つて、

「何をするのだ、」  
と云つたが成はわざと返事をしなかつた。と、周の眼が寤めた。そこで周は、  
「おい、成君、」

と呼んだが返辭がない。周は坐つて手さぐりに索つてみたが、何處へ往つたのか杳としてわからなかつた。暫くしてから周は始めて自分が成の寢臺で寢てゐることに氣がついた。周は駭いて云つた。  
「そんなに酔つてもゐなかつたのに、なぜこんなに顛倒したのだらう、」

そこで家の者と呼んだ。家の者が來て火を點けた。周の容貌は變じて成となつてゐた。周はもと髭が多かつた。周は手をやつて頷をなでてみた。そこには幾莖の髭が疎に生えてゐるのみであつた。周は鏡を取つて自分で顔を照してみた。そこには成の顔があつて自分の顔はなかつた。

「おや、成の顔がある、俺はぜんたい何處へ往つたのだらう、」  
周はあきれて鏡を見てゐたが、まもなくこれは成が幻術を以て自分を隱遁させようとしてゐるため

だらうと寤つた。そこで気がおちついたので居間へ入らうと思つて往くと、周の弟はその貌が異つてゐるので通さなかつた。周も亦自分で自分を證明することができないので、馬に乗り下男を伴つて成を尋ねて往つた。

數日にして周は勞山に入つた。すると騎つてゐた馬の足が疾くなつて下男は隨つて往くことができなかつた。馬は飛ぶやうに往つてやがて一樹の下に止つた。そこには黄巾敝毛服の道士がたくさん往來してゐた。そのうちの一道士が周に目をもつて來た。そこで周は、

「成道士のある所は何處でせうか、」

と云つて問うた。道士は笑つて云つた。

「成道士から聞いてゐる、上清宮にゐるやうだよ、」

道士はさう云ふなりすぐに離れて往つた。周はそれを見送つた。その道士はすぐその先で向うから來た道士と何か二言三言交へてから往つてしまつた。初めの道士と言葉を交へてゐた道士がやつと近くに來た。それは同窓の友の一人であつた。同窓の友は周を見て驚いて云つた。

「數年逢はなかつたね、人に聞くと、君は名山に入つて道を學んでるといつたが、やつぱり人間にゐるのかね、」

周は同窓の友が、成とまちがへてゐることを知つたので、そのわけを話した。同窓の友は驚いて云つた。

「ぢや、僕は今逢つたのだ、僕は君とばかり思つてた、往つてから間がないから、まだ遠くへは往かないだらう、」

周は不思議でたまらなかつた。周は云つた。

「さうかなあ、ぢや僕も遇つてゐる、自分で自分の面のわからないはずはないがなあ、」  
そこへ下男がおつついて來た。周は馬を飛ばして彼の道士の往つた方へと往つたが影も形も見えなかつた。そこは一望寥瀰としたところであつた。周は進退に窮してしまつた。歸らうとしても歸る家はなかつた。周はたうとう意を決して彼を何處までも追つて往くことにしたが、そのあたりは險岨で馬に騎つて往くことができないので、馬を下男にわたして歸し、獨りになつて、うねりくねつた山路を越えて往つた。

遙に見ると一童子の坐つてゐる所があつた。周は上清宮の在る所を聞きたいので急いでその側へ往つて、

「これから上清宮のある所へは、何里位あるかね、僕は成道士を尋ねて往く者だが、」  
と云つて故を話した。すると童子は、

「私は成道士の弟子でございます、」

と云つて、代つて荷物を荷ひ、路案内をしてくれたが、星飯露宿、はるばると往つて三日目になつてやつと行き著いた。そこは人間にある所謂上清宮ではなかつた。季節は十月の中頃であるのに、花



が路に咲き亂れて初冬とは思はれなかつた。

童子が入つて往つて、

「お客さまがおいでになりました。」

と云つた。すると遽に成が出て来て、己の形になつてゐる周の手を執つて内へ入り、酒を出して話した。

そこには綺麗な羽のめづらしい禽がゐて、人に馴れてゐて人が傍へ往つても驚かなかつた。その鳴く聲は笛の音のやうであつたが、時をり座上へ入つて来て鳴いた。周はひどく不思議に思ひながらも若い細君のことをはじめ世の中のことを心に浮んで来て、いつまでもそこにゐようと言ふやうな意はなかつた。

そこには二枚の蒲團があつた。二人はそれを曳きよせて竝んで坐つてゐたが、夜が更けて往くに從つて心がすつかり静まつた。その時周はうとうとしたが、それと共に自分と成とが位置を易へたやうな氣がした。周はふしぎに思つて領をなでてみた。そこには髭の多い故の自分の領があつた。周は安心した。

朝になつて周は歸りたくなつたので成に云つた。成は固く留めて返さなかつた。三日すぎてから成が云つた。

「今晚はすこし寝るがい、だらう、明日は早く君を送らう、」

周は成の言葉に従つて睡つたところで、成の聲がした。

「支度ができたよ、」

そこで周は起きて旅装を整へて成に従いて出發した。周は成の往つた道を往かず他の道を往つた。

二人は暗い中をすこし往つたかと思ふと、もう故郷の村であつた。成は路ばたに坐つて周に向ひ、「ひとりで歸るがいい、」

と云つた。周は成を伴れて往きたかつたが、強ひても云へないので獨りで家の門を叩いた。返事をする者もなければ起きて来る者もなかつた。周はそこで牆を越えて入らうと思つた。と、自分の體が木の葉の飛ぶやうになつて一躍に牆を越えることができた。垣はまだ二つ三つあつた。周はその垣も越えて自分の寢室へと往つた。寢室の中には燈の光がきらきらと輝いて、細君はまだ寢ずに何人かとくどくどと話してゐた。周は窓を舐めて窺ひてみた。そこには細君と一人の下男とが一つの杯の酒を飲みあつてゐたが、その狀が如何にも狎褻であるから周は火のやうになつて怒り、二人を執へようと思つたが、一人では勝てないと思ひだしたので、そつと脱けだして成の所へ行つて告げた。成は憤然として従いて來た。そして寢室の前に行くと周は石を取つて入口の扉を打つた。内ではひどく狼狽しだした。周はつづけさまに扉を打つた。内では必死になつて扉を押へて開かないやうにした。そこで成が劍を抜いて斬りつけると、扉がかりと開いた。周はすかさず飛びこんで往つた。下男が扉を衝いて逃げ出した。扉の外にゐた成が劍を以て片手を斬りおとした。周は細君を執へて拷問したところ

ろが、自分が獄にいれられた時から下男と私してゐたと云ふことがわかつた。周はそこで成の劍を借りて細君の首を斬り、その陽を庭の樹の枝にかけて、成に従つて歸山の途についた。と、思つたところで周の眼が醒めた。自分は寢臺の上に臥てゐたのであつた。周はびつくりして、

「つじつまの合はない夢を見たのだ、驚いたよ、」

と云つた。すると臺を並べて寝てゐた成が笑つて云つた。

「君は夢を眞箇にし、眞箇を夢にしてゐるのだ、」

周は愕いてそのわけを問うた。成は劍を出して周に見せた。それにはなまなまと血がついてゐた。

周は驚き懼れて氣絶しさうにしたが、やがて、それは成の法術で幻を見せたのではあるまいかと疑ひだした。成は周の意を知つたので、

「謠か實か見て來たらいいだらう、」

と云つて、周に旅装をさして送つて歸つた。そのうちに故郷の入口になると、

「ゆうべ、劍に倚つて待つてゐたのは此處だよ、僕はけがれたものを見るのが厭だから、此處で君の還るのを待たう、もし午すぎになつて來なかつたら、僕は往つてしまふよ、」

と云つた。周は成に離れて家へ往つた。門の戸がしんとして空屋のやうになつてゐた。そこで周は

弟の家へ入つた。弟は兄を見て涙を墮して云つた。

「兄さんがゐなくなつた後で、盜賊が入つて、嫂さんを殺して、腸を刳つて逃げたのですが、じつ

に慘酷な殺しかたでしたよ、だが、それがまだ捕らないのです、」

周ははじめ夢が醒めたやうに思つた。そこで周は事情を話して、もう詮議することをやめるがいと云つた。弟はびつくりして暫くは眼をみはつてゐた。周はそこで子供のことを聞いた。弟は老媪に云ひつけて子供を抱いて來させた。周はそれを見て、

「この嬰兒は、祖先の血統を傳へさすものだから、お前がよく見てやつてくれ、私はこれから世の中をすてるのだから、」

と云つて、そのまま起つて出て往つた。弟は泣きながら追ひかけて挽きとめようとしたが、周は笑ひながら後を顧みずに往つた。そして郊外に出て、そこに待つてゐた成と一緒に往つて歩きだしたが、遙に遠くへ往つてからふりかへつて、

「物事を耐へ忍ぶことが、最も楽しいことだよ、」

と云つた。弟はそこでそれに應へようとしたところで、成が潤い袖をあげたが、そのまま二人の姿は見えなくなつた。弟は悵然として其處に立ちつくしてゐたが、しかたなしに泣きながら家へ歸つた。

この周の弟は世才がないので家を治めてゆくことができず、數年の間に家がたちまち貧しくなつた。その時周の子がやつと成長したが教師をやとふことができないので、自分で讀書を教へてゐた。ある日朝早く書齋に入つてみると案の上に函書がのつかつてゐて、固く封緘をしてあつた。そして

函書には「仲氏啓」としてあつた。よく見るとそれは兄の筆迹であつた。そこで弟はそれを開けてみたが、ただ爪が一つ入つてゐるのみで他には何もなかつた。爪は長さが二寸ばかりのものであつた。弟はそれを研の上に置いてから書齋を出、家の者に彼の函書は何人が持つて来たかと聞いたが、何人も知つてゐる者がなかつた。ますます不思議に思つて書齋に入つてみると、彼の爪を置いてあつた研石がびかびか光つてゐた。それは化して黄金となつてゐるところであつた。弟は大に驚いたが思ひついたことがあるので、その爪を傍にあつた銅器と鐵器の上に置いてみると、それもいちいち黄金になつた。周の弟はこれがために富豪になつたので、千金を成の子に贈つた。それによつて世間で周の家と成の家には點金術があると云ひつたへた。

## 王 成

王成は平原の世家の生れであつたが、いたつて懶け者であつたから、日に日に零落して家は僅に數間のあばら屋をあますのみとなり、細君と亂麻を編んで作つた牛衣の中に寝ると云ふやうなみすぼらしい生活をしてゐたが、細君が小言を言ふので困つてゐた。それは夏の燃えるやうな暑い時であつた。その村に周と云ふ家の庭園があつて、牆は顔れ屋は破れて、ただ一つの亭のみが残つてゐたが、涼しいので村の人達がたくさん其處へ泊りに往つた。王成もその一人であつた。

ある朝のことであつた。寝てゐた村の人達は皆歸つて往つたが、懶け者の王成一人は陽が高く昇るまで寝てゐて起き、それでまだぐづぐづしてゐて歸らうとすると草の根もとに金の釵が一つ光つてゐた。王成が拾つて視ると細かな文字を鐫つてあつた。それは儀賓府造と云ふ文字であつた。王成の祖父は衡府儀賓、即ち衡王の婿となつてゐたので、家に残つてゐる品物の中にその印のある物が多かつた。そこで王成は釵を持つてためらつてゐると、一人の老婆が来て、

「もしか、この邊に釵は落ちてゐやしなかつたかね、」

と云つた。王成は貧乏はしても頑固な正直者であつたから、すぐ出して渡した。

「これですか、」

老婆はひどく喜んだ。

「お前さんは正直者だ、感心な男だ、お蔭でたすかつたよ、これは幾らもしないものだが、先の夫の形見でね、」

王成は儀賓府造の印のなる品物を遺した夫と云ふ人の素性が知りたかつた。

「あなたの夫と云ふのは、どうした方です、」

と問うた。すると老婆が答へた。

「もとの儀賓の王東之だよ、」

王成は驚いて云つた。

「それは私のお祖父さんですよ、どうしてあなたに遇つたのでせう、」

老婆も亦驚いて云つた。

「ではお前さんは王東之の孫だね、私は狐仙だよ、百年前、お前さんのお祖父さんに可愛がられてたが、お祖父さんが歿くなつたので、私もたうとう身を隠してしまつた、それが此處を通つて釵をおとして、お前さんの手に入つたと云ふのも、天命ぢやないかね、」

王成も祖父に狐妻のあつたと云ふことを聞いてゐたので、老婆の言葉を信用した。

「さうですよ、天命ですよ、では、これから私の家へ往つてくれませんか、」

と云ふと老婆はそのまゝ隨いて來た。王成はそこで細君を呼んであはした。細君の頭髪は蓬のやうに亂れて、顔色は青いうへに薄黒みを帯びてゐた。老婆はそれを見て、

「ああ、王東之の子孫がこんなにまで貧乏になつたのか、」

と歎息、てふりかへつた。そこに敗れた竈はあつたが、火を焚いた痕も見えなかつた。老婆は云つた。

「こんなことで、どうして生きてゆかれる、」

そこで細君は細に貧乏の状態を話して泣きじやくりした。老婆は彼の釵を細君にやつて、

「それを質に入れてお米を買ふがいい、」

と云ひつけて、歸りしたくをして、

「三日したら復た來るよ、」

と云つた。王成はそれをおし留めた。

「どうか家にあててくださいよ、」

老婆は、

「お前さんは、一人のお神さんとさへくらして往くことができないぢやないかね、私が一緒になつて、ぢつとしてあぢやなほ困るぢやないかね、」

と云つてたうとう往つてしまつた。王成はその後で、細君に老婆が人間でなくて狐仙であること云ふことを話した。細君は顔色を變へて怖れた。王成は老婆に義侠心のあることを説明して、姑として

事へなければならぬと言つたので、細君も承知した。

三日目になつて果して老婆が来た。老婆は数枚の金を出して、粟と麥を一石づゝ買はせ、夜は細君と一緒に寢臺に寝た。細君は初めは懼れたが自分を可愛がつてくれる心が解つたので、それからは疑ひ懼れぬやうになつた。

翌日になつて老婆は王成に話して云つた。

「お前さんは情けてばかりあちやいけない、小生業でもしたらどうだね、坐つてたべてあちやだめだよ、」

王成は、

「商賣をしようと思つても、もとでありませんから、」

と云つた。すると老婆は、

「お前さんのお祖父さんの在つた時は、お金は使ひしだいであつたが、私は世の中の人でないから、そんな物は入用がないし、べつに貰つたことはなかつたが、それでも化粧料としてもらつたのが積つて四十兩になつて、それがそのまま残つてある、貯へて置いても入用がないから、この金で葛布を買つて、すぐ都へ往くなら、すこしはまうけがあるだらう、」

と云つた。王成は老婆の言葉に従つて、老婆から金をもらひ、その金で五十餘端の葛布を買つて歸つて来た。老婆は、

「これから支度をして、すぐ出かけるがいい、六日目か七日目には、北京へ往き著くよ、」  
と云つて、その後で、

「一生懸命にやらなくちやいけないよ、懶けちやいけないよ、それにうんと急いで、ゆるゆるしてあちやだめだよ、一日おくれたらもう後悔してもだめだ、」

と注意した。王成は承知して品物を囊に入れて出發したが、途中で雨に遇つて、著物も履物もびしよ濡れになつた。王成は平生苦勞をしたことがないから弱つてしまつた。そこで暫く休むつもりで旅館へ入つたが、雨はますます強くざあざあ降りだして夜になつてもやまなかつた。簷を見ると繩のやうな雨だれがかかつてある。仕方なしに一泊して朝になつてみると雨はやんでゐたが、路のぬかりがひどくて、旅人達は脛まで入つて往來してゐた。王成はそれにも弱つて待つてゐると、午になつて路がやつと乾いた。そこで出發しようとしてゐると斷れてゐた雲が復た合つて、又大雨になつた。王成は仕方なしに又一晩泊つて翌日出發した。そして北京に近くなつて人の噂を聞くと、葛布の價があがつたと云ふので、心のうちに喜んで北京へ入つて旅館へ往つた。旅館の主人は王成の荷物を見て、

「しまつたなあ、二三日早かつたら、うんとまうけるところだつたが、」

と云つて惜しんだ。それは南方との交通が始まつたばかりの時、葛布が來てもたくさん來なかつたうへに、市中の富豪で買ふ者がたくさんあつたので、價が非常にあがつて平生と較べて三倍ほどになつてゐた。それが王成の著く前日になつてたくさん著荷があつたので、價が急にさがつて、後から

葛布を持って来た者は皆失望してゐた。旅館の主人はそのことを王成に話した。王成は失望してふさぎこんでしまった。

翌日になつて葛布の著荷がますます多く、價はますますさがつた。王成は利益がないので賣らずにぐづぐづしてゐるうちに十日あまり経つたので、葛布の價はますますさがり、一方旅館の滞在費用もかさんで来たので、ますます煩悶した。旅館の主人が見かねて、

「置けば置くほど損をするから、今のうちに賣つてしまつて、何か他の工夫をしたらいぢやないかね、」

と云つて勧めた。王成もその言葉に従つて賣つたが、十餘兩の損をした。そして手ぶらになつて翌朝は早く起きて歸らうと思つて、金入を啓けて見ると入れてあつた金が亡くなつてゐた。驚いて旅館の主人に告げたが、主人もどうすることもできなかつた。同宿してゐた男が、

「訴へて主人から拂はしたらいいだらう、」

と云つて勧めた。王成は歎息して、

「これは運命だ、主人の知つたことぢやない、」

と云つて従はなかつた。主人はそれを聞いて王成を徳として五兩の金を贈つて歸さうとした。しかし王成は老婆にあはす顔がないので歸つても往けない。ぢつとしてゐられないので外へ出たり室の中にあたりして煩悶してゐた。ある日外出して鶉を飼はして賭をしてゐる者を見た。その賭には一賭に

數千金をかける者があつた。鶉の價を訊いてみると一羽が百文以上であつた。王成は忽ちその鶉の賣買を思ひついた。そこで金を計算してみるとどうかかうか出來さうであるから主人に相談した。

「鶉のかひだしをやりたいと思ひますが、」

主人も、

「それはいい、すぐおやりなさい、」

と云つて勧め、そのうへ王成を當分たゞで置くと言つた。王成は喜んで出かけて往つて、鶉を買へるだけ買つて籠に入れて歸つて来た。主人は喜んで云つた。

「それはよかつた、ではすぐ賣るがいいだらう、」

夜になつて大雨になつて明け方まで降り續いたが、夜が明けた比には路の上に水が出て河のやうになつた。そのうへ雨が未だやまなかつた。王成は雨の晴れるのを待つてゐたが、その雨は二三日も續いて更にやみさうにもなかつた。王成は鶉を心配して起つて往つて籠の中を見た。鶉はたくさん死んでゐた。王成は大に困つたがさてもしやうがなかつた。翌日になると鶉は大牛死んで僅に二三羽しか生きてゐなかつた。それを一つの籠へ入れて飼つてあつたが、翌日往つて窺いた時には、亦死んで一羽だけ残つてゐた。王成はそこでそれを主人に知らして、おぼえず涙を流した。

「私はなんと云ふ不運な男でせう、」

主人も王成のために口惜がつてくれたがどうすることもできない。王成はもう金が無くなつてしま

つたので、故郷へ歸らうにも歸れない、いつそ死んでしまはうと思ひだした。主人は慰めて、「まあ、さう力を落したものでぢやない、またいい事も廻つて来る、」

と云つて一緒に往つて生き残つた鶉を見てゐたが、

「この鶉は豪い奴かも知からないよ、他の鶉の皆死んだのは、それが殺したかも知からない、お前さんは暇なんだから、やつてみたらどうだね、もし良い鳥だったら、賭で生計がたつよ、」

と云つた。王成は主人に教へられたやうに鶉を馴らした。鶉ははや馴れて来た。そこで主人が持つて街頭へ出て、酒や料理を賭けて鬪はしてみると、なかなか強いので皆勝つた。主人は自分のことやうに喜んで、金を王成にやつて、復たその邊の若いものと賭をやらしたが、三たび賭けて三たび勝つた。

王成は半年ばかりの間に賭で二十金の貯蓄ができたので、心がますます慰められ、賭を自分の命のやうに大事にした。その頃某と云ふ鶉の好きな王が有つて、正月十五日の上元の節にあふごとに、民間の鶉を飼つてゐる者と呼んで、それを鬪はさした。旅館の主人は王成に向つて、

「お前さんはすぐ大金持ちになれるが、それを取るか取らないかはお前さんの運しだいだ、」

と云つて、そこで鶉好きの王の話をして聞かせ、王成を案内して一緒に往つたが、みちみち注意して、

「もし負けたならばほうほうの體で歸るばかりさ、もし、萬一お前さんの鶉が勝つたならば、王がきつと買ふと云ふから、お前さんはすぐ承知しちやいけない、もしたつて賣れと云つたら、わつちの首を見るがいいよ、それでわつちの首がうなづいたら、承知をするがいいよ、」

と云つた。王成はうなづいた。

「ああ、さうしよう、」

そこで王の屋敷へ往つてみると鶉を持つた人達が内庭にあふれてゐた。そして、暫くして王が御殿に出ると近侍の者が云つた。

「鶉を鬪はせたい願のある者は、登つてまゐれ」

すると一人の男が鶉を持って登つて往つた。王は侍臣に命じて自分の飼鳥を放たした。その男も亦自分の飼鳥を放した。その鶉と鶉とはちよつと蹴あつたかと思ふと、もう男の鶉が負けてしまつた。

王は心地よささうに笑つた。續いて二三人登つて往つたが、皆王の鶉のために負けてしまつた。旅館の主人は王成に云つた。

「今だ、」

二人は一緒に登つて往つた。王は王成の手にした鶉を見て、

「眼に怒脈があるな、これは強い鳥だ、弱い鳥ではいけない、鐵口を持つて来い、」

と云ひつけた。侍臣の一人が喙の黒い鶉を持って来て王成の鶉に當らした。二羽の鶉は一二度あつただけで王の鶉の羽が痛んでしまつた。王は更に他の良いのを選んで當らしたが、それも負け

てしまった。王は、

「急いで宮中の玉鶉を持って来い、」

と云ひつけた。侍臣が王の命のままに持つて来たのは羽の眞白な鶉のやうな鶉で、ただの鳥ではなかつた。王成はその鶉を見てしよけてしまひ、ひざまづいて罷めさしてくれと言つた。

「大王の鶉は、神物でございます、私はこの鳥で生計をたててをりますから、傷でも負ふやうなことがあつては、たちまち困つてしまひますから、」

王は笑つて云つた。

「まア放してみるがいい、もし鶉が死んでしまつたらその方に十分償ひをしてとらせる、」

王成はそこで鶉を放した。王の鶉はすぐに王成の鶉に向つて飛びかかつた。王成の鶉は玉鶉が來ると、雞の怒つたやうなふうで身を伏せて待つた。王の鶉が強い喙でつつかかつて來ると、王成の鶉は鶴の翔るやうなふうでそれを撃つた。進んだり退いたり飛びあがつたり飛びおりたり、ものゝ時にも闘つてゐたが、王の鶉の方がやうやく懈れて來た。そして、その怒はますます烈しくなり、その闘もますます急になつたが、間もなく雪のやうな毛がばらばらに落ちて、翅を垂れて逃げて往つた。見物してゐたたくさんの人達は王成の鶉をほめて羨まない者はなかつた。

王はそこで王成の鶉を手持つて、喙より爪先まで精しく見てしまつて、王成に問うた。

「この鶉は賣らないか、」

王成は此所ぞと思つたので、

「私は財産がございませんから、この鶉で命をつないでをります、賣るのは困ります、」  
と云つた。すると王が云つた。

「たくさん金を取らせる、百金を取らせるがどうぢや、賣りたいとは思はぬか、」

王成は俯向いて考へてから云つた。

「私は、もともと鶉を飼ふのが本職でもございませんから、大王がこれをお好みになりますなら、私に衣食のできるだけのことをしていただければ、それでよろしうございます、」

「それでは幾等と申すか、」

「千兩でよろしうございます、」

王は笑つて云つた。

「たはけ者奴、この鶉がどれほどの珍寶で、千兩の價があるのぢや、」

「大王には寶ではございますまいが、私に取つては連城の壁でも、これにはおつつかないと思つてをります、」

「それはどう云ふ理由ぢや、」

「私はこれを持つて、毎日市へ出てまゐりまして、毎日幾等かの金を取つて、それで粟を買つて、一家十餘人が餓ゑず凍ゑすにくらしてをります、これにうへ越す寶がありませんか、」



「わしは、くさすではない。あまり法外であるから云つたまでぢや、では二百兩とらさう、」  
王成は首をふつた。

「それはどうも、」  
すると王が金を増した。

「ではもう百兩とらせようか、」

王成は首をふりながら、旅館の主人の方をそつと見た。主人はすましこんでゐた。そこで王成は云つた。

「大王の仰でございますから、それでは百兩だけ負けませう、」

王は云つた。

「だめぢや、誰が九百兩の金を一羽の鶉と易へる者がある、」

王成は鶉を囊に入れて歸らうとした、すると王が呼びかへした。

「鶉賣來い、鶉賣來い、それでは六百兩取らさう、承知なら賣つて往け、厭ならやめるまでぢや、」

王成は又主人の方を見た。主人はまだ自若としてゐた。王成の望みは満ちあふれるほどであつた。

王成は早く返事をしないと機会を失つて大金をまうけそなふと思つたので、

「これ位の金で賣るのは、まことに苦しいございしますが、この話がかはれるやうなことがあります  
と、大王に罪を獲ることになりますから、しかたがありません、大王の仰のままにいたしませう、」

と云つて賣ることにした。王は喜んで金を秤つて王成に渡した。王成はそれを囊に入れて禮を云つてから外へ出た。外へ出ると主人がうらんで云つた。

「わつちがあれほど云つてあるぢやないか、なぜ賣り急ぎをするのです、もうすこしふんばつてゐたら八百兩になつたのですぜ、」

王成は旅館へ歸ると金を案の上へはふり出して、主人に思ふだけ取れと云つたが主人は取らないで、食料だけの金を計算して取つた。

王成はそこで旅装を整へて歸り、家に著いてそれまでの経過を話して、金を見せて慶びあつた。老婆はその金で王成に云ひつけて三百畝の良田を買はせ、屋を建てて道具を作らしたので、居然たる世家となつた。老婆は朝早く起きて王成に農業の監督をさし、細君に機織の監督をさした。そして二人がすこしでも懶けると叱りつけたが、夫婦は老婆の指揮に安んじてゐて怨みごとは云はなかつた。三年過ぎてから家はますます富んだ。その時になつて老婆が歸ると云ひだした。夫婦は涙を流して引き留めた。それで老婆も留まつたが翌日見るともうあなかつた。

# 陸 判

陵陽の朱爾旦は字を少明と云つてゐた。性質は豪放であつたが、もともとぼんやりであつたから、篤學の士であつたけれども人に名を知られてゐなかつた。

ある日同窓の友達と酒を飲んでゐたが、夜になつたところで友達の一人在らなかつた。

「君は豪傑だが、この夜更けに十王殿へ往つて、左の廊下にある判官をおぶつて來ることができかね、できたなら皆で金を出しあつて君の祝筵を開くよ、」

その陵陽には十王殿と云ふのが有つて、恐ろしさうな木像を置いてあるが、それが裝飾してあるので生きてゐるやうであつた。それに東の廊下にある判官の木像は、青い顔に赤い鬚を生やしてあるので尤も瘳惡に見えた。そのうへ夜になると兩方の廊下から拷問の聲が聞えると云ふので、十王殿に往く者は身の毛のよだつのがつねであつた。それ故に同窓生は朱を困らせにかかつたのであつた。

しかし朱は困らなかつた。彼は笑つて起ちあがつて、そのまま出て往つたが、間もなく門の外で大聲がした。

「おうい、鬚先生を伴れて來たぞ、」

同窓生は皆起ちあがつた。そこへ朱が木像をおぶつて入つて來て、それを几の上に置き、杯を執つて三度さした。同窓生はそれを見てゐるうちに怖くなつて體がすくんで來た。

「おい、どうか元へ歸して來てくれ、」

朱はそこで又酒を取つて地に灌いで、

「私はがさつ者ですから、どうかお許しください、家はつい其所ですから、お氣に向いた時があつたら、飲みをいらしてください、どうか御遠慮なされないやうに、」

と云つて、そこで又その木像をおぶつて往つた。

翌日になつて同窓の者は約束どほり朱を招いて飲んだ。朱は日暮れまでゐて半酔になつて歸つたが、物足りないので燈を明るくして獨酌してゐた。と、不意に簾をまくつて入つて來た者があつた。見るとそれは昨夜の判官であつた。朱は起つて云つた。

「俺は死ななくちやならないのか、昨日神聖をけがしたから、殺しに來たのだらう、」

判官は濃い髯の中から微笑を見せて云つた。

「いや、さうぢやない、昨日招かれたから、今晚は暇でもあつたし、謹んで達人との約を果さうと思つて來たところだ、」

「さうか、それは有難い、」

朱はひどく悦んで、判官の衣を牽いて坐らし、自分で往つて器を洗ひ酒を温めようとした。すると判官が云つた。

「天氣が温いから、冷でいいよ、」

朱は判官の云ふとほりに酒の瓶を案の上に置き、走つて往つて家内の者に云ひつけて肴をこしらへさせた。細君は大に駭いて、判官の傍へ往かさないやうにしたが、朱は聴かないで、立つたままで肴のできるのを待つて出て行き、判官と杯のやりとりをした。そして朱は判官に、

「あなたの姓名を知らしてください、」

と云つた。判官は、

「僕は陸と言ふ姓だが、名はないよ、」

と云つた。そこで古典の談をしてみると、その應答は響のやうであつた。朱は陸に進士の試験に必要文章のことを聞いた。

「制藝を知つてをりますか、」

陸は、

「よしあし位は知つてをる、」

と云つて文章の談をし、それから冥土の官署の談をしたが、ほぼ現世と同じかつた。陸は非常な大酒で一飲み十の大杯に入れるほどの酒を飲んだ。朱は陸の相手になつて朝まで飲んでゐたので、たうとう酔ひ倒れて案にうつぶしになつて睡つて、醒めた比には殘燭ほの暗く怪しいお客はもうゐなかつた。

それからと云ふものは、陸は二日目か三日目にやつて來たので、二人の間はますます親密になつた。時とするに酒を飲んでゐてそのまま倒れて寝て往くこともあつた。朱が文章の草稿を見せると陸が朱筆で消して、

「どうも佳くない、」

と云つた。ある夜、朱が酔うて先に寝た。陸はまだ獨りで飲んでゐた。朱はその時夢心地に臟腑に微な痛みを覺えたので、眼を醒ました。陸が寢臺の前に坐つて、自分の胸を斬り裂いて腸胃を引き出し、それを一筋一筋整理してゐるところであつた。朱は愕いて云つた。

「何の怨みもないのに、なぜ僕を殺すのだ、」

陸は笑つて云つた。

「懼れることはない、僕は君のために、聰明な心を入れかへてゐるのだ、」

陸はしづかに腸を中へ納めて創口を合はせ、その後で足を包む布で朱の腹から腰のあたりを纏帯して手術を終つたが、寢臺の上を見ても血の痕はなかつた。朱は僅に腹のあたりが麻れるばかりであつた。ふと見ると陸の置いた肉塊が案の上にあつた。朱は怪しんで、

「それはなんだらう、」

と云つて聞いた。陸は、

「それは君の心だよ、君の文章の拙いのは、君の心の毛穴が塞つてゐるためだから、冥土に在る幾千萬

の心の中から、佳いのを一つ選びだして、君のために易へたからね、」

と云つて起ちあがり、扉を閉めて出て往つた。朝になつて朱は布を解いて見た。創口の縫ひ目はびつたりと合つて、糸筋のやうな赤い痕が残つてゐた。

その時から朱の文章が非常に進んで、眼にふれたものは忘れないやうになつた。數日して朱は又文章を作つて陸に見せた。陸は云つた。

「いい、この文章ならいい、だが、君は福が薄いから、大に名を顯すことはできないが、郷科にはとほるよ、」

郷科とは郷試で各省で行ふ試験であつた。そこで朱は問うた。

「それは何時あるだらう、」

陸は云つた。

「今年あるよ、君はそれに優等で及第するよ、」

間もなく郷試があつたので、朱もそれに應じてみると第一等の成績を得、秋の本試験には經元に及第した。朱の同窓は朱の郷試に應じたことを笑つてゐたが、試験の成績を見るに及んで、皆で顔を見合はして驚いた。そして朱にその理由を聞いて始めて不思議のあつたことを知つたので、朱に紹介してもらつて陸と交際したいと頼んで來た。その結果陸が承諾して來たので、皆で大に酒席を設けて待つてゐた。初更の比になつて陸がやつて來た。赤い髻を動かし、目を電のやうにきらきらと光らす

ので、皆が恐れて魂のぬけた人のやうになり、齒の根もあはずに顫へてゐたが、座にたへられないので一人歸り二人歸りしてゐなくなつてしまつた。朱はそこで陸を伴れて自分の家へ歸つて飲み、既に酔つてから陸に云つた。

「君に賜を易へてもらつて非常な恩を受けてゐるが、も一つ頼みたいことがある、聞いてもらへるかね、」

「どんなことだね、」

「君は賜をかへることが出来るから、顔をかへることも出来るだらう、僕の妻は、少年の時から夫婦になつてゐるもので、體はそんなに悪くはないが、如何にも顔が拙いからね、」

陸は笑つて云つた。

「いいとも、すこし待つてゐてくれたまへ、」

それから數日して夜半に陸が來て門を叩いた。朱は急いで起きて往つて内へ入れ、燭を點けた。見ると陸の懷には何か物が入つてゐた。

「それは何だね、」

と朱が訊いた。陸は懷から包みを出して、

「君にこの間頼まれたものだよ、ちよいと佳いのがなくて困つてゐたが、やつと今晚佳い美人の首を手に入れたから、君の頼みをはたすことができるよ、」

と云つた。朱がそれを開けて見ると血のべとべとした女の頭であつた。陸はそこで、

「早く、早く、急ぐんだよ、そして人を起してはいけないよ、」

と云つて居間に入らうとしたが、夜は入口の扉をきちんと締めてあるので朱は困つてゐた。と、陸が来て片手で押した。扉は手に従つてしぜんと開いた。そこで細君の寢室へ入つた。細君は體を横にして眠つてゐた。陸は美人の頭を朱に持たして、自分は靴の中から七首のやうな刃物を出し、細君の頭にあてがつて瓜を切るやうに切りはなした。頭はころりと枕の傍へ落ちた。陸は急いで朱の持つてゐる美人の頭を取つて切口にきちんと合はせ、そして後にしつかりと押しつけたが、これがすむと枕を肩にあてがひ朱に云ひつけて細君の頭を静な所に埋めさせて歸つて往つた。

朱の細君はその後で眼を醒したが、頭のまはりやすこし麻れて、顔がこはばつたやうな氣がするの  
で手をやつてみた。するとその手に血が著いたのでひどく駭いて、婢を呼んで盥に水を汲ました。婢  
は細君の顔が血みどろになつてゐるので驚いて倒れさうにした。やがて細君が顔を洗つてみると盥の  
水が眞赤になつた。洗つた後で細君が首を擧げると、顔の相好が變つてゐるので婢はますます駭い  
た。細君は鏡を取つて顔を映してみた。見も知らぬ人の顔になつてゐるので駭いてしまつた。そこへ  
朱が入つて来て理由を話した。細君はそれによつて顔を映しなほして精しく見た。それは眉の長い笑  
靨のある繪に畫いたやうな美人の顔であつた。領をすかして驗べてみると、紅い糸のやうな筋がぐる  
りに著いて、上と下との肉の色がはつきりと違つてゐた。

その時吳侍御と云ふ者があつて、美しい女を持つてゐたが、二度も許婚をして結婚しないうちに夫  
になる人が歿くなつたので、十九になつてもまだ嫁入しなかつた。それが上元の日じふわうでんに參詣し  
たが、その日は參詣者が非常に多くて雑沓してゐた。その時一人の惡漢があつて、吳侍御の女の美し  
いを見て、そつと所を聞いておいて、夜になつて梯をかけて忍びこんだ。そして寢室に穴を開けて  
入り、一人の婢を寢臺の下で殺して女に逼つた。女は惡漢の自由にならずに大聲を立てて力一ぱい  
に抵抗した。惡漢は怒つて女の頭を切り落して逃げた。女の母の吳夫人が隣の室の騒ぎを微に聞きつ  
けて、婢を呼んで見に往かした。婢は女の死骸を見て氣絶した。そこで大騒ぎになつて家の者が  
皆起き、女の死骸を表座敷に移して、その頭を合せるやうにして置き、皆で泣きながら終夜ごたごた  
と騒いだ。

朝になつて女の死骸にかけた衾を開けてみると頭がなくなつてゐた。吳侍御は怒つて侍女達を鞭で  
たたいてせめた。

「きさま達の番のしかたが悪いから、犬に喰はれたのだ、」

吳侍御は郡守に訴へた。郡守は目を限つて賊を探したが、三箇月しても捕へることができなかつ  
た。その時になつて朱の家の細君の頭の換つたことを吳侍御に云ふ者があつた。吳侍御は不審に思つ  
て、媼を朱の家へやつて探らした。媼は朱の家へ往つて細君の顔を一眼見て、駭いて歸つて来て吳侍  
御に告げた。吳侍御は女の死骸が依然としてあるのに、頭だけが生きてゐて他人の細君の頭とかはる

と云ふやうなことはあるべきはずのものでないと思つたが、しかし朱が怪しい術を行ふ者であつて、自分の女を殺したかも知れないと疑へば疑はれないこともないので、自分から出かけて往つて朱に詰問した。

「お前が殺して左道へかへたものだらう、」

朱は云つた。

「妻は睡つてゐてかへられたものです、實に不思議ですが、その理由がわからないのです、僕が殺したと云ふのは冤罪です、」

吳侍御は朱の言葉に信にできないので訴へた。郡守は朱の家の者を捕へて詮議をしたが、皆朱の云つたと同じ申立てであるから、どうすることもできなかつた。朱は郡守の許から歸つて陸に謀を問うた。

「どうしたらいいだらう、」

陸は云つた。

「なんでもないよ、吳侍御の女に云はしたらいいよ、」

その夜吳侍御の夢に女があらはれて、

「私を殺したのは、蘇溪の揚大年と云ふ悪黨ですよ、朱孝廉の知つたことではありません、ただ朱孝廉の妻が美しくないので、陸判官が私の頭と取つかへたまでです、それに私は體は死にましても、頭

が生きてをりますから、どうか朱孝廉を仇にしないやうにしてください、」

と云つた。夢が醒めて吳侍御がそれを夫人に話すと、夫人もやはりそれと同じ夢を見てゐた。そこで吳侍御は女を殺した悪人のことを官に告げた。官で人をやつて詮議をさすと果して揚大年と云ふ者があつたので、捕へて械を入れて詮議をしてみると罪狀を白狀した。吳侍御はそこで更めて朱の家へ往つて、夫人に逢はしてくれと云つて朱の細君に逢つたが、そんなことから朱を自分の婚とした。そして朱の細君の頭を女の死骸に合はせて葬つた。

朱は後に三たび禮闈に應じたが、試験場の規則に合はなかつたので試験を受けることができなかった。禮闈とは禮部の試のことで、各省の舉人、即ち郷試の及第者を京師に集めて舉行する所謂科擧のことであるが、それは禮部で掌つてゐるから禮闈と言ふのであつた。朱はそこで官吏になる心がなくなつてしまつた。

それから三十年の歲月が経つた。ある夜、陸が來て、

「君の壽命ももう永くないよ、」

と云つた。そこで朱がその期間を問うた。

「何時死ぬるだらう、」

「もう五日しかないよ、」

それには朱も驚いた。

「救うてくれるわけにはいかないかね、」

陸は云つた。

「それは天の命ずるところだから、人間はどうすることもできないよ、それに達人から見ると、生死は一つぢやないか、生を楽しいとすることもなければ、死を悲しいとすることもない、」

朱はなるほどとさつた。そこで葬儀の用意をして、それが終つたので盛装して死んで往つた。翌日細君が柩にとりすがつて泣いてゐると、朱が冉冉として外から入つて来た。細君は懼れた。朱は云つた。

「わしは、あの世の人であるが、生きてゐた時とすこしもかはらない、寡婦になつたお前と子供のことを思ふとなつかしくてたまらないからやつて来たのだ、」

細君はそれを聞くと一層悲しくなつて慟哭した。その涙が胸まで流れた。朱は依依として慰めた。細君が云つた。

「昔から還魂と云ふことがあります、あなたは靈が有るぢやありませんか、なぜそれを用ひてくださいません、」

朱は云つた。

「天の命數に違ふことはできないよ、」

「では、あなたは、冥土で何をしています、」

「陸判官が推薦して、裁判の事務を監督する役にして、官爵を授けてくれたから、すこしも苦しいことはないよ、」

そこで細君が又何か云はうとすると、朱が止めて、

「陸公が一緒に来てゐるから、酒肴の支度をしてくれ、」

と云つて出て往つた。細君がその言葉に従つて酒肴の用意を出すと、室の中で笑つたり飲んだりして、その豪氣と高聲は生前とすこしも違はなかつた。そして夜半に往つて窺いてみると宵然としてゐなかつた。

それから三日おきぐらゐに来て、時をりは泊つて細君と話して往つた。家の中のことはそれぞれ處理した。子の緯はその時五歳であつたが、來ると手を引いたり抱いたりして可愛がつた。緯が七八歳になつた時には、燈下で讀書を教へた。緯も亦聰明であつた。九歳で文章を作り、十五になつて村の學校へ入つたが、つひに父の歿くなつてゐることを知らなかつた。

その時から朱の來ることが漸く疎くなつて、月に一度か二度しか來ないやうになつた。ある夜來て細君に云つた。

「これでお前達といよいよ訣れる時が來た、」

そこで細君が訊いた。

「何處へ往きます、」

朱は云つた。

「上帝の命を受けて、太華卿となつて、遠くへ往くから、事務が煩はしいうへに途も遠いので、もう來ることができない、」

母子のものがとりすがつて泣いた。すると朱は、

「泣いてはいけない、もう子供も大きくなつて、生活にも困らないぢやないか、百年も離れない夫婦が何處にある、」

と云つて、緯をかへりみて、

「よく立派な人になれ、父の後を絶やしてはならんぞ、十年したら一度逢ふ、」

と云つてそのまま門を出て往つたが、それから遂に來なかつた。

後、緯が二十五になつて、進士に擧げられ、行人の官になつて、命を奉じて西岳華山の神を祭りに往つたが、華陰にかかると、輿に乗つて羽傘をさしかけて往く一行が鹵簿に衝かかつて來た。不思議に思つて車の中をよく見ると、それは父の朱であつた。緯は泣きながら馬をおりて左側の道にうづくまつた。朱は輿を停めて、

「お前が官について評判が好いので、わしも安心してゐるぞ、」

と云つた。緯はうづくまつたなりに起きなかつた。朱は車をうながして往つてしまつたが、すこし往つて振りかへり、佩びてゐた刀を解いて人に持たしてよこし、遙に緯に向つて、

「その刀を持つてゐると出世するぞ、」

と云つた。緯が追つて往かうとすると、朱の一行の車も人もひらひらと風のやうに動いて、みるみる見えなくなつてしまつた。緯は痛恨やや久しうして刀を抽いて見た。それは精巧な刀であつたが、一行の文字を鐫つてあつた。それは 瞻 欲 大 而 心 欲 小 知 圓 而 行 欲 方 と云ふのであつた。

緯は後、官が司馬となつて五人の子供を生んだ。それは沈、潛、渤、渾、深の五人であつた。ある夜、渾の夢に父が來て、

「佩刀を渾に贈れ、」

と云つた。緯は父の言葉に従つて渾に贈つた。渾は後に都御史になつて政治に功績があつた。



## 嬰 審

王子服は莒の羅店の人であつた。早くから父親を失つてゐたが、はなはだ聰明で十四で學校に入つた。母親がひどく可愛がつて、ふだんには郊外へ遊びに往くやうなこともさせなかつた。蕭と云ふ姓の家から女をもらつて結婚させることにしてあつたが、まだ嫁入つて來ないうちに歿なつたので、代りに細君となるべき女を探してゐたが、まだ纏まつてゐなかつた。

そのうちに上元の節となつた。母方の徒兄弟に吳と云ふ者が有つて、それが迎ひに來たので一緒に遊びに出て、村はづれまで往つた時、吳の家の僕が吳を呼びに來て伴れて往つた。王は野に出て遊んでゐる女の多いのを見て、興にまかせて獨りで遊び歩いた。

一人の女が婢を伴れて、枝に著いた梅の花をいぢりながら歩いてゐた。それは珍らしい佳い容色で、その笑ふさまは手に掬つてとりたいたいほどであつた。王はぢつと見詰めて、相手から厭がられると言ふことも忘れてゐた。女は二足三足往き過ぎてからを婢振りかへつて、

「この人の眼は、ぎよろきよろしてて、盜賊みたいね、」

と云つて、花を地べだに打ちちやり、笑ひながら往つてしまつた。王はその花を拾つたが悲しくて泣きたいやうな氣になつて立つてゐた。そして、魂のぬけた人のやうになつて怏怏として歸つたが、

家へ歸ると、花を枕の底にしまつて、うつぶしになつて寝たきり、ものも言はなければ食事もしなかつた。

母親は心配して祈禱したりまじなひをしたりしたが、王の容體はますます悪くなるばかりで、體もげつそり瘠せてしまつた。醫師が診察して藥を飲まして病氣を外に發散させると、ぼんやりとして物に迷つたやうになつた。母親はその理由を聞かうと思つて、

「お前、どうしたの、お母さんには遠慮がいらぬから、云つてごらんよ、お前の良いやうにしてあげるから、」

と云つて優しく訊いても黙つて返事をしなかつた。そこへ吳が遊びに來た。母親は吳に悴の祕密をそつと聞いてくれと頼んだ。そこで吳は王の室へ入つて往つた。王は吳が寢臺の前へ來ると涙を流した。吳は寢臺に寄り添うて慰めながら、

「君は何か苦しいことがあるやうだが、僕にだけ云つてくれたまへ、力になるよ、」  
と云つて訊いた。王はそこで、

「君と散歩に出た日にね、」

と云ふやうなことを前おきにして、精しく事實を話して、

「どうか心配してくれたまへ、」

と云つた。吳は笑つて、

「君も馬鹿だなあ、そんなことはなんでもないぢやないか、僕が代つて探してみよう、野を歩いてゐる女だから、きつと家柄の女ぢやないよ、もし、まだ許嫁がなかつたなら、なんでもないし、許嫁があるにしても、たくさん賄賂をつかへば、はかりごとは遂げられるよ、まアそれよりか病氣をなほしたまへ、この事は僕が屹と良いやうにして見せるから、」

と云つた。王はこれを聞くと口を開けて笑つた。

吳はそこで王の室を出て母親に知らせた。母親は吳と相談して女の居所を探したが、名もわからなければ家もわからないので、その年恰好の容色の佳い女のゐさうな家を聞きあはして、それからそれと索してもどうしても解らなかつた。母親はそれを心配したがどうすることもできなかつた。

そして王の方は、吳が歸つてから顔色が晴ばれとして来て、食事もやつとできるやうになつた。

二三日して吳が再び来た。王は待ちかねてゐたのですぐ問うた。

「君、あの事はどうだつたかね、」

吳はほんたうの事が云へないので、でたらめを云つた。

「よかつたよ、僕はまた何人かと思つたら、僕の姑の女即ち、君の従妹ぢやないか、ちやうどもらひ手を探してゐたところだよ、身内で結婚する嫌ひはあるが、わけを云へばまとまらないことはないよ、」

王は喜びを顔にあらはして訊いた。

「家は何處だらう、」

吳はまた口から出まかせに云つた。

「西南の山の中だよ、此所から三十里あまりだ、」

王は又そこで吳に幾度も幾度も頼んだ、

「ほんとに頼むよ、いいかね、」

「いいとも、僕が引き受けた、」

吳はさう云つて歸つて往つた。王はそれから食事が次第に多くなつて、日に日に癒つて往つた。そして思ひだしては枕の底を探して彼の梅の花を出した。花は萎れてゐたけれどもまだ散つてゐなかつた。王は彼の女のことを考へながら、それが彼の女でもあるやうにその花をいぢつた。

王は吳の返事を待つてゐたが吳が來ないので、ふしんに思つて手紙を出した。吳は用事にかこつて來なかつた。王は怒つて悶えてゐた。母親は復た病氣になられては大變だと思つたので、急に他から嫁をもらふことにして、それをちよつと相談したが、王は首を振つて振りむかなかつた。そして、ただ毎日吳の來るのを待つてゐたが、どうしても吳が來ないので、王はたちまち怒つて吳を怨んだが、ふと思ひなほして、三十里はたいした道でもない、他人に頼む必要がないと云つて、彼の梅の花を袖に入れて、氣を張つて出かけて往つた。家の人はそれを知らなかつた。

王は獨り自分の影を路伴れにして往つた。そして道を聞くこともできないので、ただ南の方の山を

望んで往つた。ほぼ三十里あまりも往くと、山が重なりあつて、山の氣が爽に肌に迫り、寂として人の影もなく、ただ鳥のあさり歩く道があるばかりであつた。遙に谷の下の方を見ると、花が咲き亂れて樹の茂つた所に、僅な人家がちらちらと見えてゐた。

王は山をおりてその村へと往つた。わづかしかない人家は皆茅葺であつたが、しかし皆風流な構へであつた。北向きになつた一軒の家があつた。門の前は一めに柳が植わり、牆の内には桃や杏の花が盛りで、それに長い竹をあしらつてあつたが、野の鳥はその中へ来て格傑と鳴いてゐた。

王は何處かの園亭だらうと思つたので、勝手に入らなかつた。振りむくとその家の向ひに、大きな滑らかな石が有つた。王はそれに腰をかけて休んでゐた。と、牆の内に女がゐて、聲を長くひつぱつて、

「小榮、」

と呼ぶのが聞えた。それはなまめかしい細い聲であつた。王はそのまゝその聲を聞いてゐると、一人の女が庭を東から西の方へ往きながら、杏の花の小枝を執つて、首を俯向けて髪にささうとして、ひよいと頭を擧げた拍子に王と顔を見あはすと、もうそれをささずになつと笑つて花をいぢりながら入つて往つた。それは上元の日に遇つた彼の女であつた。王はひどく喜んで、すぐ入つて往きたいと思つたが、姨の名も知らなければ往復したこともないので、何と云つて入つて往つていいかその口實がみつからなかつた。それかと云つて門内に訊くやうな人もゐないので訊くこともできなかつた。王

は仕方なしに朝から夕方まで石に腰をかけたなりその邊を歩いたりして、その家に入つて往く手がかりを探してゐたので、ひもじいことも忘れてゐた。その時彼の女が時どき半面をあらはして窺きに来て王が其所に何時もあるのを不審がるやうであつた。夕方になつて一人の老婆が杖にすがつて出て来て王に云つた。

「何處の若旦那だね、朝から來てゐなさるさうだが、なにをしてをりなさる、ひもじいことはないかね、」

王は急いで起つてお辭儀して、

「私は親類を見舞はうと思つて、來てゐるのです、」

と云つたが、老婆は耳が遠いので聞えなかつた。そこで王は又大きな聲で云つた。それはやつと聞えたと見えて、

「親類は何と云ふ苗字だね、」

と云つたが、王は苗字を知らないので返事ができなかつた。老婆は笑つて言つた。

「苗字を知らずに、どうして親類が見舞はれるのだよ、お前さんは書ばかり讀んでゐる人だね、私の家へおいでよ、御飯でもあげよう、汚い寢臺も有るから、明日の朝歸つて、苗字を聞いてまた來るがいいよ、」

王はその時空腹を感じて物を喫ひたかつた。また彼の美しい女の傍へ往くこともできる。王は大喜

びで老婆に従いて入つて往つた。

門の内は白い石を石だたみにして、紅い花がその道をさしはさみ、それが入口の階段にちらちらと散つてゐた。西へ折れ曲つて又一つの門を潜ると、豆の棚と花の架とが庭一ぱいになつてゐた。老婆は王を案内して家の内へ入つた。白く塗つた壁が鏡のやうにきらきらと光つて、窓の外には花の咲き満ちた海棠の枝が垂れてゐて、それが室の内へもすこしばかり入つてゐた。室の内は敷物、几、寢臺にいたるまで、皆清らかで澤のある物ばかりであつた。

王が腰をおろすと、窓の外へ何人かが来て窺くのがちらちら見える。老婆が、

「小榮、早く御飯をこしらへるのだよ、」

と云ふと、外から女がかんだかい聲で、

「へい、」

と返辭をした。そこで二人の座が定まつたので、王が精しく自分の家柄を話した。すると老婆が、

「お前さんの母方のお祖父さんは、吳と云ふ姓ぢやなかつたかね、」

と云つた。そこで王が、

「さうです、」

と云ふと、老婆は驚いた。

「では、お前さんは、私の甥だ、お母さんは私の妹だ、しよつちう貧乏してゐるうへに、男ぎれが

ないから、ついつい往來もしなかつたが、甥がこんなに大きくなつてるのに、まだ知らなかつたとは、どうしたことかなあ、」

王は云つた。

「私が此所へ来たのは、姨さんを見舞ひに来たのですよ、ついあわてたものですから、苗字を忘れたのですよ、」

老婆は言つた。

「私の苗字は秦だよ、つひぞ小供はなかつたが、妾にできた小さな小供があつて、その母親が他へ嫁に往つたものだから、私が育ててゐるが、それほど馬鹿でないよ、だが嫉がたりないでね、氣樂で悲しいと云ふやうなことは知らないよ、今、すぐ此所へ來させて逢はせるがね、」

間もなく婢が飯を持って來た。肥つた雞の雛などをつけてあつた。老婆は王に、

「何もないがおあがりよ、」

と言つて勧めた。王が云ふままに膳について食べてしまふと、婢が來て跡仕末をした。老婆はその婢に言つた。

「鶯子を呼んでおいで、」

「はい、」

婢が出て往つてからやや暫くして、戶外でひそかに笑ふ聲がした。すると老婆は、

「嬰甯、お前の姨さんの家の兄さんが此所にあるよ。」

と云つた。戶外では一層笑ひだした。それは婢が女を伴れに往つてゐるところであつた。婢は女を推し入れるやうにして伴れて來た。女は口に袖を當ててその笑ひを遏めようとしてゐたが遏まらなかつた。老婆はちよと睨んで、

「お客さんがあるぢやないかね、これ、これはなんと云ふことだよ、」  
と云つた。女はやつと笑ひをこらへて立つた。王はそれにお辭儀をした。老婆は女にむかつて言つた。

「これは王さんと云つて、お前の姨さんの子供だよ、一家の人知らずにて、人さまを笑ふと云ふことがありますか、」

王は老婆に、

「この方はおいくつです、」

と女の年を問うた。老婆にはそれが解らなかつたので、王は又繰りかへした。すると女が復た笑ひだして顔をあげることができなかつた。老婆は王に向つて云つた。

「私の躰がたりないと云つたのは、それだよ、年はもう十六だのに、まるで、嬰兒のやうだよ、」  
王は云つた。

「私より一つ、妹ですね、」

老婆は云つた。

「おお、お前さんは、もう十七か、午歳になるのだね、」  
王はうなづいた。

「さうですよ、」

老婆が訊いた。

「お前さんのお嫁さんは、何と云ふ人だね、」

「まだありませんよ、」

「お前さんのやうな才貌で、なぜ十七になるまでお嫁さんをもらはないね、嬰甯もまだ約束もないし、まことに良い似合だが、惜しいことには身内と云ふ、かかはりがあるね、」

王は何も云はずに嬰甯をぢつと見てゐて、他へ眼をやる暇がなかつた。婢は女に向つて小聲で囁いた。

「眼がきよろきよろしてゐますから、まだ盜賊がやまないでせう、」

女は又笑ひながら、婢を見かへつて、

「花桃が咲いたか咲かないか、見て来ようよ、」

と云つて、急いで起ち、袖を口に當てながら、刻み足で歩いて往つた。そして門の外へ出たかと思ふと崩れるやうに大聲を出して笑つた。

老婆も體を起して、婢を呼んで王のために夜具の支度をさしながら王に云つた。

「お前さん、此所へ来るのは容易でないから、来たからにや、三日や五日は逗留していくがいいよ、ゆつくりお前さんを送つてあげるから、もし鬱陶しいのが嫌でなければ、家の後には庭がある、氣ばらしをするがいいよ、書物もあるから読むがいい、」

翌日になつて王は家の後へ歩いて往つた。果して半畝位の庭があつて、細な草が毛氈を敷いたやうに生え、その選には揚柳の花が米粒を撒いたやうに散つてゐた。そこに草葺の三本柱の亭が有つて、花の木が枝を交へてゐた。

王は小刻みに歩いてその花の下を往つた。頭の上の樹の梢がざわ／＼と鳴るので、ふいと顔をあげてみた。そこに嬰甯があがつてゐたが、王を見つけるとをかしくてをかしくてたまらないと云ふやうに笑ひだした。王ははらはらした。

「およしよ、おつこちるよ、」

嬰甯は木からおりはじめた。おりながらとめどもなしに笑つて廢すことができなかつた。そして、やつと足が地にとどきさうになつてから、手を滑らして墮ちた。それと一緒に笑ひもやんだ。王は嬰甯を扶け起したが、その時そつとその腕をおさへたので、嬰甯の笑ひが又おこつた。嬰甯は樹にかきつくやうにして笑つて歩くこともできなかつたが、暫くしてやつとやんだ。

王は嬰甯の笑ひやむのを待つて、袖の中から彼の萎れた梅の花を出して、

「これを知つてるの、」

と云つた。嬰甯は受け取つて云つた。

「枯れてるぢやないの、なぜ、こんな物を持つてるの、」

「これは上元の日、あんたがすてたものぢやないか、だから持つてゐるのだよ、」

「持つててどうするの、」

「あんたを愛するためだよ、上元の日にあんたに逢つてから、思ひこんで病氣になつて、もう死ぬるかと思つたのだよ、それがかうして逢へたから、氣の毒だと思つておくれよ、」

嬰甯は云つた。

「そんなことなんでもないわ、親類の間柄ですもの、兄さんがお歸りの時、老爺を呼んで来て、庭中の花を大きな籠へ折らせて、おぶはしてあげますから、」

王は云つた。

「馬鹿だなあ、」

嬰甯は云つた。

「なぜ、馬鹿なの、」

王は云つた。

「私は花が好きぢやないよ、花を持つてゐた人が好きなのだよ、」

嬰甯は云つた。

「親類ぢやないの、愛するのはあたりまへだわ、」

王は云つた。

「私が愛と云ふのは、親類の愛ぢやないよ、つまり夫婦の愛だよ、」

嬰甯は云つた。

「親類の愛だつておんなぢやないの、」

「夫婦になつたら一緒にゐるのだよ、」

嬰甯は俯向いて考へこんでゐたが、暫くして云つた。

「私、知らない人と一緒にゐたことないわ、」

その言葉のまだ終らない時に、婢がそつとやつて來たので、王はあわてて逃げた。

暫くして王と女は、老婆の所で逢つた。老婆は嬰甯に訊いた。

「何所へ往つてたね、」

嬰甯は言つた。

「庭で話してゐたわよ、」

老婆は云つた。

「とうに御飯ができてゐるのに、何の話をしてゐたのだよ、またお喋をしてゐたのだらう、」

嬰甯は云つた。

「兄さんが私と一緒に……」

王はひどく困つて急に嬰甯に眼くばせした。嬰甯はにつと笑つてよした。しかし幸にしてそれは

老婆に聞えなかつたが、そのかはり老婆はくどくどと嬰甯の長く歸らなかつた理由を訊いた。そこで

王は他のことを云つて打ち消し、そのうへで小聲で嬰甯を責めた。

「あんな馬鹿なことを云ふものぢやないよ、」

すると嬰甯が云つた。

「あんなことを云つてはいけないの、」

王は云つた。

「そんなことを云ふのは、人に背くと云ふのだよ、」

嬰甯は云つた。

「他人に背いても、お祖母さんには背かれないわ、それに一緒にゐることなんて、あたりまへのこと

ぢやないの、何も隠さなくつてもいいぢやないの、」

王は嬰甯に愚な所のあるのを残念に思つたが、どうすることもできなかつた。

食事がちやうど終つた時、王の家の者が二疋の馬を曳いて王を探しに來た。それは王が家を出た日

のことであつた。王の母親は王の歸りを待つてゐたが、あまり歸りが遅いので始めて疑ひをおこし、

村中を幾回も捜してみたが何所にもあつた。そこで吳の家へ往つた。吳はでたらめに云つた自分の言葉を思ひだして、西南の山の方へ往つて尋ねてみよと教へた。家の者は幾個かの村を通つて始めて此所に來たのであつた。王は門を出ようとして、その人達に逢つたのであつた。王はそこで入つて往つて老婆に知らし、そのうへ嬰寧を伴れて歸りたいと云つた。老婆は喜んで云つた。「私がさう思つてゐたのは、久しい間のことだよ、ただ私は、遠くへ往けないから、お前さんが伴れて、姨さんに見知らせてくれると、好都合だよ。」

「そこで老婆は、」

「寧子や、」

と云つて嬰寧を呼んだ。嬰寧は笑ひながらやつて來た。老婆は、

「何の喜しいことが有つて、何時もそんなに笑ふのだよ、笑はないと一人前の人なのだが、」

と云つて、眼に怒を見せて云つた。

「兄さんがお前を伴れていつてくれると云ふから、支度をなさいよ、」

老婆は又使の者に酒や飯を出してから、一行を送りだしたが、その時嬰寧に云つた。

「姨さんの家は田地持ちだから、餘計な人も養へるのだよ、あつちに往つたなら、どうしても歸つてはいけないよ、すこし詩や禮を教はつて、姨さんに事へるが好い、そして、姨さんに良い旦那をみつけてもらはなくちやいけないよ、」

二人は出發して山の回みに往つて振りかへつた。ぼんやりではあるが老婆が門に倚つて北の方を見てゐるのが見えた。

やがて二人は王の家へ著いた。母親は美しい女を見て訊いた。

「これは何方、」

王は、

「それは姨さんの家の子供ですよ、」

と云つた。母親は、

「姨つて、何時か吳さんの云つたことは、うそですよ、私には姉なんかありませんよ、どうして姪があるの、」

と云つて、嬰寧の方を向いて云つた。

「ほんとに私の姪なの、」

嬰寧は云つた。

「私、お母さんの子ぢやないの、お父様は秦と云ふ苗字なの、お父様の歿くなつた時、私、あかんぼでしたから、何も覚えはありませんの、」

母親は云つた。

「さう云へば、私の一人の姉が、秦へ嫁入つてたことは確だが、歿くなつてもう久しくなつてゐるの、」



に、なんで復た生きてゐるものかね、」

そこで顔の恰好や痣や贅のあるなしを訊いてみると、一いち合つてゐる。しかし母親の疑は晴れなかつた。

「それや合つてゐるがね、しかし歿くなつて、もう久しくなる、どうして復た生きてゐるものかね、」  
判断がつかかねてゐる時、呉が來た。嬰寧は避けて室の中へ入つた。呉は理由を聞いて暫くぼんやりしてゐたが、忽ち云つた。

「女は嬰寧と云やしないかい。」

「さうだよ、」

と王が云つた。呉は、

「いや、そいつは、怪しいよ、」

と云つた。王は呉が女の名を知つてゐることを先づ聞きたかつた。

「君はどうしてその名を知つてゐるね、」

「秦の姑さんが歿つた後で、姑丈さんが鰥である、狐がついて、瘡せて死んだが、その狐が女の子を生んで、嬰寧と云ふ名をつけ、むつきに包んで牀の上に寝かしてゐるのを、家の者は皆見てゐたのだ。姑丈が歿した後でも、狐が時をり來てゐたが、後に張天師のかぢ符をもらつて、壁に貼つたので、狐もたうとう女の子を伴れて往つたのだが、それぢやないかね、」

皆で疑つてゐる時、室の中からくつくつと笑ふ聲が聞えて來た。それは嬰寧の笑ふ聲であつた。母親は云つた。

「ほんとに彼の子は馬鹿だよ、」

呉が女に逢つてみようと思ひだした。そこで母親が室の中へ呼びに往つた。嬰寧はまだ大笑ひに笑つてゐて此方に向かなかつた。

「ちよとおでなさいよ、逢はせる人があるから、」

嬰寧は始めて力を入れて笑をこらへたが、又壁の方に向つてこみあげて來る笑をこじらしてゐるやうにしてゐて、時を移してからやつと出たが、わづかに一度お辭儀をしたのみで、もうひらりと身をかへして室の中へ入つて、大聲を出して笑ひだした。それがために家中の婦が皆ふきだした。

呉はその不思議を見きはめて、異狀がなければ媒妁人にならうと云つて、西南の山の中の村へ尋ねて往つた。そこには家も庭もまつたく無くて、ただ木の花が落ち散つてゐるばかりであつた。呉は姑の墓がそのあたりにあるやうな氣がしたが、何も慕らしいものが見えないので、疑ひ怪しみながら歸つて來た。

母親は呉の報告を聞いて、嬰寧を幽霊ではないかと疑つて、その室へ入つて往つて、

「お前さんの家は、ないと云ふぢやないか、どうしたの、」

と云つたが、嬰寧はべつにあわてもしなかつた。

「お氣の毒ねえ、家がなくなつて、

とも云つたが、べつに悲しみもせず笑ふばかりであつた。

嬰寧は何につけても笑ふばかりであるから、何人もその本性を見きはめることはできなかつた。母親は夜、嬰寧と同じ室に寝てみた。嬰寧は朝早く起きて朝のあいさつをした。裁縫をさしてみると手がうまかつた。ただ善く笑ふだけは止めても止まらなかつた。しかし、その笑ひはにこにこしてゐて、狂人のやうに笑つても愛嬌をそこなはなかつた。それで人が皆楽しく思つて、隣の女や若いお嫁さん達が争うて迎へた。

母親は吉日を擇んで王と嬰寧を結婚させることにしたが、しかし、どうも人間でないと云ふ恐れがある。ある日、嬰寧が陽の中に立つてあるところを窺つてみた。影がはつきりと地に映つてゐてすこしも怪しいことはなかつた。そこで母親はその日が來ると華かな衣裳を著せて儀式の席へ出したが、嬰寧がまた笑ひだして顔をあげる事ができないので、儀式はたうとうできずに終つた。王は嬰寧が馬鹿なために二人の間の祕密を漏らしはしないかと恐れたが、それは決して漏らさなかつた。

母親が心配したり腹を立てたりする時に、嬰寧が傍へ往つて一度笑ふと、それでなほつてしまつた。婢や奴が過をしでかして、主婦に折檻せられるやうな時には、嬰寧の所へ來て、一緒に往つて話してくれと頼むので、一緒に往つてやると何時も免された。

嬰寧は花を愛するのが癖になつてゐた。そつと金の釵を質に入れて、その金で親類の家をかたつ

ぱしから探して、佳い花の種を買つて植ゑたが、數月の中に、家の入口、踏石、垣根、便所にかけて花でない所はなくなつた。庭の後に木香の木の棚があつた。それは元から西隣の家との境にあつた。嬰寧は何時もその棚の上に攀ぢ登つて、薔薇の花のやうなその花を摘んで頭髮にさした。母親は時どきそれを見つけて叱つたが、嬰寧はつひに改めなかつた。

ある日、西隣の男がこれを見つけて、ちつと見とれたが、嬰寧は逃げもせず男の方を見て笑つた。西隣の男は女が自分に氣があると思つたので、心がますますとろけた。と、女は牆の下に指をさして笑つてからおりて往つた。西隣の男は女が晩に此處へ來いと云つたと思つたので、大悦びで日の暮れるのを待ち兼て牆の下へ往つた。往つてみると果して女が來てゐた。西隣の男はすぐ抱きかかへたと體の一部が錐で刺れたやうに痛さが體中にしみわたつたので、大聲に叫ぶなり踏れてしまつた。その男の女と思つたのは一本の枯木であつた。その男の父親は悴の叫び聲を聞きつけて走つて來て、

「おい、どうした、どうした、」

と云つたが悴は呻くのみで何も云はなかつた。そこへ細君が來たので悴は事實を話した。そこで火を點けて枯木の穴を照らしてみた。そこには小さな蟹のやうなさそりがあつた。父親は木を碎いてさそりを殺し、悴をおぶつたが、夜半頃になつて悴は死んでしまつた。

西隣では王を訟へて、嬰寧が怪しいことをすると云つた。村役人はかねてから王の才能を尊敬して、篤行の士と云ふことを知つてゐたので、西隣の父親の云ふことは誣ひ言だと云つて、杖で打たさ

うした。王は西隣の父親のためにあやまつてやつたので、西隣の父親は釋してもらつて歸つて來た。  
王の母親は嬰甯に云つた。

「馬鹿なことをするから、こんなことになるのだよ、もう笑ふことはよして、悲しいことも知るがいよ、村役人は幸にわかつた方だから、よかつたものの、これがわからない役人だつたら、屹とお前を役所で調べたのだよ、もしこんなことがあつたら、あれが親類、顔向けができますか、」

嬰甯は顔色を正しく云つた。

「もうこれからは、決して笑ひません、」

母親は云つた。

「人は笑はないものはないから、笑つてもいいが、ただ時と場合を考へなくちや、」

嬰甯はこれからはまたと笑はなかつた。昔の知人に逢つてもつひに笑はなかつた。しかし、終日淋しさうな顔はしなかつた。

ある夜、嬰甯は王とある時に、涙を流した。王は不思議に思つて訊いた。

「どうした、」

すると嬰甯はむせび泣きをして云つた。

「これまでは日が浅いから、こんなことを云つたら、怪しまれるだらうと思つて黙つてゐましたが、今ではお母さんもあなたも、皆さんが私を可愛がつてくださつて、へだてをしてくださらないから有

りのままに申しますが、私はもと狐から生まれたものです、母が他へ行くことになつて、私を殺なつてゐるお母さんに頼んだものですから、私は十年あまりもお母さんの世話になつて、今日のやうなことになりました、私には他に兄弟もありませんし、恃みにするのはあなたばかりです、今、お母さんは寂しい山かげにゐるのですが、何人もお父さんの傍へ葬つてくれないものですから、お母さんはあの世で悲しんでゐるのです、あなたがもし、費用をおかまひなさないなら、あの世の人の悲しみをなくしてやつてください、私をお世話してくだされるから、すてておくこともできないと思つて、」

王はうなづいた。

「いいとも、だが何所にあるだらう、」

嬰甯は云つた。

「すぐ判ります、」

目を期して二人は櫛を持つて出かけて往つた。嬰甯はいばらの生ひ茂つた荒れはてた中を指さした。掘つてみると果して老婆の戸があつた。皮膚も肉體もそのままであつた。嬰甯はその戸を撫でて泣いた。

そこで二人はその戸を櫛に入れて歸り、秦氏の墓を尋ねて合葬した。その夜、王の夢に老婆が來て禮を云つて歸つた。王は寤めてそれを嬰甯に話した。嬰甯は云つた。

「私は、ゆうべ逢つたのですよ、あなたをびつくりさしてはいけないと云ふものですから、」  
王は云つた。

「なぜ留めておかなかつたのだ、」  
嬰寧は云つた。

「あの人はあの世の人ですから、生きた人の多い、陽氣の勝つた所にはゐられないのです、」  
そこで王は訊いた。

「小榮はどうしたのだらう、」  
嬰寧が云つた。

「あれは狐ですよ、あれは氣が利いてたから、母が私の世話をさしたものです、しよつちう木の實を取つて来てくれました、だから私は有難いと思つてるのですが、母に訊きますと、もうお嫁に往つたのですつて、」

その歳から冬至から百五日目にあたる寒食の日には、夫婦で秦氏の墓へ往つて掃除するのを缺かさなかつた。女は翌年になつて一人の子を生んだが、抱かれてゐるうちから知らない人を畏れなかつた。そして、人さへ見れば笑つて亦大いに母のふうがあつた。

## 酒友

車と云ふ男は、貧乏でありながら酒ばかり飲んでゐた。そして、夜よる三ばい位の罰杯を飲まさな  
いと寝ることができないと云ふほどであつた。だから枕もとには、平生も酒を置いてないことがなかつた。

ある夜眼が醒めて寝がへりをしてみると、人と一緒に寝てゐるやうな氣がしたが、しかし、これは蒲團がはげて落ちたからであらうと思つて、手をやつて摸でてみると、毛がもじやもじやと觸つた。それは人でなしに猫の大きなやうなものであつた。火を點けてみると狐であつたが、ひどく酔はらつたと見えてぐうぐうと眠つてゐた。をかしいと思つて枕もとの瓶の酒を見ると空になつてゐた。車は笑つて、

「こいつは俺の酒友だな、」

と云つたが、びつくりさすに忍びないから、蒲團をかけてやつて、自分も一緒に寝たが、狐がどうするか見たいので、燭を消さずに見てゐた。と、狐は夜半比に起きてあくびをした。車は笑つて、

「よく寝たなあ、」

と云つて、蒲團を捲つて見ると儒者の冠を著けた秀才になつてゐた。彼は起きて寢臺の前へ往つ

てお辭儀をして、自分を殺さなかつた恩を謝した。車は、「僕は酒飲みだから、人から馬鹿だと云はれるが、君は僕のためには鮑叔だよ、もし、僕を疑はないなら、飲み友達とならうぢやないか、」

と云つて、袖を曳いて寢臺の上にあがらして、復た一緒に寝た。そして云つた。

「これから君は毎晩來たまへよ、疑はないでさ、」

狐は承知した。そして一睡りして起きてみると狐はもうゐなかつた。そこで旨い酒を瓶に一ぱい入れて狐の來るのを待つてゐた。

夜になつて果して狐が來た。車は狐を傍へ坐らして、面白く飲んだが、狐は酒量が強いうへに、よく冗談を云つた。車はその狐と早く知りあひにならなかつたことを恨むほどであつた。ある時狐が云つた。

「何時も良い酒の御馳走になるばかりだが、何をして君の厚意に報いたものだらう、」  
車は云つた。

「そんなことはどうでもいいぢやないか、」

狐が云つた。

「だが、君は貧乏人だから、酒を買ふ錢に困るだらう、ひとつ君のために酒代を心配しよう、」  
翌晩狐はまたやつて來た。

「これから東南に七里往くと、道ばたに落ちてゐる金が有る、早く往つて拾つて來るがいいだらう、」  
車はその言葉に従つて翌朝早く往つた。果して二圓の金が落ちてゐた。で、それを拾つて佳い肴を買つてその晩の酒をたすけた。

狐は又云つた。

「この家の後に窖藏があるから、それを開けて見たまへ、」

車は狐の言葉の通りに探してみた。果して窖藏があつて錢がたくさん入つてゐた。車は大に喜んで云つた。

「囊中已に自ら有り、漫に沽ふを愁ふるなかれかね、」

狐は云つた。

「さうぢやないよ、車の轍の痕にたまつてる水は、さうたくさんはないからね、もすこしいいことを考へよう、」

その次に逢つた時、狐は車に云つた。

「市場では錦葵の値がひどく安い、これこそめつけものだよ、」

そこで車は錦葵を四十石あまり買った。人々は皆それを笑つたが、間もなく大旱がして、穀物がそつくり枯れてしまひ、ただ錦葵だけは植ゑることができた。そこで車は錦葵の種を賣つて十倍の利益を得、金もだんだんにできて、肥えた田を二百畝も作るやうになつた。それから多く麥を種ゑると麥

が多く穫れ、多く黍を種ゑると黍が多く穫れた。一切の種植の早い遅いは皆狐の判断に従つた。車と狐は日に日に親密になつた。狐は車の細君を嫂と云ひ、子供は自分の子のやうにして可愛がつた。後、車が亡くなると狐もたうとう來なくなつた。

## 蓮香

桑生は沂州の生れであつた。名は曉、字は子明。少い時に両親に死別れて紅花埠と云ふ所に下宿した。その桑は生れつき静なやはらぎのある生活を喜ぶ男で、東隣の家へ往つて食事をする他は、自分の座にきちんと坐つてゐた。ある日、東隣にゐる男が來て冗談に云つた。

「君は獨りゐるが、鬼や狐はこはくはないのかい、」

桑は云つた。

「男子が鬼や狐をこはがつてどうする、もし來れば僕には劍があるさ、それも女なら門を開けて納れてやるがね、」

隣の男は歸つて往つたが、その夜友達と相談して妓を伴れて往つて、垣に梯をかけて門の中に入れて扉をことごとく叩かした。桑はちよつと窺いて、

「どなた、」

と云つて訊いた。妓は、

「私は迷つて出て來たものでごさいます、」

と云つた。桑はひどく懼れて齒の根もあはずにわなわたと顫へた。妓もそれを見てあとしざりし

て歸つて往つた。隣の男は翌朝早く桑の齋へ往つた。

「ゆうべはたいへんなことがあつたよ、」

と云つて、この世の女でない女の來たことを話して、

「僕はもう歸らうと思つてるのだ、」

と云つた。隣の男は手をうつて云つた。

「なぜ門を開けて納れなかつたのかい、女なら納れるはずだつちやないか、」

桑はそこで友達の悪戯であつたといふことを悟つた、で、安心して歸ることをよした。

半年してのことであつた。ある夜、室の扉を叩くものがあつた。

「もし、もし、」

それは女の聲であつた。桑は復た友人の悪戯だらうと思つたので扉を開けて入れた。それは綺麗な若い女であつた。桑は驚いて訊いた。

「君は何人だね、」

「私、蓮香と申しますの、この西の方にある妓なのです、」

その紅花埒には青樓が多かつたので、桑は女の言葉を疑はなかつた。そこで燭を消して二人で話した。

女はそれから三日目か四日目にはきつと來くやうになつた。ある夜、桑が獨り坐つて女のことを思つてあるとひらひらと入つて來た女があつた。桑は蓮香が來たと思つたので起つて往つて迎へた。

「よく來てくれたね、」

と云ひながらその顔を見た。それは蓮香と違つた女であつた。年も僅に十五六に見える、袖の長い、髪をおさげにした、たをやかな少女であつた。桑はひどく驚いて狐ではないかと思つた。女は云つた。

「私、李と云ふ家の女ですの、あなたの高雅な人格をお慕ひしてをります、どうか忘れないでね、」

桑は喜んでその手を握つたが、手は氷のやうに冷たかつた。桑は訊いた。

「なぜ、こんなに冷たいのです、」

「小さいこんな體で、寒い所を來たのですもの、」

そして女はまた云つた。

「私は年がゆかないのに、體が弱いのです、それに急にお父さんとお母さんを亡くして、世話をしてくれる方がありませんの、あなたのところへおいてくださらないこと、あなたは奥さんがおありになつて、」

桑は云つた。

「べつにそんな者はないが、ただ隣の妓が來るが、何時もは來ない、」  
女は云つた。

「そのかたがいらしたら、私が歸りますわ、私、そんな人達とは違つてますから、あなたさへ黙つていらつしやるなら、その方がいらしたら私が歸り、その方が歸つたら、私が來ますわ、」  
雞が鳴いて女は歸つて往つた。歸る時繻のある履を一つくれて云つた。

「これは私の足に著けてゐたものよ、これをいぢつて私のことを思つてくださると、私が何時でもまありますわ、でも人のある所ではいぢらないやうにね、」

桑はもろつてそれを見た。結び目を解く錐のやうな爪先のそつたものであつた。桑は心でひどく悦んだ。翌晩になつて蓮香も來ないので、桑は彼の履を出して女のことを思ひながら弄つた。すると李は飄然とやつて來た。二人はまた仲好く話しこんだ。

それを初めとして履を出して思ふたびに李がやつて來た。桑はふしぎに思つて訊いた。  
「どうして解るのだね、僕が履を出すことが、」

李は笑つて云つた。  
「それや、私が來ようと思つてる時に、ちやうどあなたが履を出すのでしょ、」  
ある夜蓮香が來て驚いて云つた。

「あなたは、なぜこんなに弱つていらつしやるのです、顔色も悪いぢやありませんか、」  
桑は云つた。

蓮香はそこで挨拶して歸つて往つた。歸る時十日目に逢はうと云ふ約束をした。蓮香の歸つた後で李がまた來た。李の來るのは毎晩で來ない晩はなかつた。ある夜李が云つた。

「あなたの好い人は、この比、ちつともお顔を見せないぢやないの、」  
桑はそこで、

「十日目に來ると云ふ約束をしてあるのだよ、」  
と云つた。すると李が笑つて云つた。

「あなたは、私と蓮香さんと、どつちが佳い女だと思ひますの、」  
「それは、どつちも佳い女だよ、ただ蓮香の方は、肌が温だかね、」

と桑が云つた。李は顔色を變へて、「あなたは、どつちも佳い女だとおつしやるのですが、それは私に云ふからでしょ、蓮香さんは月宮殿の仙女だわ、私なんか、どうしてよりつけるものですか、」  
と云つて浮かない顔をした。そして指をわづつて計へた。それは蓮香の來る約束の日を計へるところであつた。約束の十日はもう來てゐた。李は云つた。

「明日の晩、私、そつと蓮香さんを窺いてみるわ、知らさないでちやうだいね、」  
翌晩になつて蓮香が果して來た。二人は室に入つて面白さうに話してゐた。そして枕についた時に

蓮香はひどく駭いて云つた。

「まあ、十日みないうちに、こんなにお體が悪くなつたのですか、あなたはほかに好い方があるので



しよ。」

桑は云つた。

「どうしてそれが解る、」

「私が神氣でためしてみると、脈搏が亂れてゐるのです、これは憑きものがしてるのですよ、」  
翌晩になつて李が來た。桑は云つた。

「ゆうべ蓮香を窺いたの、どうだつたね、」

李は云つた。

「綺麗な方だわ、だけど、どうも人間にこんな綺麗な方はないと思つたら、やつぱり狐ですよ、私は蓮香さんが歸る時、後からつけて往くと、南の山の穴へ入つたのですもの、」

桑はそれは李のやきもちだらうと思つたので、いかげんにあしらつてゐた。その翌晩になつて蓮香が來た。桑は冗談に云つた。

「僕はほんたうとは思はないが、ある人が君を狐だと云ふのだよ、」

「何人です、何人がそんなことを云つたのです、」

と蓮香はせきこんで訊いた。桑は笑つた。

「僕の冗談だよ、」

蓮香は云つた。

「狐だつて、どこに人とちがふところがあります、」

「狐は人を惑はすぢやないか、狐に憑かれて病氣がひどけれや、死ぬるぢやないか、こはいよ、」  
蓮香が云つた。

「さうぢやありませんよ、あなたの年恰好なら、三日目には精力が回復しますから、たとひ狐であつても害はありません、世の中には癆瘵の病氣で歿くなる人が多いのです、狐の害ばかりで死ぬるものですか、これはきつと、私のことを護つたものがあるのですよ、」

桑は力めて云つた。

「そんなものはないよ、」

「ないことはありません、云つてください、さあ云つてください、」

蓮香がツツかかつて來るので、桑もしかたなしに云つた。

「實は一人來る者があるがね、」

蓮香は云つた。

「さうでせうとも、私はとうからあなたの弱つていらつしやるのを不思議に思つてました、そんなに遠に體が悪くなつたのは、どうしたと云ふのでせう、どうも人ぢやないでせう、あなたは黙つてくださいね、明日の晩にその人が私を窺いたやうに、私が窺いてやりますから、」

その晩になつて李が來て、桑に二語三語話しかけたところで、窓の外でせきばらひの音がした。す

ると李は急に逃げて往つた。そこへ蓮香が入つて来て云つた。

「あなた、大變ですよ、やつぱり人間ぢやありません、疑はずに早く關係を絶つ方がよござんす、あなたは冥土が近いのです、」

桑は蓮香のやきもちだと思つたので、黙つて何も云はなかつた。蓮香は起つて云つた。

「私はあなたが、あの女の情にひかされてゐるのを知つてゐますが、それでもあなたを殺すことにはできませんから、明日、薬を持つて来て、病氣を癒してあげます、まだそれほど病氣がひどくないから十日すれば癒ります、私はあなたと一緒にゐて、あなたの癒るのを待ちます、」

翌晩蓮香は薬を持つて来て桑に飲ましました。間もなく桑は腹の中がさつぱりして精神が爽になつた。桑は心の中で蓮香に感謝したが、しかし鬼病とは思はなかつた。蓮香はその夜から桑の寢臺につきつきりにゐた。

数日の後に桑の體も肥えて來た。そして、桑の體がもとのやうになると蓮香は歸つて往つたが、別れる時にだめをおした。

「よござんすか、きつと關係を絶つのですよ、」

桑は關係を絶つ氣はなかつたが、めんだうだから、

「いいとも、きつと絶つよ、」

と云つた。そして、蓮香を送り出して扉を開め、燈をかきたて、彼の履を出して弄りながら李の、  
とを思つた。と、李が忽ち來たが數日隔つてゐたのでひどく怨んでゐるやうであつた。桑は云つた。  
「蓮香が僕の病氣を癒してくれたから、逢はれなかつた、まあ、そんなにおこらないがい、皆僕の  
心の中にあることなのだから、」

そこで李の感情がやはらいで來た。桑は李の耳に囁いた。

「僕は、君を愛してゐるのだが、君を人間ぢやないと云ふものがあるがね、」

李は黙つてしまつた。そして、暫くして怒りだした。

「きつと、あの狐が云つたのだわ、もし、あなたが、それと關係を絶たないなら、私、もう來ないわ、」

たうとう李はなきじやくりはじめた。桑は困つて、いろいろと言つてなだめたので、やつとをさまつた。

その翌晩蓮香が來たが、李の復た來たことを知つて怒つた。

「あなたはそんなに死にたいのですか、」

桑は笑つて云つた。

「君はあんまりやきすぎるよ、」

蓮香はますます怒つた。

「あなたが死病の根を植ゑつけてたのを、私がやつと除つたぢやありませんか、やかないあの人は、」

あなたをどうしようと云ふのです、

桑はそこで女の言葉をはぐらかさうと思つて、冗談を云つた。

「あれが云つたが、この間の病氣は狐の祟だつたつてね、」

「さうですか、」

と蓮香はためいきをして、

「ほんきであなたがさうおつしやるなら、あなたの迷ひはさめてあませんから、あなたにもしもの事があつた時、私はなんと云つても云ひわけのしやうがありませんから、私はこれから歸ります、百日の後にあなたを寢臺の中にお訪ねします、」

桑は留めようとしたがきかずに怒つて歸つて往つた。それから李が毎晩のやうに来るやうになつた。約二箇月ばかりすると桑は自分の體のひどくつかれたことを感じた。しかし、初めはたいしたことあるまいと思つてゐたが、日ましに瘠せて弱つて來て、粥を一ぱい位しかたべられないやうになつた。自分の家へ歸つて靜養しようかと思つたが、李にみれんがあつて思ひきつて歸ることもできなかった。ぐづぐづしてゐるうちに數日経つたので、病氣が重くなつて起きることができなくなつた。隣の男は桑が病氣で起きられないやうになつたのを見ると、日々給仕に云ひつけて食物を送つて來させた。その時になつて桑は始めて李を疑ひだした。そこで李に云つた。

「僕は蓮香の言葉を聞かなかつたから、こんなになつた、」

さう云つたまま桑は息を絶やしたが、暫くして生きかへつて四邊を見た。李はもう往つてしまつてゐなかつた。それから李は來ないやうになつた。桑は何人もあない齋に寢て百日の後に訪ねて來ると云つた蓮香のことを思つてゐた。それは農夫が穀物のできるのを待つのと同じやうに。

ある日、同じやうに蓮香のことを思ひつめてゐると、不意に簾をあけて入つて來た者があつた。それは蓮香であつた。桑の寢臺の傍へ來て晒つて云つた。

「あなか者、私の云つたことがうそなの、」

桑は泣いて何も云へなかつたが、やつと云つた。

「僕が悪かつた、あやまる、どうか助けてくれ、」

蓮香は云つた。

「病が骨に入つては、どうすることもできないのです、私はちよつとあがりましたが、もうこれでお別れします、私はこれでやきもちでなかつたことが解ればいいのです、」

桑はひどく悲しんで云つた。

「これと云ふのも、この枕の下の物がいけけないのだ、僕に代つてこはしてくれ、」

蓮香が手をやつてみると彼の繡のある李の履があつた。蓮香はそれを燈の前へ持つて往つて、あつちこつちとかへして見た。と、李が急に入つて來たが、蓮香を見るとそりかへつて逃げようとした。蓮香は走つて往つて出口に立ちふさがつた。李は立ちすくんでしまつた。桑は李を責めた。

あなたをどうしようと思ふのです。」

桑はそこで女の言葉をはぐらかさうと思つて、冗談を云つた。

「あれが云つたが、この間の病氣は狐の祟だつたつてね。」

「さうですか。」

と蓮香はためいきをして、

「ほんきであなたがさうおつしやるなら、あなたの迷ひはさめてあませんから、あなたにもしもの事があつた時、私はなんと云つても云ひわけのしやうがありませんから、私はこれから歸ります、百日の後にあなたを寢臺の中にお訪ねします。」

桑は留めようとしたがきかずに怒つて歸つて往つた。それから李が毎晩のやうに来るやうになつた。約二箇月ばかりすると桑は自分の體のひどくつかれたことを感じた。しかし、初めはたいしたことあるまいと思つてゐたが、日ましに瘠せて弱つて来て、粥を一ぱい位しかたべられないやうになつた。自分の家へ歸つて靜養しようかと思つたが、李にみれんがあつて思ひきつて歸ることもできなかった。ぐづぐづしてゐるうちに數日経つたので、病氣が重くなつて起きることができなくなつた。

隣の男は桑が病氣で起きられないやうになつたのを見ると、日々給仕に云ひつけて食物を送つて來させた。その時になつて桑は始めて李を疑ひだした。そこで李に云つた。

「僕は蓮香の言葉を聞かなかつたから、こんなになつた。」

さう云つたまま桑は息を絶やしたが、暫くして生きかへつて四邊を見た。李はもう往つてしまつてゐなかつた。それから李は來ないやうになつた。桑は何人もゐない齋に寢て百日の後に訪ねて來ると云つた蓮香のことを思つてゐた。それは農夫が穀物のできるのを待つのと同じやうに。

ある日、同じやうに蓮香のことを思ひつめてゐると、不意に簾をあけて入つて來た者があつた。それは蓮香であつた。桑の寢臺の傍へ來て晒つて云つた。

「あなか者、私の云つたことがうそなの。」

桑は泣いて何も云へなかつたが、やつと云つた。

「僕が悪かつた、あやまる、どうか助けてくれ。」

蓮香は云つた。

「病が骨に入つては、どうすることもできないのです、私はちよつとあがりましたが、もうこれでお別れします、私はこれでやきもちでなかつたことが解ればいいのです。」

桑はひどく悲しんで云つた。

「これと云ふのも、この枕の下の物がいけないのだ、僕に代つてこはしてくれ。」

蓮香が手をやつてみると彼の繡のある李の履があつた。蓮香はそれを燈の前へ持つて往つて、あつちこつちとかへして見た。と、李が急に入つて來たが、蓮香を見るとそりかへつて逃げようとした。

蓮香は走つて往つて出口に立ちふさがつた。李は立ちすくんでしまつた。桑は李を責めた。

「俺をたぶらかしやがつて、なんだ、きさまは、云へ、云つちまへ、」  
李は答へることができなかつた。蓮香は笑つて云つた。

「私は、今、あなたと初めて顔をあはせるのですが、いつかの桑さんの病氣は、私のせゐだと云つたさうですが、このさまはどうしたのです、」

李は頭をさげてあやまつた。

「私が悪うございました、」

蓮香は云つた。

「こんな美しい方が、愛を仇にしてかへすとはどうしたものです、」

李は體を投げだして泣いた。

「悪うございました、どうか許して下さい、」

蓮香はそれを扶け起して精しくその素性を訊いた。李は云つた。

「私は、李通判の女で、早く亡くなつて、此所の牆の外に埋められてゐるものです、私は死んでをりますけれども、情熱がまだ消えずにをりますから、若い方と交はりたいのが私の願ひです、この方を殺さうとするのは、私の本心ではありません、」

蓮香は云つた。

「あの世の人が、人の死ぬるのをいいことにしてゐるのは、死後に一緒になりたいからだといふので

すが、ほんたう、」

李は云つた。

「そんなことはないのです、あの世の人ばかりが逢つたところで、なんにも楽しみはないのです、あの世の人でよければ、若い方は幾等でもあります、」

蓮香は云つた。

「馬鹿ですわ、ね、え、毎日人を愛するのは、人間でさへも堪へられないのに、ましてあの世の人がね、え、」

桑が訊いた。

「狐は能く人を殺すのですが、何のためにさうするのです、」

李は云つた。

「人の精氣を探つて自分の精氣をおぎなふものがさうするのです、私達はその類ぢやないのです。だから人を害しない狐も有れば、人の害をしない鬼と云ふものもないのです、これは陰氣が盛なからですよ、」

桑はこの言葉を聞いて狐も鬼も皆あることを知つたが、二人とは慣れてゐるのでそれほど驚きはしなかつた。ただ息が絲のやうになつてつまりさうになつて來たので、覺えず叫ばうとしたが聲が出ずに身をもがいた。蓮香は李をみかへつて訊いた。

「どうして手あてをしたものでせう。」

李は顔を赧くしてへりくだつて云つた。

「すみません。」

蓮香は笑つた。

「なに、まだ體は強いのですから、まだやいてもいいですよ。」

李は襟を直して云つた。

「もし、何處かに名醫がありますなら、私がきつと癒してもらひます、それができれば、私は地の下に歸ります、もうこの世で恥をさらしません。」

蓮香は囊を解いて薬を出して云つた。

「私はとうから今日あることを知つてましたから、三山へ往つて薬を探つて、三箇月してやつと調ひました、どんな病氣でも癒らないものはありません、でもこの病氣の原因は、あなたですから、この薬を飲ますには、あなたの體の物を用ひなくてはいけないのです、願へませうか。」

李は訊いた。

「どんなことでせう。」

蓮香は云つた。

「あなたの睡ですよ、私が丸薬を出しますから、それを口に入れて睡をつけてください。」

李はぼつと頬を赧くして俯向いた。その拍子に彼の履を見た。蓮香は云つた。

「あなたの思ふとほりにできたのは、この履ですね。」

李はますます慚ぢて、其所にあるのに堪へられないやうであつた。蓮香はそこで丸薬を桑の口に納れ、それから李の前に出した。李はしかたなしに嘗めた。蓮香は云つた。

「もう一度願ひます。」

李は又それを嘗めた。さうして三四回も睡をつけた後にはじめて桑の口の中へ入れた。暫くすると桑の腹の中で雷の鳴るやうな音がおこつた。蓮香は復た次の丸薬を出したが、それは自分が嘗めてから桑の口に納れた。桑は腹の中が火のやうに熱して精神のいきいきとして來るのを覺えた。蓮香は云つた。

「これで癒つた。」

李は雞の鳴くの聽いて傍徨として歸つて往つた。蓮香は桑の病後の體を養ふには物を食べさせないやうにしなくてはいけないので、桑が故郷へ歸つたやうに見せかけて、桑の友達を來させないやうにしなから、夜も晝も桑の傍にゐて看護した。李も毎晩來て手助をしながら蓮香に姉のやうに事へた。蓮香も亦李をいたはつてやつた。

桑は三箇月してもとのとほりの體になつた。李は三四日おきにしか來ないやうになつた。たまに來ることがあつてもちよつと桑を見ただけで歸つて往つた。一緒にゐてもさえない顔をしてゐた。蓮香

は何時も留めて一緒に寝ようとしたが肯かなかつた。ある時桑は李の歸らうとするのを追つて往つて抱きかかへて歸つて來たが、それは葬式の時に用ひる茅で作つた人形のやうに輕かつた。李は逃げる事ができないので、たうとう著物を著たままに寝たが、その體をかがめると二尺にもたりなかつた。蓮香はますます憐んだ。そして桑が眼を覺ました時には李はもうゐなかつた。後、十日あまりになつたが李は再び來なかつた。桑は李に逢ひたいが來ないので、何時も履を出して弄つた。蓮香は云つた。

「ほんとに綺麗な方ですわ、女の私が見てさへ可愛いのですもの、男の方は、ね、え、」

桑は、

「せんには履を弄るとすぐ來たから、疑ふことは疑つてゐたものの、鬼と言ふことは思はなかつたよ、今、履を見てその容を思ふことは、ほんとに堪へられないね、」

と云つて涙を流した。

その時紅花埠に章と云ふ富豪があつた。十五になる燕兒と云ふ字の女があつて、結婚もせずになくなつたが、一晩して生きかへり、起きて四邊を見た後に奔り出ようとした。女の父親があわてて扉を閉めて出さなかつた。女は云つた。

「私は通判の女の魂ですよ、桑さんに愛せられてゐるのです、だからあすこに私の履が遺してあります、私はほんたうに鬼ですよ、私をたてこめて何の益にもなりません、」

女の父親はその言葉によりどころがあるやうに思つたので、其所へ來た理由を訊いた。女は彼方を見此方を見して、ぼんやりとなつて自分でも解らないやうになつた。その席にゐた一人が、

「桑生は病氣で國へ歸つたと云ふぢやないか、そんなことはないだらう、」

と云つた。女は、

「たしかに居ります、歸つたと云ふのは嘘です、」

と云つて聞かなかつた。章の家ではひどく疑つてゐた。東隣の男がそれを聞いて、垣を踰えてそつと往つて窺いた。桑と美人とが向きあつて話してゐた。東隣の男はいきなり入つて往つた。女はひどくあわててゐたが、そのまに見えなくなつてしまつた。東隣の男は云つた。

「君は歸つてゐるはずぢやないか、どうしたのだ、」

桑は笑つて云つた。

「何時か君に云つたぢやないか、女なら納れるつてね、」

東隣の男は燕兒の云つたことを話した。桑は燕兒の家へ往つて探らうとしたが口實がないので困つた。燕兒の母親は、桑生の未だ歸つてゐないことを聞いて、ますます不思議に思つて、傭媪に履があるかないかを探らしによこした。桑生は履を出して與へた。

燕兒は履が來ると喜んだ。そしてその履を穿かうとしたが一寸ばかりも小さくつて履けなかつた。そこでひどく駭いて鏡を取つて顔を映したが、忽ちうつとりとなつて云つた。

「お母さん、私の體には何人か他の人があるのですよ。」

母親は始めてその怪異を悟つた。女はまた鏡を見てひどく泣いて云つた。

「あの時には、私も容色に自信があつたのだ、それでも蓮香姉さんを見ると恥かしかつたが、今、かへつてこんな顔になつたのだ。」

傍にある人は李の鬼であると言ふことが解らなかつた。女は履を取つて泣き叫んで、なだめてもやめなかつた。そして、蒲團にくるまつて寝て、食物を持つて往つても喰はなかつた。體は一めん腫れて、七日位の間は何も食はなかつたが死ななかつた。そして腫れがやつとひいて、ひもじくてたまらなくなつたので、そこで食事をした。

二三日して體一めんが癢くなつて皮が盡く脱けた。そして朝早く起きて、病中にはいてゐた履の落ちてゐるのを拾つて履いたが、大きくて足に合はなかつた。そこで桑の所からもらつて来た彼の履を著けてみるとしつくりと合つた。燕兒は喜んで復た鏡を執つて見た。それは眉も目も頬も宛然たる李であつた。燕兒はますます喜んで湯あみをし頭髮を結つて母を見た。見る者がその顔をぢつと見詰めて驚いた。

蓮香は燕兒の不思議を聞いて、桑に勧めて媒をたのんで結婚させようとしたが、桑は貧富の懸隔が甚しいのですぐ蓮香の言葉に従ふことができなかった。ちやうどその時、燕兒の母の誕生日になつた。桑はその小供の婿の往くに從いて往つてお祝ひをした。母親は來客の中に桑の名あるのを見て

ためしに燕兒に云ひつけて簾の間から窺いてゐて桑を見わけさせた。

桑は最後に往つた。燕兒は驟に走り出て桑の袂をつかまへて一緒に歸らうと云ひだした。母親が叱つたので始めてはぢて入つて往つた。桑はその女をつくづく見るに宛然たる李であつたから覺えず涙を流した。そこで母親の前に這ひつくばつてしまつた。母親は桑を扶け起して侮らなかつた。

母親は自分の兄弟に媒を頼んで、吉日を選んで桑を入婚にしようとした。桑は家へ歸つて蓮香に知らして燕兒と結婚することに就いて相談した。蓮香はかなしさうな顔をして聞いてゐたが、やや暫くして別れて歸ると云ひだした。桑は駭いて理由を訊いた。桑は涙を流してゐた。蓮香は云つた。

「あなたが入婚になつて、人の家へ往つて婚禮するのに、私はどうして從いて往けませう。」  
そこで桑は故郷へ歸つて燕兒を迎へることにしたので蓮香も承知した。桑はそこで章へ往つてその事情を話した。章の家では桑に細君のあるのを聞いて、怒つて燕兒をせめたが、燕兒が力めてとりなしたので桑の願のやうになつた。

その日になつて桑は自分で燕兒を迎へに往つた。時日がすくなかつたので家の中の設備ができてゐなかつたが、新婦を伴つて歸つてみると、門から座敷に到るまで一めん毛氈を敷きつめて、たくさんの籠燭を點け、燦然として錦を張つたやうになつてゐた。蓮香は新婦を扶けて式場に入つた。その花嫁の顔にかける搭面をかけた容までが李そつくりであつた。

蓮香は合香の禮をあげる席に一緒にゐて、燕兒の李に、還魂の不思議なことを訊いた。燕兒は云



つた。

「あの日、くさくさしてゐられないうへに、私の身分が違つてゐるので、自分で體の穢が厭でたまらず、腹が立つて墓にも歸らないで、風のまにまに往つてゐるうちにも、生きた人が羨やましくつて仕方なかつたのです、そして晝は草木によつかかり、夜は足にまかせて、浮き沈みしてゐて、ふと章の家へ往つて、少女が寢臺の上に寢てゐるのについたのです。」

蓮香は黙黙としてそれを聞きながら心に思ふことがあるやうなふうであつた。それから二箇月して蓮香は一人の子供を生んだが、産後暴に病氣になつて、日に日に重くなつて往つた。蓮香は燕兒の手を取つて云つた。

「子供を頼みますよ、私の子はあなたの子だから、」

燕兒は泣いた。姑がなぐさめて醫師を呼ばうとしたが蓮香は聞かなかつた。蓮香の病氣はますます重くなつて、息ももうかすかになつた。桑と燕兒は聲をあげて泣いた。すると蓮香が目を見張つて云つた。

「泣かないでください、あなた達は生きるのが楽しみだが、私は死ぬるのが楽しみですよ、もし縁があるなら、十年の後に復たお目にかかりますよ、」

蓮香はさう云つてから死んでしまつた。蒲團を開いて死骸を收めようとする狐になつた。桑は不思議な物として見るに忍びないので手厚く葬つた。桑は蓮香の生んだ子の名を狐兒とつけた。燕兒は

自分の子のやうにして愛し、清明の節には必ずそれを抱いて蓮香の墓へ往つた。

後十年、桑が郷試に及第して舉人となつたので、家も漸く裕になつた。狐兒は頗る慧であつたが、どうも體が弱くてよく病氣に罹つた。燕兒はそれが育たなくなつては大變だと思つたので、何時も桑に妾を置けと云つてゐた。

ある日、婢が来て一人の老婆が女の子を伴れ来て賣りたいと云つてゐると知らした。燕兒が呼び入れさせた。そして燕兒は女の子を見るなりひどく驚いたやうに云つた。

「蓮香姉さんが、復たいらしたわ、」

桑も出て往つて見た。それは蓮香にそっくりの女であつた。桑も駭いた。桑は訊いた。

「年は幾何だね、」

「十四でございます、はい、旦那様、」

「金は幾何だ、」

「この年寄の一人しかない子供でございますが、好いお家で御厄介になつて、私が御飯が食べる所ができて、後日のたれ死をしないやうでございますなら、結構でございます、」

桑は金を多く取らして女を家に置いた。燕兒は女の子の手を握つて密室へ入つて往つて、その襟に手をかけて笑つた。

「おまへは、私を知らないの、」

女は云つた。

「知りません。」

「苗字は何と云ふの、」

「草と云ひます、父は徐城で醬油を賣つてをりました、歿なつて三年になります、」

燕兒は指を折つて考へた。蓮香が歿なつてちやうど十四年になつてゐる。又つくづくと女を見る

と容貌から態度まで蓮香とそつりであつた。そこでその首筋を打つて云つた。

「蓮香姉さん、蓮香姉さん、十年して逢ふと云つた約束は嘘ではなかつたのですね、」

女は忽ち夢が醒めたやうになつて胸がひらけた。

「あ、」

そこで燕兒をつくづく見た。桑は笑つて、

「これ曾て相識るの燕歸來に似たり、」

と晏殊の春恨詞の一切を口にした。すると女は泣いて云つた。

「さうです、私の母が云つてました、私が生れた時、よく自分で蓮香と云ふことを云つたものですか

ら、不祥だと云つて、犬の血を飲ましたものですから、解らないやうになつてをりました、今日夢

の醒めたやうになりました、」  
そこで共に前生の話をして、悲喜こもももいたると云ふ有様であつた。寒食の日になつて燕が云

つた。

「今日は、蓮香姉さんにおまゐりをする日ですよ、」

そこで三人で蓮香の墓へ往つた。春草が離離と生えて、墓標に植ゑた木がもう一抱へになつてゐ

た。女はそれを見て吐息した。燕兒の李は桑に云つた。

「私と蓮香姉さんとは、兩世の情好がありますから、離れてゐるのに忍びません、どうか一緒の穴に

埋めてください、」

桑はその言葉に従つて李の塚を開いて骨を得て歸り、それを蓮香の墓に合葬した。親戚朋友がその

不思議を聞き傳へて、祭祀の時のやうな服装をしてやつて來たが、期せずして二三百人の者があつま

つた。

予は（蒲松齡）は庚戌の歳、南に遊んで沂州に往き、雨にへだてられて旅舎に休んでゐたが、そこ

に劉生子敬と云ふ者があつて、その中表親に當る同社の王子章の撰する所の桑生傳を見せてくれたがこ

れはその梗概である。

# 阿 寶

粵西に孫子楚と云ふ名士があつた。枝指のうへに何所かにぼんやりしたところがあつたから、よく人にかつがれた。その孫は他處へ往つて歌妓でもゐると、遠くから見ただけで逃げて歸つた。その事情を知つたものがうまくこしらへて伴つて来て、歌妓を側へやつてなれなれしくでもさすと、頸まで根くして、汗を流して困つた。悪戯者どもはそれを面白がつてゐたが、後には譚名をつけて孫癡と云つた。

村に豪商があつてその富力は大名とおんなじ位だと云はれてゐた。従つて親類も皆身分がよかつた。その豪商に阿寶と云ふ女があつて婿になる人を探してゐた。富豪のうへに女がその地方きつての美人であつたから、豪家の少年達は争うて鴈の結納を持ちこんで婿にならうとしたが、どれもこれも女の父親の氣にいらなかつた。その時、孫は細君を亡くして獨身であつたが、悪戯者の一人が又それに目をつけて、

「君は細君を亡くしてゐるが、阿寶に結婚を申しこんではどうだね、」

と云つた。孫はふとその氣になつて自分の境遇のことも考へずに、たうとう媒をする婆さんに頼んで結婚を申しこんだ。

阿寶、父親は孫の名を聞いたが、あまり貧乏だからと思つて躊躇した。そこで媒の婆さんが父親の室を出て歸らうとしてゐると、阿寶が出て来た。婆さんここぞとおもつて、孫生にたのまれてあなたに結婚を申しこんで来たところだと云つた。阿寶も孫の噂を聞いて知つてゐたので冗談にしてしまつた。

「あの枝指をとつてくれるなら、結婚してもいいわ、」

婆さんは歸つて来て孫に話した。孫は本氣にして、

「そんなことはないさ、」

と云つて、婆さんの歸つた後で、斧を出して来て、その枝指を斷つてしまつた。ひどい痛みが腦天に突きぬけるやうになると共に、血がどくどくと出て、ほとんど瀕死の状態になつた。そして、數日たつて始めてやつと起きることができたので、媒の婆さんの所へ往つて傷痕を見せた。婆さんはびつくりして走つて往つて女に知らした。すると女が亦からかつた。

「では、お婆さん、かう云つてちやうだいよ、あなたの馬鹿をとつてくれつてね、」

婆さんは歸つて来て又それを孫に話した。孫は、

「婆さん僕は馬鹿ぢやないよ、僕を馬鹿と云ふのは間違つてゐるよ、」

とやかましく辯解したが、自分の腹の中を女に見せることができないと云ふことに氣が注いで、

「阿寶が綺麗だと云つたところで、天女にはおよばないだらう、高くとまるにもほどがあるぢやな

いかい」

と云つたが、それから阿寶と結婚しようとするのを思ひはなくなつてしまつた。清明の節になつた。土地の風習としてその日は女が郊外に出て遊ぶので、輕薄の少年が隊を組んで隨つて往つて、口から出まかせに女的美醜を品評するのであつた。孫の同窓の友人も強ひて孫を伴つて郊外に往つた。すると友人の一人が嘲つて云つた。

「一度、あの人を見ようと思つてるのぢやないかね、」

孫も阿寶のことで自分からかつてゐると云ふことを知つてゐたが、女からばかにせられてゐるので、どんな女であるか一度見たいと思つて喜んで隨つて往つた。

ふと見ると遠くの方の樹の下に女が休んでゐて、それを少年達が取り巻いて人牆をつくつてゐるのが見えた。すると皆が云つた。

「あれは屹と阿寶だよ、」

急いで往つて見ると果して阿寶であつた。孫はそれをぢつと見た。それは娟麗ならぶものなき女であつた。みるみる人が多くなつて來た。女は起つて急いで往つてしまつた。群衆の感情が沸き立つて女の頭のことを云ひ、足のことを云ひ、それは紛紛として狂人のやうであつたが、孫は獨り考へこんでゐた。

孫の友人達は向うの方へ往つてふりかへつた。孫はまだ故の所に馬鹿のやうになつて立つてゐた。

友人達は聲を揃へて呼んでみたが、孫は返事もしなければ見向きもしなかつた。友人達は皆で往つて曳つぱつた。

「おい、魂が阿寶に隨つて往つたのぢやないかい、」

孫は考へこんだまま返事もしなかつた。皆は孫の平生のぼんやりを知つてゐるので怪しまなかつた。そこで皆で手を曳いたり後から推したりして歸つて來た。そして家へ歸つた孫は、すぐ寢臺の上にあがつて寢たが、終日起きなかつた。家の者が氣をつけてみると酔つたやうに解らなくなつてゐた。呼び起しても醒めなかつた。家の者は魂を失つたのではあるまいかと思つて、野原へ往つて、魂を招く法式を行つたが効がなかつた。強ひて、體を叩いて、

「おい、しつかりしろ、どうしたのだ、」

と云つて訊くと、孫はぼんやりした聲で、

「俺は阿寶の家にあるのだ、」

と云つた。家の者はもうすこし精しいことを訊かうと思つて問うたが、孫は黙つてしまつてもう何も云はなかつた。家の者は驚き惑ふばかりで理由が解らなかつた。

はじめ孫は、阿寶の歸つて往くのを見て、捨ててゆけない氣になると共に、自分の身がそれに從つて往くのを感じた。そして、やつとその帶の間にひつついたが、べつに叱る者もなかつた。たうとう女の家へ歸つて、寢る時も坐る時も何時も一緒にゐるやうになつた。孫は甚だ得意であつたが、ひも

じいので、一度家へ歸らうと思つても路が解らなかつた。  
女は毎晩夢の中で男に愛せられるので、

「あなたは、何人、」

と云つて訊いた。すると男は、

「私は孫子楚だよ、」

と云つた。女は心のうちで不思議に思つたが、人に云ふべきことでもないから黙つてゐた。

孫の體は寢臺に寝てから三日になつたが、息がかすかになつて今にも滅入りさうになつた。家の者はひどく驚いて、人を豪商の許へやつて、そこで魂を招かしてくれと頼んだ。阿寶の父親は笑つて云つた。

「ふだん往復したことのない者が、なんで私の家へ魂を遣してゆかう、」

孫の家の者はそれでも是非招かしてくれと頼んだので、阿寶の父親もやつと承諾した。そこで巫が孫の著ふるしの著物と草で織つた敷物を以て豪商へ往つた。阿寶はその事情を聞いてひどく駭き、他へ往かさずすぐに自分の室へあげて魂を招かした。そして巫がその法式を行つて歸り、孫の家の門口まで往つたところで、寢臺の上の孫の體がうめきだしたが、間もなく醒めた。そこで阿寶の室の鏡臺はじめ什具の色合や名前を訊いてみると、すこしも違はなかつた。阿寶はそのことを傳へ聞いてますます駭くと共に、陰にその情の深いのに感じた。

孫は既に病牀を離れたが、阿寶のことが忘れられないので、時とすると物を忘れた人のやうになつて考へこむことがあつた。そして何時も阿寶の身邊に注意してゐて、もう一度逢つてみたいと思つてゐた。四月八日の灌佛會の日が来て、阿寶が水月寺へ參詣すると云ふことを聞いて、朝早く往つて道中で待つてゐた。そして車に乗つて来る人を注意してゐたが、あまりに一心になつて見つめてゐたためにたちぐらみをした。

午ごろになつて阿寶の車がやつと来た。阿寶は車の中から孫を見つけ、しんなりした手で簾を舉げて、目もはなさずに見つめた。孫はますます心を動かされて後から従いて往つた。阿寶はたうとう侍女に云ひつけて孫に尋ねさせた。

「失禮ですが、あなたのお名前は、」

孫は慇懃に云つた。

「私は孫子楚と云ふものでございます、」

孫の魂はますますぐらついた。そのうちに車は往つてしまつた。孫はそこでやつと歸つて来たが歸ると復た病氣になつて、精神が朦朧となり、食事もせずに夢中になつて阿寶の名を呼んだ。そして自分の魂の靈驗のなくなつたのを恨んだ。

その孫の家には一羽の鸚鵡を飼つてあつたが、急に死んでしまつたので、子供が持つて来て孫の寢臺の傍で弄つてゐた。孫はそれを見てもし自分が鸚鵡になることができたなら、飛んで女の室へ往け

るのだと思つた。そして心をそれに注めてゐた。と、體がひらりと鸚鵡になつて、不意に飛びあがりそのまますぐに阿寶の所へ往つた。阿寶は入つて來た鸚鵡を見て喜んでつかまへ、肘に鎖をつけて麻の實を餌にやつた。すると孫の鸚鵡は大聲に叫んだ。

「お嬢さん、鎖をつけちや駄目です、僕は孫子楚ですよ、」

阿寶はひどく駭いて鎖を解いた。孫の鸚鵡は動かなかつた。そこで女は云つた。

「あなたのお心は、心にきざんでをりますけれど、今となつては、人と禽と種類がちがひますから、結婚することができないぢやありませんか、」

孫の鸚鵡が云つた。

「僕はあなたの側にゐられるなら、本望だ、」

他の人が餌をやつても食はなかつたが、阿寶がやれば食つた。そして、阿寶が坐るとその膝の上に止まり、寝るとその寢臺に止まつた。

そんなふうで三日になつた。阿寶はそれがひどく氣の毒になつて、陰に人をやつて陰の家の容子を見させた。孫は寝たまま氣を失つて、已に三日になつてゐたが、ただ胸のさきが冷えきらないばかりであつた。阿寶はそこで云つた。

「あなた、能く人になることができたなら、きつとあなたのお心に従ひませう、」

孫の鸚鵡が云つた。

「僕をだますのぢやないのですか、」

阿寶は、

「けつしてだましません、」

と固く誓つた。孫の鸚鵡は目を見張つて何か考へてゐるやうであつたが、暫くして女が髪を結ふために履を脱いで牀にあがると、鸚鵡はふいにおりてその履の一つを銜へて飛んで往つた。阿寶は急いで呼びかへさうとしたが、もう遠くの方へ往つてしまつた。そこで女は婆さんの婢に言ひつけて、孫の家へ履を探しに往かしたが、婆さんが往つてみると、孫はもう寤めてゐた。家の者は鸚鵡が繡のある履を銜へて來て、下に落ちて死んだのを見て不思議に思つてゐると、孫がやがて生きかへつて、

「おい履を取つてくれ、」

と云つた。家の者がその理由を知るに苦しんでゐると、そこへ阿寶の家の婆さんが入つて來て、孫を見て、

「その履は何處にあつたのです、」

と云つた。孫は言つた。

「これは阿寶と誓ひをした物です、あなたから云つて下さい、僕はお嬢さんの金諾を忘れないつて、婆さんが歸つて往つて孫の云つたことを云つた。阿寶はますます不思議に思つて、わざと婆さんからその容子を母親に話さした。母親はそれを確めたうへで、

「この人は、評判も悪くはないが、ただ相如のやうな貧乏だからね、數年間も婿を選んでゐて、そんな貧乏人をもらつたとすると、名のある人から笑はれるからね。」

阿寶は孫に誓つてゐるから決して他へは往かないと云つた。阿寶の父親と母親はたうとう女の言葉に従つた。

阿寶の父親は孫を入婚にしようかどうかと云ふことを評議した。すると阿寶が云つた。

「婿は久しく岳の家にあるものぢやありません、それにあの人は貧乏人ですから、久しくをれば久しくをるほど人に賤しまれます、私は一旦承知しましたから、小屋がけに甘んじます、藜藿のお菜もいとひません。」

孫はそこで阿寶を親しく迎へて結婚したが、二人は互に世を隔てて逢つた人のやうに憐んだ。

孫はそれから細君が化粧料として持つて來た金ですこし豊になつた。また幾何か財産もふえたので書物に一生懸命になつて、家のことは見向きもしなかつた。阿寶はよく貯蓄して、他のことで孫を累はさなかつた。三年して家はますます富んだが、孫は忽ち糖尿病のやうな病氣になつて死んでしまつた。阿寶は悲しんで眠りもしなければ食事も攝らないので、皆がいろいろと勧めたけれども、その言葉を用ひなかつた。そして夜にまぎれて縊死しようとした。婢が知つて急に救けてよみがへらしたがたうとう食事を攝らなかつた。

三日過ぎて親類や友人が集まつて、孫の死骸を葬らうとした。と、棺の中からうめき聲が聞えて來た。開けてみると孫は活きかへつてゐた。

「冥王の前に往つたところが、冥王は僕が平生の誠實を知つてをつて部曹にしてくれた、すると人が來て、孫部曹の妻がぢきにまゐりますと云つた、で、王は鬼録を見て、これはまだ死なす者ぢやないと云ふと、三日も食べずにをりますからと云つた、そこで王は僕の方をふりかへつて、汝が妻の節義に感じて、いきかへらしてやると云つて、馬に乗せて送りかへしてくれたのだ。」

それから孫の體はだんだんと回復した。そのうちに官吏登用試験が來た。孫もそれに應ずることになつたが、試験場に入る前にあたつて、悪戯の少年達は又孫をからかつて、七つ出ることになつてゐる試験の題になぞらへたものを作り、孫を人のゐない所へ伴れて往つて話した。

「これは某と云ふ家へ賄賂を贈つて得たものだから、君にあげるよ。」

孫はほんたうにして晝夜いろいろと工夫して七つの文章を作つた。少年達は隱に笑ひあつた。その時試験官は熱れた題では受験者が前人の文章を模倣するの弊があると思つて、力めて變つた題を出した。その題は皆孫の作つた文章に符合してゐた。そこで孫は郷試に選ばれ、翌年は進士に擧げられて翰林を授けられた。天子は孫の不思議を聞いて、召してお尋ねになつた。孫は謹んで申しあげた。天子は非常にお喜びになつて、阿寶に拜謁を仰せつけられ、たくさんの下されものがあつた。

# 胡 氏

直隸に富豪があつて家庭教師を傭はうとしてゐると、一人の秀才が来て、自分を傭うてくれと云つた。主人は内へ入れて話してみると、言語がさわやかであつたから、好い人があつたと思つて悦んだ。秀才は自分で胡と云ふ姓であると云つた。

そこで富豪は幣を出して胡を自分の家へ置いた。胡は子供を教育するに當つて心切で勤勉であつた。それに學問が博くしてたつぱな人間でないと云ふことが解つた。その胡は時とすると散歩に出て夜暗くなつて歸る癖があつたが、その時は入口の扉を堅く閉めてあるにもかかはらず、叩いて人も呼ばないで、何時の間にか室の中へ入つてゐた。主人は不思議に思つて、ある時そつと窺いてみると、室の中に胡はゐなくて一疋の狐がゐた。

主人はひどく驚いたが、しかし胡の意をはかつてみるに悪いことをするやうでもないから、鄭重に取りあつかつて、妖怪と云ふやうなことで禮儀を廢すやうなことはなかつた。胡は主人に女の有るのを知つて結婚したいと思つたのか、時どきその意味をほめかしたが、主人はそのつど意味が解らないやうな顔をした。

ある日、胡は休暇をくれと云つて出て往つたが、翌日一人の客が來た。客は黒い驢に乗つて來てそれを門に繋いであつた。主人はその客を迎へた。それは年の頃五十あまりの廢物も著物も新しい、温厚な男であつた。やがて二人が席につくと、客は自分の來た用事を話した。

「私が今日あがりましたのは、胡氏があなたと長く御交際を願ひたいために、お宅の令嬢と結婚したいと申しますものですから、」

主人は黙つて聞いてゐたが、暫くして云つた。

「僕と胡先生とは、もう莫逆の友になつてをります、結婚なんかしなくてもいいでせう、それに子供は、もう許嫁になつてをりますから、どうかあなたが僕に代つて、胡先生に話してください、」

「しかし令嬢は、確にまだ許嫁になつてゐないことを知つてをりますが、なぜ胡先生と結婚さすのをお嫌ひになります、」

客はこんなことを二三回も繰りかへして云つたが、主人はきかなかつた。客は慙ぢたやうなふうがあつた。客はまた云つた。

「胡も家柄ですよ、さうあなたの家に劣るものぢやありませんよ、」  
すると主人が云つた。

「それでは有りのままに云ひますが、私が結婚させないのは他に意味はないが、ただ胡先生は人間ではありませんから、」  
客は怒つた。



「それは無禮です、」

主人も怒った。

「何が無禮だ、」

「けしからんことをおつしやる。」

「何がけしからん、」

「けしからんです、」

二人は猛りたつた。客はいきなり主人の顔をひつ搔いた。主人は家の者を呼んで、杖で撲らうとした。客は驚いて遁げて往つた。乗つて逃げる隙もなかつたときみえて驢はそのままにしてあつた。側へ往つてみると黒毛の耳の高い尾の長い大きな驢であつた。そこで手綱を解いて曳つばつたが動かかなかつた。そして誰人かが乗らうとするときそのままつくばつてしまつた。それは蝗のやうな蟲であつた。主人は客が怒つてゐたので、きつと復讐に来るだらうと思つて用心してゐた。翌日果して一隊の狐兵がおし寄せて来た。馬に乗つた者もあれば徒歩である者もあつて、それが戈を持ち、弩を持つてゐた。馬の嘶く聲と人聲とが家の周囲に湧きたつて聞えた。

主人は外へ出なかつた。

「家に火をつけろ、」

と云つた。主人はますます懼れた。その家に強ひ男があつた。家の者を従へて逃げたが、石を投げ、箭を飛ばして狐兵に當つた。そして必死になつて戦つたので雙方に負傷者を出したが、そのうちに狐の方が負けて来て、ごたごたとなつて逃げてしまつた。その跡に狐の方で落ちて往つた刀が雪のやうに光つてゐた。側へ往つてひろつてみると、それは高粱の葉であつた。皆が笑つて云つた。

「狐の腕前もこれ位のものだよ、」

そして狐の復た来るのを恐れていますます備をしてゐた。翌日家の者が聚つて話してゐると、見あげるやうな大きな男が不意に空からおりて来て、手にしてゐた門の扉のやうな大きな刀を揮つて斬りかかつて来た。家の者はもう一人逐ひつめられて斬られた。家の物は弓や射石を投げて巨人を中にとりこめて亂撃した。巨人は斃れてしまつた。それは葬式の時に用ひる藁人形であつた。家の者はますます狐をあなどつた。

狐はそれから三日間は來なかつた。家の者はすこし懈つて来た。主人はその時廁に往つた。と、俄に狐兵があらはれて、弓を張つて主人を取り圍んで亂射した。矢が臀にあつまつて来た。主人は大に懼れて叫んだので、家の者がかけつけて主人を救つて戦つた。そこで狐は遁げて往つた。矢を抜いてみると蒿のとげであつた。

こんなことで一ヶ月あまりを費した。狐の害はそれほどでもなかつたが、何時どんなことをするかも判らないので警戒を怠らなかつた。主人はそれが厭でたまらなかつた。ある日胡が兵士を率ゐてや

つて来た。主人は出て行つて胡の方を見た。胡はそれを見ると兵士の中へかくれた。主人は、  
「胡先生、胡先生。」

と云つて呼んだ。胡はしかたなしに出て来た。主人は、  
「僕は先生に禮を失してゐないのに、なぜ僕の家を攻撃します、」

と云つた。狐兵が弓を張つて主人を射ようとした。胡はそれを止めた。主人は近く往つてその手を握つた。そして胡のゐた齋へ伴つて来て、酒を飲みながら話した。その時主人は従容として言つた。

「先生は達人だから、了解してくださるだらうと思ひますが、私は先生と家の子供の結婚は好みません、それは先生の乗物も住居も、人とおなじでないから、子供が結婚したにしても先生の所にゐられないことは先生も御存じだらうと思ひます、そのうへ諺にも瓜と果物の青いのは口に適しないと云ふことがあります。先生だつてもらつてくださるのは厭でせう、」

胡はひどく慙じた。主人が云つた。

「先生が僕を見棄てないなら、僕の家には十五になる男の子供があります、先生の方にどなたかありますなら、迎へたいと思ひますが、先生の方に年比の方がいないでせうか、」

胡は喜んで云つた。

「僕に年のゆかない妹があります、公子より一つ年下です、ひどく馬鹿でもありませんから、さしあげたいと思ひますが、如何でせうか、」

主人は起つて拜禮した。胡も答禮した。そこで新に杯を交換して歡び、前の仲違ひは忘れてしまつた。そして主人は酒肴をならべて胡の従者一同にねぎらうた。主人はそれから胡の住居を訊いて結納を贈らうとしたが胡が辭退した。そして胡は夜になつて酔つて歸つて往つた。

それから狐の害もなくなつて富豪の家も安心した。そして一年あまりになつたが、胡は來なかつた。ある人は胡が諛を云つたのではないかと云つたが、主人は疑はないで待つてゐた。

又半年ばかりして胡が不意に來て、暑い寒いの挨拶をしてから、

「妹が大きくなりました、佳い日を定めて御夫婦に事へさしたいと思ひます、」

と云つた。主人は喜んだ。そこで期日を打ち合はして胡は歸つて往つた。

その日が來て夜になると果して輿馬の一行が新婦を送つて來た。嫁入り道具が非常に多くて、室の中に陳べてみると室の中に一ぱいになつた。

新婦は舅姑に逢つた。その新婦の容色がきれはなれて美しかったので、主人は喜んだ。胡は一人の弟と妹を送つて來てゐたが、二人とも話すことが風雅で、それで又二人とも善く飲んだ。そして、夜明けになつて歸つて往つた。

新婦は豊年と凶年とを知つてゐた。生活上のことは新婦の言葉に従つてやつた。胡の兄弟及び母親は、時どき女に遇ひに來たので村の人は皆それを見た。

# 織成

洞庭湖の中には時とする水神があらはれて、舟を借りて遊ぶことがあつた。それは空船でもあると、纜がみるみるうちにひとりひとりに解けて、飄然として遊びに往くのであつた。その時には空中に音楽の音が聞えた。船頭達は舟の片隅にうづくまつて、目をつむつて聴くだけで、決して仰向いて見るやうなことはしなかつた。そして、舟を往くままに任せておくと、何時の間にか遊びが畢つて、舟は元の所に歸つて船がかりをするのであつた。

柳と云ふ秀才があつて試験に落第しての歸途、舟で洞庭湖まで來たが酒に酔つたのでそのまま舟の上で寝てゐた。と、笙の音が聞えて來た。船頭は水神があらはれたと思つたので、柳を揺り起さうとしたが起きなかつた。船頭はしかたなしに柳をそのままにして舟の底へかくれた。

と、人が來て柳の頸筋をつかんで曳き立てようとした。柳はひどく酔つてゐるので持ちあがらなかつた。そこで手を放すとそのまま又ぐつたりとなつて眠つてしまつた。しばらくしてその柳の耳に鼓や笙の音が聞えて來た。柳はすこし眼が醒めかけたのであつた。蘭麝の香が四邊に漂うてゐるのも感じられた。柳はそつと窺いてみた。舟の中は綺麗な女ばかりで埋まつてゐた。柳は心のうちでただごとでないことを知つた。柳は目をつむつたやうに見せかけてゐた。しばらくして、

「織成、織成、」

と口移しに云ふ聲がした。すると一人の侍女が來て、柳の頬の近くに立つた。それは翠の襪に紫の色絹を着て、細い指のやうな履を穿いてゐた。柳はひどく氣に入つたので、そつと口を持つて往つてその襪を嚙んだ。しばらくして女は他の方に往かうとした。柳が襪を嚙んでゐたためによりよるとして倒れた。一段高い所に坐つてゐる者がその理由を訊いた。

「その方は、何故に倒れたのか、」

女はその理由を話した。

「此所にある人間が私の襪を嚙んだためでございます、」

高い所にゐた者はひどく怒つた。

「その者に誅を加へるがよからう、」

武士が來て柳をつかまへ曳きたてて往かうとした。高い所には冠服をした王者が南に面して坐つてゐた。柳は曳き立てられながら云つた。

「洞庭の神様は、柳姓であります、私も亦柳姓であります。昔、洞庭の神様は落第しましたが、私も今落第してをります、然るに洞庭の神様は、龍女に遇つて神仙になられ、今私は酔つて一人の女に戯れたがために死ぬるとは、何と云ふ不幸の懸隔のあることでせう、」

王者は、それを聞くと柳を呼びかへして問うた。

「その方は下第の秀才か、」

柳はうなづいた。そこで王者は柳に筆と紙をわたして、

「風鬟霧鬢の賦を作つてみよ、」

と云つた。柳は襄陽の名士であつたが、文章を構想することは遅かつた。筆を持つてやや久しく考へたができなかった。王者はそれをせめた。

「名士、どうして遅い、」

柳は筆を置いて言つた。

「昔、晋の左思が作つた三都の賦は、十年してできあがりしました、文章は巧みなのを貴んで、速いのを貴びません、」

王者は笑つて聽いてゐた。辰の刻から午の刻になつて始めて脱稿した。王者はそれを見て非常に悦んだ。

「これでこそ眞の名士である、」

そこで柳は酒を下賜せられた。時を移さず珍奇な肴が前に列べられた。王者が柳に何か云はうとしてゐる時、一人の使者が帳簿を持つて來て捧げた。

「溺死者の名簿ができました、」

「幾人ある、」

「二百二十八人あります、」

「何人を差遣するのか、」

「毛將軍と南將軍の二人でござります、」

柳はその前を退かうとした。王者は黄金十斤と、水晶の界方をくれた。界方とは直線を引くに用ひる定規で、それで文鎮をかねるものであつた。王者は云つた。

「湖の中で災厄に逢つても、これを持つてゐるなら免れることができる、」

と見ると羽蓑をさしかけた人馬の行列が水面にあらはれた。王者は舟からおりてその輿に乗つたが、そのまま見えなくなつてしまつた。舟の中一ぱいにゐた女達ももうゐなくなつてゐた。

船頭はやつと船底から這ひ出して來て、舟を漕いで北に向つた。強い風が逆に吹きだしたので舟は進まなかつた。と、その時不意に水の中から鐵錨が浮いて出た。船頭は狼狽しだした。

「毛將軍がお出ましになつた、」

附近を往來してゐた舟の乗客は皆船底につツぶしてしまつた。間もなく水の中に一本の木が立つてゐて、それが揺れ動いてゐるのが見えた。客も船頭も色を失つた。

「南將軍が又お出ましになつたぞ、」

波が急に湧きたつて來て、その波頭が空の陽をかくすやうに見えた。舳先を並べてゐたたくさんの

舟はみるみる漂はされて別れ別れになつた。柳の舟では柳が界方をさしあげて危坐してゐたので、山のやうな波も舟に近くなると消えてしまつた。

そこで柳は無事に故郷へ歸ることができたが、何時も人に向つて舟の中の不思議なことを話して、そしてそれにつけ加へて云つた。

「舟の中の女は、はつきりとその顔は見なかつたが、裾の下の二本の足は、人間の世にはないものだつたよ、」

後に柳は事情があつて武昌に往つた。その時崔と言ふ老婆が水晶の界方を一つ持つてゐて、これと寸分違はない物を持つてゐる者があるなら女を嫁にやらうと云つた。柳はそれを人から聞いて不思議に思つて、彼の界方を持つて往つた。

老婆は喜んで面會した。そして女を呼んで見せた、それは十五六の綺麗な女であつた。女は一度お辭儀をするかと思ふともう幃の中へ入つて往つた。柳の魂は揺れ動いた。

「私が持つてゐる物と、こちらの物と似てをりませうか、」

そこで雙方が界方を出しあつて較べた。その長さも色合もすこしも違はないものであつた。老婆は喜んで柳の住所を問ひ、女を後から伴れて往くから輿に乗つて早く歸つて支度をしておけ、そして界方を印に遺しておくと云つた。界方を遺しておくのが不安であるからすぐ承知しなかつた。老婆は笑つた。

「旦那もあまり心が小さいぢやありませんか、私がどうして一つの界方位とつて逃げるものですか、」柳はしかたなしに界方を置いて歸つて往つたが、どうも不安でたまらないから、輿を傭うて急いで老婆の家へ取りに往つた。老婆の家は空になつて何人もゐなかつた。柳は駭いて、その附近の家を一軒一軒訊いてみたが、何人も知つたものはなかつた。陽はもう西にまはつてゐた。柳は怒と懊みで自分のことも忘れて歸つて來た。

途中で一つの輿と行き違つた。と、向うの輿をあげて、

「旦那あまり遅いぢやありませんか、」

と云ふ者があつた。それは崔であつた。柳は安心して喜んだ。

「何處へ往くのです、」

崔は笑つて云つた。

「あなたが、きつと、私を騙りと疑つていらつしやるだらうと思つて、あなたと別れた後で輿の便があつたから、その時旦那も旅住居で、支度ができなからうと、女を送つて、あなたの舟まで往つたのですよ、」

柳は崔の輿を返してもらはうとしたが崔がきかなかつた。柳は崔が女を舟へ送つてあると云ふのも怪しいと思つたので、あたふたと歸つて往つた。舟には女が一人の婢を伴れて坐つてゐた。女は笑ひながら柳を迎へた。翠の襪、朱い履、洞庭の舟の中で見た侍女の妝飾とすこしも違はない女であ

つた。柳は心で不思議に思つて、そのあたりを歩きながら女に注意した。女は笑つた。

「そんなに御覽になるが、まだ一度も御覽になつたことはないのですか、」

柳はますます眼を近くにやつた。襦袢の後には齒の痕が残つてゐた。柳は驚いて云つた。

「お前は織成か、」

女は口もとを掩うて微かに笑つた。柳は長揖の禮をとつて云つた。

「お前は神か、早くほんたうのことを云つてくれ、俺を惑はしてくるな、」  
女が云つた。

「ほんたうのことを申しませう、あなたが洞庭の舟の中でお遇ひになつたのは、洞庭の神様ですよ、洞庭の神様は、あなたの大きな才能を崇拜して、私をあなたに贈ることになりましたが、私は王妃に愛せられてみましたから、歸つて相談しました、私のあがりましたのは王妃の命であります、」

柳は喜んで手を洗ひ香を焚いて、洞庭湖の方に向いて遙拜してから、女を伴れて歸つた。後に又武昌に往く時女が里がへりがしたいと云ふので、同行して洞庭まで往つた。女は釵を抜いて水の中に投げた。と、見ると一艘の舟が湖の中から出て来た。女はそれに飛び乗つて鳥の飛ぶやうに往つたが、またたく間に見えなくなつた。柳は舟の舳に坐つて小舟の消えた所をぢつと見つめてゐた。

遙の遠くから一艘の樓船が来たが、すぐ傍へ来ると窓を開けた。一羽の色鳥が飛んで来たやうにして織成が歸つて来た。すると窓の中から金帛珍物を此方の舟に向けて投げてくれた。それは王妃の賜物であつた。

柳夫妻はそれから毎年、年に二回洞庭に往くことが例になつた。柳の家はますます富んで珍らしい珠が多かつた。これを世間に出してみると、いろいろの珍らしい物を見てゐる家柄の家でも知らなかつた。

# 竹青

魚容と云ふ秀才があつた。湖南の人であつたが、この話をした者が忘れてゐたから郡や村の名は解らない。ただ家が極めて貧乏で、文官試験に落第して歸つてゐる途中で旅費が盡きてしまつた。それでも人に物を乞ひ歩くのは羞かしくてできない。ひもじくなつて歩かれないやうになつたので、暫く休むつもりで吳王廟の中へ入つて往つた。そこは洞庭のうちになつた楚江の富池鎮であつた。吳王廟は三國時代の吳の甘寧將軍を祀つたもので、水路を守る神とせられてゐた。廟の傍の林には數百の鴉が棲んでゐて、その前を往來する舟を數里の先まで迎へに往つて、舟の上に群がり飛ぶので、舟から肉を投げあげてやると一いち啄でうけて、下に墜すやうなことはなかつた。舟の人はそれを吳王の神鴉と云つてゐた。

落第して餓ゑてゐる男は、何を見ても聞いても癪にさはらないものはなかつた。魚は吳王の神像の前へ往つて不平滿々たる詞で祈つた後で、廊下へ往つて寝てゐた。と、何人かが來て魚に來いと云ふので隨いて往つた。そこは吳王の前であつた。魚を伴れて往つた者は、ひざまづいて云つた。

「黒衣隊がまだ一人缺けてをりますが、補充致しませうか。」  
「それがよからう。」

吳王の許しが出たので、その者から魚に黒い衣服をくれた。魚は云はれるままにそれを著ると、そのまま鴉になつた。そこで羽ばたきをして飛んで往くと、たくさんの朋輩の鴉があがあと噪いで飛んでゐた。そして、それに隨いて往つて往來してゐる舟の帆檣の周圍を飛んだ。すると舟の上にある旅人が争つて我も我もと肉をなげてくれた。朋輩の鴉はすばしっこくそれを空中でうけた。魚もそれにならつてやつてゐると、またたく間に腹が一ぱいになつた。そこで歸つて林の杪に止まつたが、もう前の不平は忘れて得意であつた。

二三日すると吳王は魚に、偶の無いのを憐んで、一羽の雌をあはしてくれした。それは竹青と云ふ名であつた。雌は互に愛しあつて楽しく暮らしてゐた。

魚は舟の上へ往つて食物をあさる時に、馴れてしまつて用心しないので、竹青が何時も注意したが聽かなかつた。ある日、兵士の乗つた舟が通つた。兵士は肉のかはりに銃彈を飛ばした。銃彈は魚の胸にあつた。魚が落ちやうとすると竹青が衝へて往つたので、兵士につかまらずにすんだ。鴉の群は朋輩を撃たれて怒り、羽ばたきをして波をあふつたので、大きな波が湧き起つて兵士を乗せた舟は覆へつてしまつた。

竹青は魚を林の中へ伴れて行つて、餌をあさつて來て食はさうとしたが、魚は傷がひどかつたのでその日の中に死んでしまつた。と、夢のやうに目が醒めてしまつた。魚は吳王廟の廊下に寝てゐる自分を見出したのであつた。

はじめ土地の人は吳王廟の廊下に死んだやうになつてゐる魚を見つけたが、どうした者が解らうはずがない。體へ手をあててみるとまだ冷えきつてゐないので、時どき人を見せによこしてあつた。ところで、この時になつて魚が蘇生したので、すべての事情が解つた。村の人は金を出しあつて旅費を作つてくれたので、魚は無事に故郷へ歸ることができた。

後三年して魚は復た旅に出たが、途ついでに吳王廟へ參詣して、食物を供へ、鴉を呼びあつめて食べさせた。そして、

「この中に竹青がもしゐるなら、残つておいで、」

と云つて祈つたが、鴉は食べてしまふと飛んで往つて一羽も残らなかつた。

魚は後に官吏になつて歸つて來たが、復た吳王廟に參詣して、羊と豚とを供へ、一方にたくさんの食物をかまへて、鴉の友達に御馳走をした。そして又竹青のことを云つて祝つたが、その日も残る鴉はゐなかつた。

魚はその晩舟を湖村に繋いで燭の側に坐つてゐた。と、鳥のやうにひらりと入つて來て几の前に立つたものがあつた。みると二十ばかりの麗人であつた。につと笑つて、

「お別れをしてから、御無事でしたか、」

と云つた。魚はめんくらつて訊いた。

「あなたは、何人ですか、」

「あなた、竹青をお忘れになつて、」

魚は喜んだ。

「何處から來たかね、」

「私、今、漢江の神女となつてゐますから、故郷へ歸ることはすくないのですが、鴉の使が二度も來て、あなたの御心切を知らしてくれましたから、お眼にかかりに來たのです、」

魚はますます喜んだ。ちやうど久しく別れてゐた夫妻のやうに懽懽にたへなかつた。そこで魚は竹青を自分の故郷へ伴れて往かうとした。

「南に往かうぢやないか、」

竹青は魚を漢水の方へ伴れて往かうとした。

「西に往かうぢやありませんか、」

その相談ができないうちに二人は眠つてしまつた。そして、魚が眼を醒してみると女はもう起きてゐた。魚は眼を開けて四邊を見た。立派な家の中に燭の光が輝いてゐた。そこはどうしても舟の中ではなかつた。魚は驚いて起きて、

「此所は何所だね、」

と訊いた。女は笑つて云つた。

「此所は漢陽ですよ、私の家はあなたの家ぢやありませんか。南へ往かないたつていいでせう、」



そのうちに夜が明けはなれた。侍女や媼達が集まつて来て、酒の支度をした。そこで廣い牀の上に小さな几を据ゑて、二人がさし向ひで酒もりをした。魚は、

「下男は何所にあるだらう、」

と云つて訊いた。竹青は、

「舟にあるのですわ、」

と云つた。魚い船頭が長く待つてくれないだらうと思つた。

「船頭はどうしたかなあ、」

竹青は云つた。

「いいのです、私から禮をしますから、」

そこで魚は竹青と夜も晝も酒もりして歸ることを忘れてゐた。

舟の中にあつた船頭は翌朝眼を醒してみると、漢陽の市が見えるので腰をぬかさんばかりに駭いた。下男は下男で主人の室へ往つてみると主人がゐないので、探してみたが杳として手がかりがなかつた。そこで船頭は舟を出さうとしたが、纜の結び目が解けないので、たうとう下男と一緒にゐることにした。

二箇月すきてから魚はふと歸りたくなつた。そこで竹青に云つた。

「何時までもかうしてゐると、親類にも忘れられてしまふし、それにだいいち、お前は私と夫婦になつてゐるが、一度も私の家を見ないと云ふのはいけないよ、」

竹青は云つた。

「私は漢陽にゐなくてはならないから、とても往けないですが、たとひ往くことができても、あなたのお宅には奥さんがおありでせう、私をどうなさるのです、それよりか私を此所に置いて、別宅にしたほうがよくはありませんか、」

魚は道が遠いのでとても時どきは來られないと思つた。

「漢陽は遠いからなあ、」

女は起つて往つて黒い衣服を出して來て云つた。

「あなたが何時か著てゐた著物があります、もし私を思つてくださる時には、これを著てください、此所へいらつしやることのできるのです、いらしたら私がお脱がせします、」

そこで珍らしい着をこしらへて魚のために送別の宴を張つた。そのうちに魚は酔つて寝たが、眼を醒ましてみると舟の中に歸つてゐた。見るとそれは洞庭の舊の舟を泊めた所であつた。船には船頭も下男もゐた。皆顔を見合はして駭いた。船頭と下男は魚の往つてゐた所を訊いた。魚は喪心してゐた人のやうにわざと悲しさうな顔をして驚いて見せた。

枕もとには一つの包みがあつた。開けてみると女のくれた新しい衣服、履、襪など入つてゐた。黒い衣服もその中に入れてあつた。又繻をした袋を腰のあたりに結へてあつたが、それには金

が一ぱい充ちてゐた。そこで南にむかつて舟をやり、前岸に著いて、船頭にたくさんの禮をやつて歸つた。

魚は家へ歸つて二三箇月したが、ひどく漢水の竹青のことが思はれるので、そこで、そつと彼の黒衣を出して著た。すると兩脇に翼が生えて、空に向つてあがつて往くことができた。そして二ときはかり經つと、もう漢水へ著いたので、輪を描きながら下の方を見た。小さな島の中に一簇の樓舎があつた。魚はそこへ飛びおりた。侍女の一人がもうそれを見てゐて大聲で云つた。

「旦那様がお見えになりました、」  
間もなく竹青が出て来て、皆に云ひつけて黒衣の結び目を緩めさせた。と、羽がはらりと脱げたやうになつた。魚は竹青と手を握りあつて家の中へ入つた。竹青は云つた。

「いい所へいらしてくれました。もう今日にも生れさうなんですよ、」  
魚は冗談にして云つた。

「胎生かね、それとも卵生……、」  
竹青は云つた。

「私、今、神になつてますから、骨も皮も、もうかはつてゐるのですよ、」  
二三日して果して竹青はお産をした。子供は厚い胎衣に包まれて生れたが、ちやうど大きな卵のやうであつた。破つてみると男の子であつた。魚は喜んで漢産と云ふ名をつけた。

三日の後、漢水の神女が集つて来て、衣服や珍らしい物をいはつてくれた。皆綺麗な女ばかりで、三十以上の者はなかつた。一緒に室の中へ入つて嬰兒のある寢臺の傍へ行き、拇指で嬰兒の鼻をなでて、増壽と云ふ名をつけた。

皆が歸つた後で魚は竹青に問うた。

「あれは皆なんだね、」  
竹青は云つた。

「皆、私の朋輩ですよ、いちばん後にゐた蓮の花のやうに白い著物を著たのは、漢阜臺の下で佩玉を解いて交甫に與へた方ですよ、」

二三箇月して女は舟で送つてくれた。それは帆も揖も用ひないで飄然とひとりて往く舟であつた。陸へ往つてみるともう人が馬を道ばたに繋いで待つてゐた。魚はそこで家へ歸つた。

魚はそれからたえず往來した。數年して漢産がますますきれいな子になつたので、魚は可愛がつた。魚の妻の和氏は、子供がないので何時も漢産を見たがつてゐた。魚はそれを竹青に告げた。竹青はそこで旅行の支度をして、漢産を魚につけて歸した。それは三箇月と云ふ約束であつた。

歸つて來ると、和は自分の生んだ子以上に可愛がつて、十箇月が過ぎても返さなかつた。と、ある日、漢産は急病が起つて死んでしまつた。和は悲しんで自分も死にかねないほどであつた。  
魚はそこで漢水へ往つて竹青に知らさうとした。門を入つて往くと、漢産は赤足のままで寢臺の上

に眠つてゐた。魚は喜んで女に訊いた。

「漢産は死んだがとうしたのだ、」

竹青は云つた。

「あなたが、約束に負いて早く返してくだらないものですから、呼んだのですよ、」

そこで魚は和が子供をひどく可愛がることを話した。竹青が云つた。

「では、私が今度子供を生むのを待つててください、漢産を返しますから、」

一年あまりすると竹青は雙兒を生んだ。それは男と女の子であつた。そして男を漢生とつけ、女を玉佩とつけた。魚は漢産を伴れて家へ歸つたが、一年の中に漢水へ三四回も往くので不便であつた。魚はそこで家を漢陽に移した。

漢産は十二で郡の學校へ入つた。竹生は人間には美しい質の女があないからと云つて、漢産を呼んで妻を迎へさし、そして歸してよこした。漢産の妻になつた女の名は扈娘と云つて、これも神女の産れであつた。

後、和が死んだ。漢生及び妹の玉佩も皆喪の禮を行つた。葬儀が畢つて漢産は留り、魚は漢生と玉佩を伴れて出て往つたが、それから歸らなかつた。

## 阿 織

奚山は高密の人であつた。旅に出てあきなひをするのが家業で、時どき蒙陰縣と沂水縣の間を旅行した。ある日その途中で雨にさまたげられて、定宿へ往きつかないうちに、夜が更けてしまつた。宿をかしてくれさうな物を賣る家の門口をかたつぱしから叩いてみたが、返事をするものがなかつた。しかたなしに廡下をうろうろしてゐると、一軒の家の扉を左右に開けて一人の老人が出て來た。

「お困りのやうだな、お入り、」

「有難うございます、」

山は喜んで老人に従いて往き、曳いてゐる驢を繋いで室の中へ入つた。室の中には凡も腰掛けもなかつた。老人は云つた。

「わしは、あんたがお困りのやうだから、お泊めはしたが、わしの家は食物を賣つたり、飲物を沽つたりする所でないから、手すくなで往きとどかん、ただ婆さんと、年のゆかない女があるが、ちやうど眠つたところぢや、残りの肴はあるが、煮たきに困るので何もできない、かまはなければ、それをあげようか、」

老人はさう云つてから入つて往つた。そして、間もなく足の短い牀を以て來て下に置き、山をそ

れに坐らしたが、又入つて往つて一つの足の短い几を持つて来た。それは如何にも急がしさうに往つたり來たりするのであつた。そのさまを見ては山もぢつとしてゐられないので、曳きとめて休んでもらつた。

「どうか、どうか、おかまひくださらんやうに、どうかお休みください。」

暫くすると一人の女が出て来て支度をしてくれた。老人は女の方をちよつと見て云つた。

「これが家の阿織だ、起きて來たのか。」

見ると年は十六七で、綺麗でほつそりしてゐて、それで愛嬌があつた。山には年のゆかない弟があつてまだ結婚してゐないので、かう云ふのをもらひたいものだと思つた。そこで老人の故郷や屬籍を訊いてみた。老人は云つた。

「わしは、土虚と云ふ名で、苗字は古と云ふよ、子も孫も皆若死して、この女だけが遺つてをる、ちやうど睡つてをつたから、そのままにしてあつたが、婆さんが起したと見える。」

「お婿さんは何と云ふ方です。」

「まだ許嫁になつてをらんよ。」

山は喜んだ。そのうちに肴がごたごたと竝んだが、旅館のこんだてに似てゐた。食事が終つてから

山はおじぎをして云つた。

「旅をしてをりますと、どんな方に御厄介になるかも解りません、ほんたうに御世話をかけました、

この御恩は決して忘れません、ほんとにああなたのお蔭です、そのうへ、だしぬけに、こんなことを申しましてはすみませんが、私に三郎と云ふ弟があります、十七になりますが、書物も読み、商賣をさしても、それほど馬鹿ではありません、どうかお嬢さんと縁組をさしていただきたいですが、貧乏人ですけれども、

老人は喜んで云つた。

「わしもこの家は、借りてをる、もしさうなれば、一軒借りて移つて往つてもいい、さうするなら懸念もなくなる道理ぢや、」

山はすべてそれを承諾した。そこで起つて禮を云つた。老人も慇懃に後始末をして出て往つた。

朝になつて鶏が鳴いた。老人は起きて來て山に顔を洗はして食事をさした。山はすっかり支度して金を出した。

「これはすこしですが、食物代にとつてください。」

老人はどうしてもとらなかつた。

「一晩の宿ぢやないか、金をもらふわけがない、それに婚禮の約束をした間柄ぢやないか。」

山はそこで一家の者と別れて、一箇月あまり旅をして返つて來た。そして村から一里あまり離れた所へ往つたところで、老婆が一人の女を伴れて往くのに逢つた。それは喪中であらう、冠から衣服まで皆白いものを著てゐた。そして近くへ往つて見ると、どうもその女が阿織に似てゐるやうに思はれ

た。女も亦頻りに此方を見てゐたが、やがて老婆の袂をつかまへて、その耳の傍へ口を持って往つて嘯いた。老婆は足を停めて山に向つて云つた。

「あんたは奚さんではありませんか、」

山は云つた。

「さうですよ、」

老婆は悲しげな顔をして云つた。

「お爺さんは、崩れかゝつた壁に壓しつぶされて死んぢやつたよ、今、ちやうど墓詣りに往くところだ、家には何人もゐないから、ちよつと路ばたで待つてて下さいよ、すぐ歸つてくるから、」

そこで二人は林の中へ入つて往つたが、暫くたつてやつと歸つて来た。日が暮れて路はもう眞暗であつた。三人は一緒にその暗い中を往つたが、老婆は將來のたよりないことを話して泣いた。山も亦心を動かされた。老婆は云つた。

「この土地は人情が善くないから、親のない子や孀では暮してゆけない。阿織ももう、あなたの家の婦になつてをる、ここをすすと又日が遅れるから、今晚の中に一緒に伴れてつてもらふといゝが、」

そのうちに家へ著いた。老婆は燈を點けて山に食事をさし、それがすんでから云つた。

「あんたがもう歸つて来る時分だと思つて、持つてゐる粟は皆賣つたが、それでもまだ二十石あまり残つてをる、遠くへは持つて往けないから、此所から四五里も往くと、村の中の第一ばんめの門に、つてつて下さいと云へばいい、」

そこで囊の粟を山にわたした。山は驢を曳いて往つて戸を叩いた。一人の大きな腹をした男が出て来た。山はその男に老婆の云つたとほりに云つて、持つて往つた囊の粟を開けて歸つて来た。

山が歸る間もなく二人の男が五疋の驢を曳いて来た。老婆は山を伴れて粟のある所へ往つた。それは窖の中に入れてあつた。そこで山がおりて量をはかると、老婆は女に收めさせた。みるみる入れ物に一ぱいになつたので、それをわたして運ばした。凡そ四かへりして粟はなくなつてしまつた。やがて買ひ主は老婆に金をわたした。老婆はその男の一人と二疋の驢を留めておいて、荷物を積んで皆で東の方へ出發した。そして一行が二十里も往つたところで夜がやつと明けた。そこで唯ある市へ往つて、乗る馬をやとひ、送つて来た男は其所から返した。

山はやがて家へ歸つて兩親にその事情を話した。兩親もひどく喜んだ。そこで別邸を老婆の住居にして、吉日を選んで三郎と阿織を結婚させたが、老婆は阿織に嫁入り支度を十分にした。

阿織は寡言で怒るやうなこともすくなかつた。人と話をしてもただ微笑するばかりであつた。晝夜續いだり織つたりして休まなかつた。それがために上の者も下の者も皆阿織を可愛がつた。阿織は三郎に頼んで云つた。

「兄さんにおつしやつてください、また西の道を通ることがあつても、私達母子のことを口に出さないやうにつて、」

三四年して奚家はますます富んだ。三郎は學校に入つた。

ある日、山は商用で旅行して、古の家の隣に宿をとつた。そして宿の主人と話してゐて、ふと雨にへだてられて定宿に往けずに古老人の世話になつたことを話した。宿の主人は、

「それやお客さん、何かの間違でせう、東隣は私の兄の別宅で、三年ほど前に貸してあつた者が、時とするに怪しいことがあつたので、引移して空屋になつてゐる、どうして爺さんや婆さんがゐるものかね、」

それを聞いて山はひどく不思議に思つた。しかしまだ、それほど深くは信じなかつた。主人は又云つた。

「あの家は、せんに十年空いて、よう入る者がなかつたが、ある日、家の後の牆が傾いたもんだから、兄が往つてみると、大きな猫のやうな鼠がはさまれて、尻尾は牆の内でもまだ動いてゐたので、急いで歸つて来て、皆を呼んで往つてみるともうゐなかつたのだ、皆がそれが怪しいことをしてたらうと云つたのだよ、その後十日あまりして、復た入つて往つてためしたが、ひつそりしてもう何もなかつたよ、それから又一年あまりしてから、やつと人があるやうになつたのだよ、」

山はますます不思議に思つて家へ歸つて両親にそつと話し、どうも阿織は人であるまいと思つて、三郎のために心配したが、三郎は始めとすこしもかはらずに阿織を愛した。

暫くして家の中の人の心がちぐはぐになつて阿織をうたがひだした。阿織はかすかにそれを察して、夜、三郎に話した。

「私は、あなたの所へまゐりましてから、數年になります、まだ一度だつて悪いことをしたことがありませんのに、この頃は人竝に待遇せられません、どうか私に離縁状をください、そして、あなたは自分で良い奥さんをおもらひなさい、」

さう云つて阿織は泣いた。三郎は云つた。

「私の氣持ちは、お前がよく知つてくれてゐるはずだ、お前が家へ来てくれたから、家は日増に繁昌して来た、皆これはお前が福を持つて来てくれたものだ」と云つて喜んでゐる、何人がお前のことを悪く云ふものか、」

阿織は云つた。

「あなたの氣持ちはよく解つてをります、ただ他の人の口がやかましいので、すてられはしないかと心配するのです、」

三郎は一生懸命になつてなだめたので、阿織もそれからは何も云はなかつたが、山はどうしても釋けなかつた。彼は善く鼠をとる猫をもらつて来て女の容子を見た。阿織は懼れはしなかつたが面白くない顔をしてゐた。

ある夜、阿織は老婆のぐあひが悪いからと云つて、三郎に暇をもらつて看病に往つたので、夜明けに三郎が往つてみた。老婆の室は空になつて老婆も阿織もあなかつた。三郎はひどく駭いて、人を四方に走らして探さしたが消息が解らなかつた。三郎はそれがために心を痛めて寐もしなければ食事もしなかつたが、山はじめ兩親はかへつて幸にして、いろいろと三郎を慰め、後妻をもらはさうとした。三郎はひどくいやがつて一年あまり阿織のたよりを待つてゐたが、たうとうそのたよりがなかつた。三郎は山や兩親からせめられるので、しかたなしに多くの金を出して妾を買つたが、阿織を思ふ心は衰へなかつた。

そのうちに又數年たつた。奚家は日に日に貧しくなつて來た。そこで家の者が皆阿織を思ひだした。三郎の弟に嵐と云ふ者があつて膠に往く道で、まはり道をして母方の親類にあたる陸と云ふ者の家へ泊つて往つた。夜になつて隣で悲しさに泣く聲が聞えたが、訊くひまもなく出發して、歸りに復た寄つてみると復た泣聲がした。そこで主人の陸生に訊いた。

「この前にも聞いたが、隣で泣聲がするが、あれはどうした人だね、—  
すると主人が云つた。

「二三年前、孀の婆さんと女の子が來て借家をしてゐたが、前月その婆さんが死んぢやつたから、女の子は獨りぼつちで、親類もないから泣いてるのだよ、」

「何と云ふ苗字だらう、」  
「昔と云ふ苗字だが、近所の者ときあはないので、家筋は解らないよ、—  
嵐は驚いて云つた。

「それは僕の嫂だよ、」

そこで往つて扉を叩いた。と、内にゐた人が起つて來て扉を隔てて云つた。

「あなたはどなたです、私の家には男の方に知りあひはないのですが、」

嵐が扉の隙から窺いてみると果して阿織であつた。そこで云つた。

「ねえさん、開けてください、私は弟の嵐ですよ、」

女はそれを聞くとかんぬきを抜いて扉を開けた。嵐が入つて往くと、阿織はひとりみの苦しさを訴へた。嵐は云つた。

「三郎兄さんは、あなたをひどく思つてゐるのです。夫婦ですもの、仲違ひ位はありますよ、なぜこんなに遠くまで逃げるのです、」

そこで輿をやとつて一緒に歸らうとした。阿織は悲しさに云つた。

「私は人あつかひをせられないので、たうとう母と隠れたのです。今、歸つて往つたなら、いやな顔をせられるのでせう。もし歸るとなれば、大兄さんと別家するのですね、でなければ私は死んでしまひます、」

嵐はそこで歸つて三郎に知らせた。三郎は晝夜兼行で往つて阿織に逢つた。二人は顔を見合はして

泣いた。翌日二人は出發することにして家主に知らした。家主の謝監と云ふ男は、阿織の美しいのを見て、妾にしようと思つて、初めから家賃を取らずに置いて、頻りに老婆にほめかしたが、老婆はことわつてゐた。その老婆が死んでくれたので、家主は目的が達せられると思つて喜んでゐると、三郎が来たので、初めからの家賃を計算して苦しめにかかつた。三郎の家はもう豊でないから、多い額になつてゐる家賃のことを心配した。すると阿織は云つた。

「そんなことは心配ありませんよ。」

と云つて三郎を伴れて往つた。そこに倉があつて三十石にあまる粟が儲へてあつた。それがあつたら家賃を拂つてもまだ剩りがあつた。三郎は喜んだ。そこで家主の謝に粟をとつてくれと云つた。謝は困らすつもりで、

「こんな物をもらつても仕方がない、金をもらはう。」

と云つた。阿織はためいきして云つた。

「それが私の罪障ですから。」

そこで阿織は謝のことを話した。三郎は怒つて訴へようとした。陸氏はそれをとめて、粟を村の者に別け、その金をあつめて謝に拂つて、車で二人を送り返した。

三郎は家へ歸つて両親に知らし、兄の山と別居した。阿織は自分の金を出して、たくさん倉を建てさせた。家の中には僅ばかりの蓄たぐはもないので皆が怪しんでゐたが、一年あまりしてみると倉の中倉の中一はばいになつてゐた。そこで幾年もたないうちに大金持ちになつた。そして、山は貧乏で苦しんでゐた。阿織は両親を自分の家へ呼んで養ひ、兄の山にも金や粟をやつてたすけたが、それがなれて常のこととなつた。三郎は喜んで云つた。

「お前は舊惡を念はないと云ふ方だよ。」

阿織は云つた。

「兄さんはあなたを可愛がつていらつしやるのですわ。兄さんがなかつたなら、どうしてあなたを知ることができたでせう。」

その後は亦何の怪しいこともなかつた。



# 珊瑚

安大成は重慶の人であつた。父は孝廉の科に及第した人であつたが早く歿くなり、弟の二成はまだ幼かつた。大成は陳姓の家から幼な名を珊瑚と言ふ女を娶つたが、大成の母の沈と云ふのは、感情のねぢれた冷酷な女で、珊瑚を虐待したけれども、珊瑚はすこしも怨まなかつた。そして、朝あさ早く起きては身じまひをして、母の所へ挨拶に往つた。

大成がその時病氣になつた。母は珊瑚がみだらであるからだと云つて、ある朝珊瑚を責め話つた。珊瑚は自分の室へ入つて化粧をおとして母の前へ往つた。それを見て母はますます怒つた。珊瑚は額を地に打ちつけてあやまつた。大成は親孝行であつた。それを見て鞭を執つて珊瑚を打つた。それで母の氣がすこし晴れてその場は收まつたが、母はそれからますます珊瑚を憎んで、珊瑚が心から仕へても一言も物を云はなかつた。

大成は母が珊瑚に怒つてゐることを知つたので、我家に寢ずして他所で泊つて、珊瑚と夫婦の交はりを絶つてゐることを見せたが、それでも母の氣持ちはなほらなかつた。何かにつけて怒り罵るのは皆珊瑚のとばかりであつた。大成は、

「妻をもらふのは、舅姑につかへさせるためなのだ、こんなことで何が妻だ、」

と云つて、たうとう珊瑚を離縁して、老嫗をつけて親里へ送らしたが、村を離れようとする時珊瑚は泣いて、

「女と生れて人の妻となることができないで、どうして両親に顔があはされやう、いつぞ死ぬるがましだ、」

と云つて、袖の中から剪刀を出して喉を突いた。老嫗はびつくりして剪刀をもぎとつたが、血は傷口から溢れ出て襟を汚した。老嫗はそれで珊瑚を大成の叔母にあたる王と云ふ家へ伴れて往つた。王はやもめぐらして夫はなかつた。珊瑚はたうとうそこにあることになつた。

老嫗が歸つて來ると大成は、この事情を隠してゐるやうに云ひつけたが、母がさとりはしないかと思つて恐れた。で、數日して珊瑚の傷がすこし癒えかけたと云ふことを知ると、叔母の許へ往つて、門口で叔母に、

「叔母さん、あんな者を置いちやいけない、おんだしなさい、」

と云つた。叔母は、

「まア、まア、門口でそんなことを云つてはいけない。お入りなさいよ、」

と云つたが、大成は入らないで、

「おい、珊瑚出て往け、こんな所にあてはいけない。出る、出て往け、」

と云つて怒鳴つた。間もなく珊瑚は大成の前に出て來た。

「私にどんな罪がございませう、」  
大成は云つた。

「お母さんに仕へることができないぢやないか、」

珊瑚は何か云ひたさうにしながら何も云はないで、俯向いて嘸り泣きをした。その泪には色があつてそれに白い衫が染まつたのであつた。大成はいたまじさにたへないので、云はうとしてゐた詞もよして引返した。

それから又二三日して、母は珊瑚のことを聞き知つた。怒つて王家へ往つて汚い詞で王を誹めた。王も威張つて負けてゐなかつた。かへつてさんざんに母の悪口を云つた。そのうへ、

「嫁はもう出てゐるぢやないか、まだ安家のなにかになるのですか、私が自分で陳家の女を留めてゐる、安家の嫁を留めてゐるのぢやないよ、なんで他の家のことに口を出すのです、」

母はひどく怒つたが王の云ふことが道理になつてゐるので何も云へなかつた。それに王の勢が盛であるから、だんだんしよげて来て大聲に泣きながら返つて往つた。珊瑚は心がおちつかないので他へ往かうと思つた。

その時、王の姨にあたる老婆があつた。それは沈の姉であつた。年は六十あまりであつた。子供が亡くなつて一人の小さな孫と、寡婦になつた嫁との三人で暮らしてゐたが、せんに珊瑚をかはいがつてくれたことがあるので、珊瑚はたうとう王の家を出て姨の所へ往つた。姨は故を聞いて、

「妹のわからずやにもほどがある、」

と云つて、そこで珊瑚を送り還さうとしたが、珊瑚は、

「それはだめですよ、」

と、歸つて往けない事情を頼りに云つて、

「どうか、此所に来てゐることを云はないでください、」

とたのんだ。そこで珊瑚は姨の家にあることになつたが、その容子は姑に仕へる嫁のやうであつた。

珊瑚には二人の兄があつた。兄は珊瑚のことを聞いて憐れに思つて、家へ連れて来て他へ嫁にやらうとした。珊瑚はどうしてもきかずに、姨の傍で女の手仕事をして生計をたててゐた。

大成が細君を離縁してから、母は多方へ嫁をもらふ相談をしたが、母親がわからずやのひどい人であること云ふことが世間の評判になつたので、何處にも嫁になる者がなかつた。

三四年して大成の弟の二成がだんだん大きくなつて、たうとう先に結婚した。その二成の細君は臧と云ふ家の女であつたが、氣ままで心のねぢけたことは姑にわをかけてゐた。で、姑がもし頬をふくらまして怒つたふうを見せると、臧は大聲で怒鳴つた。それに二成はおくびやうで、どつちにもつかずにおづおづしてゐたから、母の威光はとなくなつて、臧にさからはないばかりか、かへつてその顔色を見て強ひて笑顔をして機嫌をとるやうになつた。しかし、それでも猶ほ臧の機嫌をと

ることができなかつた。

臧は母を婢のやうに追ひつかつたが、大成は何も云はずに惟だ母の代りになつてはたらいだ。器を洗ふことから掃除をすることまでも皆やつた。母と大成とはいつても人のゐない所へ往つて泣いた。間もなく母は氣苦勞がつもつて病氣になり、たふれて牀についたが、便溺から寝がへりまで皆大成の手をかりるやうになつた。それがために大成も晝夜睡ることができないので、兩方の眼が眞赤に充血してしまつた。そこで弟の二成を呼んで代りにやらせようとしたが、二成が門を入つて來ると臧がすぐ喚びに來て伴れて往つた。

大成はそこで姨の家へかけつけて、

「見舞つてやつて下さい。」

と云つて涙を流しながら頼んだ。その頼みの言葉の畢らないうちに、珊瑚が幃の中から出て來た。大成はひどく慚ぢて、黙つて出て歸らうとした。珊瑚は兩手をひろげて出口にたちふさがつた。大成は困つてその肘の下を潜りぬけて歸つて來たが、そのことは母には知らさなかつた。

間もなく姨が來た。大成の母は喜んでゐてもらふことにした。それから姨の家から一日として人の來ないことはなかつた。そして來れば旨い物を送つてよこさないことはなかつた。姨は家にゐる寡婦の嫁にことづけをした。

「此處ではひもじいめに逢ふやうなこともないから、もう何も送つて來ないやうにせうね。」  
しかし姨の家からは缺かさずに物を送つて來た。姨はそれをすこしも食はずに、のこしておいて病人にやつた。

大成の母の病氣はだんだんよくなつた。姨の孫がその母親に云ひつけられて、おいしい食物を持つて病人の見舞に來た。大成の母は歎息して云つた。

「賢いのね、嫁は、姉さんは、前世でどんな善いことをしたのでせう。」

姨は云つた。

「お前さんが出した嫁は、どうだつたね。」

大成の母は云つた。

「あア、あア、それはね、夫己氏のやうに、ひどくはないが、でも、どうしてお宅の嫁にかなひませう。」

姨は云つた。

「嫁がゐた時には、お前は苦勞を知らないであられたし、お前が怒つても、嫁は怨まなかつたし、嫁があるにこしたことはないぢやないか、」  
大成の母はそこで泣いて、そして珊瑚を出したことを後悔してゐると云つて、

「珊瑚はもう他へかたづいたでせうか、」  
と訊いた。姨は云つた。

「知らないが、ね、詮議してみよう。待つておいで、」

二三日して大成の母の病氣は一層良くなつた。姨は家へ歸らうとした。大成の母は泣いて云つた。

「姉さんがあなくなつたら、私は死ぬるのですよ、」

姨はそこで大成と相談して、二成を分家させることにした。二成はそれを臧に知らした。臧は氣を悪くして大成と姨に悪口をついた。大成は良い田地をすつかり二成にやりたいと云つた。臧はそこで機嫌がよくなつたので、財産を分配するに用する書類をこしらへた。

姨はそこで始めて歸つて往つた。翌日になつて姨は車を以て大成の母を迎へにやつた。大成の母は姨の家へ往つて、先づ、

「嫁に逢はしてくださいよ、」

と云つて、ひどく甥嫁を褒めた。姨は云つた。

「あの子はいくら善いと云つたところで、すこしも缺點がないと云ふことはないよ。それは、ただ私がゆるしてゐるからだよ。お前さんに、もし嫁があつて、家の嫁のやうであつても、たぶん世話になれまいよ、」

大成の母は云つた。

「あんまりですわ、私を無神経だとおつしやるのは、私には目も鼻もありますよ、物の善い悪いが解らないことはありませんよ、」

姨は云つた。

「では、珊瑚のやうに出されたら、お前のことを何と云つてるだらうね、」

大成の母は云つた。

「悪く云つてるでせうよ、」

姨は云つた。

「ほんとうに自分の身を振りかへつてみたら、悪く云ふことはないから、なんで悪く言ふものかね、」

「しかし、どんな人にも至らないところがあります。珊瑚も賢人でないから、悪く言つてると思ふのですよ、」

姨は云つた。

「怨むはずのものを怨まないのは、その人の心が解るし、往つてしまつても良いものを往かないのは、かはいがつてゐることが解るのだよ。あの食物を送つて来てめんどうを見たのは、私の嫁でなくて、お前の嫁だよ、」

大成の母は驚いて云つた。

「なんですつて、」

「珊瑚は長いこと此處にゐたのだよ。あの送つてくれた食物は、皆あれが夜績でのこしたものだよ、大成の母はそれを聞くと涙を流して云つた。